

私本太平記

筑紫帖

吉川英治

青空文庫

瘡ぎやく

妙な噂が立った。

それも宮中からである。正成かんそう諫奏の直後だった。

「河内守が乱心した」

「いや気鬱きうつの程度だとか」

「何、そうでない。君前にてあるまじき狂語を吐き、ために謹慎を命じられたものだそう
な」

「さよう。自分の聞いたところもそれに近い」

と、いったような臆測まじりの風聞ふうぶんだった。

公卿目、公卿耳

と、よくいわれる。

宮廷人の間には、その環境からも特有な感覚をみなもっていたらしい。正成の諫奏は、
内容が内容だけに、そのおりの侍座じざ以外には、かたく口を封じられたが、それですらもう

このていどには六位ノ蔵人、外記、内記あたりの者にはさきやかれていた。

事実、あのとき。

逆鱗げきりんはたしかであつた。

いかに御心では、

「笠置かさぎいらいの正成」

と、特別なおいたわりはあらせられても、あまりな正成の直言には、おむねも痛く、では御不快を禁じえなくなれたにちがいない。——正成をのこして、ついと謁見えっけんの御座よざをお立ちになつてしまった御氣色みけしきにみても、お腹立ちのほどは充分に窺うかがわれる。

すぐあとについて、坊門ノ清忠たち列座の公卿も、みかどのこもられた昼の御殿おとどへと、ぞろぞろ伺候して行つた。

しかし彼らは、正成のために、逆鱗をなだめようとしたわけではなく、むしろ正成の罪科しかりからずとみて、

「廷尉ていゐのたわ言、いかにとはいえ、このままには打捨ておかれません。わけてお味方の結束しよくばつを第一とする今。重罰じゆうばつに処しよすべきものとぞんじまするが」

と、みかどのお怒りいかに乗じて、正成の処置を仰ぎに出たものだった。

「……………」

後醍醐はなかなかおこたえにならなかった。

豪邁げうまい、英気、また稀まれなほど御自尊のつよい天皇ではあらせられたが、ときにより御

反省もなくはない——。それが一廷尉正成にがんと鉄鎚てつづいをうけたようなお感じであつた

としたら、正成を罰するぐらいでは、容易にお胸の解消にはならなかったであろう。——

ややあつての仰せには、こうあつた。

「正成はただではない。……清忠も言ったな、氣鬱きうつの症しょうだと。……おそらくはひどい氣鬱
なのだろう。しばらく病養を命じおくがいい」

また、口外はつつしめ、ということも後醍醐から出た御注意だった。公卿たちは意外な
感にうたれたが、みことばである、謹んでひきさがつた。

朝廷は多忙だった。——次の日には、北畠顯家あきいえがおいとま乞ごいに参内していた。

顯家はこのたびの功で、位階はもちろん、鎮守府大將軍の号に昇格され、ちかく奥州の
府へ帰任することになっている。

東国や奥州地方は、そのごいよいよ穏やかでない。——正成の一族楠木正家も先に派遣
されて、常陸ひたちにあり、東北朝廷軍の中心になっていた。——正成の処置に、みかどが御愼

重なのは、ひとつには、それにもよるか、公卿たちはあとで思いあたっていた。

顯家の奥州軍は、はや、都をひきはらって、みちのくへ帰る——と町ではさかんに沙汰されているのに、

「左中将どのは、まだか」

「まだ播磨^{はりま}への御発向にはいたらぬのか」

と一面では、しきりに、そのほうがいぶかられていた。

すでに三月である。

先発の先鋒^{せんぽう}軍は、とうに赤松円心や足利の与党がいる播磨地方へついているころだ。

——にもかかわらず、尊氏討伐の総帥^{そうすい}たる左中将義貞は、いまだに三条高倉ノ亭を立っていない。

今日もであつた。

「……ぜひもないわ」

その高倉の館を見舞つて、むなしげに二条の宮へもどってきた弟の脇屋右衛門ノ佐義助^{すけ}は、すぐ自分をかこんで問う諸将へむかつて言っていた。

「瘡病^{おくり}だそうだ……。数日らしいの兄者^{あにじや}の御病氣は」

「お会いなされましたので」

「いやお目にはかからん。なにしろおひきこもりなので」

「瘡病おこりとはまた」

「よりによつてまた、わるい折に御発病となつたものだ。……これまで、そのような御持病があるとは聞いたこともなかったに」

「ここの準備はできていた。いつでも出勢できるように、馬寄せ場から兵營全部が、ひたすら勢揃いの日を待機しており、いまはいささか待ちしびれの惰氣だきすら生じそうだった。

「おう、右衛門ノ佐すけさま」

「瓜生保たもつか。どこへ」

「千種殿ちぐさまで、例の軍状の御加判を願いに行てまいりました」

「おられたか」

「は」

「発向の遅延ちえんについても、なんぞ仰せがあつたろう」

「さて、困つたものよと、お唧かこちを洩くらされ、ひとつ、佐殿すけどのからでもいうてもらうしかあるまいかなどと、お焦立いらだちのていにござりました」

「わしから何を」

「ご意見を」

「たれへ」

「おそれながら」

「兄者へか」

「さようでしかござりますまい。そのへん、よくは存じませぬが」

右衛門ノ佐義助^{すけ}は、ちらと顔いろを変えた。——このごろ彼の耳へも入っていたことがある。

勾当^{こうとう}ノ内侍^{ないし}の噂だ。

兄が、なかなか腰をあげないのは、内侍の愛に溺^{おぼ}れているのだ……という京^{きよう}雀^{すずめ}のもつばらな取り沙汰なのだ。

義助は馬鹿ナと笑っていた。けれど千種忠顕までが、そう考えているとしたら、あるいはほんとなのかもしれない。しかりとせば、言語道断である。

「おいつ、外記^{げき}、もいちど馬を曳いて来い」

羽川外記に口輪をとらせ、彼はまた二条兵舎の門を出て行った。すぐ高倉ノ亭へ行くつ

もりだったが、念のためと思い直したものらしい。

「頭とうノ殿どの（忠ただ顯あき）にはおいででございましょうか」

と、千種家の門で馬を降りた。

そして、忠顯との話がつきぬまま、加茂川べりの亭で、宵の頃まで、つい飲んでいた。

「……麗子」

呼ばれた気がする。

勾こう当とうノ内侍は「はい」と胸でいつてみたが、耳を澄ましたのみなのである。

麗子とは、彼女の元からの名であつた。

義貞がいうには、いまは後宮にいる身でもないに、なお内侍とは妥た当とうでない。これから
は麗子と呼ぼう——と、三条高倉亭の奥では、そんなはなしも二人の間にできている。

この幾日、わずか十日にもまだみたないが——彼女は生きがいの中にいた。わがものと
呼べる夫を得、自由を得、またほんとの男の熱愛にも燃やされて、花開く夜の体を初めて
自分のうちにも知った。そのよろこびは、うつつない泉に始終せせらがれている姿のよう
で「——麗子」と義貞に朝夕よばれるさりげないことまでが、いちいち彼女の琴きん線せんには、

こころよい語感になって、雌蕊^{めしべ}の命をふるわすのだった。

「……………」

今宵、彼女は文机^{ふづくえ}のわきに、小さい土炉^{どろ}を置いて、薬湯^{やくとう}をたぎらせていた。——そしてこれは徒然^{つれづれ}がちな宮中ではよくしていた習性から、さる手書^{てがき}の「古今和歌集」をお手本として手習いしていた。

「……?」

やはりお呼びかしら?　しばらくすると、彼女はまた筆をおいた。

「そろそろ、お薬湯もさしあげるところ」

薬盃^{やくわん}へ熱いのを注ぎ、彼女はそれをささげて、すぐとなりの病間へそつと立って行つた。温い^{ぬる}病臭が灯かげをたちこめ、枕の人は、何も知らぬらしくよく寝入っていた。

が、人の気配に、義貞はすぐ目をさました。そして自分をさしのぞいていた彼女へ、にっと、笑顔を作つて、

「いたのか」

と、つぶやいた。

「お薬湯を……」

「もうそんな時刻か」

床のうえに起き直つて。

「あ、汗をかいだ。肌を拭こう。麗子、鈴を引いてくれい」

遠くで鈴が鳴つた。

小侍が、廊の橋をかけてくる。

耳みみ盥だらひ

に湯をといいつける。調ととのうと、

几帳きちようや壁代かべしろ

で注意ぶかく風ふせぎを立て、彼女は、義貞に肌をぬがせた。そして、熱いしぼりで義貞の背や腋わきを拭きまわつた。何か、張合いのある女の善事を励むみたいに、かいがいしかつた。

数日前から、義貞はふと、不規則な熱と悪寒さむけを訴えていた。

瘧病おこり

だと医者はいう。

いまはそんな病名はない。「和名類聚鈔るいじゆせう」の病名部によると一名瘧病えやみとただ瘧ぎやくとも

いい、寒熱かんねつ、時ヲ措イテ振フ、とあるから今の流感に似て急性な症状でもあつたろうか。

噂は、嘘ではないのだつた。

——ところが、この夜、

「なに。ご病中だと。ならば御病間でさしつかえない。取次げ。通さんなら通るまでだぞ」と、表の方で、あらあらと、家臣たちをどなりつけていた者がある。

右衛門ノ佐義助^{すけ}だった。

すこし酒気もおびている。同夜、千種忠顕の邸で話しこんでいた彼。その足であつた。何か、兄の義貞について、腹をたてて来たものらしい。

そこの病間へ、

「ただ今、ご舎弟様が」

と、家臣たちのあわただし取次があつたときは、もう渡りの廊のあたりで、脇屋義助の大きな足音がしていたのだった。

勾当ノ内侍は、いや麗子は、まだ曠^はれては、一族の人と顔を合せていないので、

「私は」

と、いそいで、となりの間^まへ立ちかけた。

「いや」

義貞は、裳^もを抑^{おさ}えて。

「ここにおれ。居てもよい」

すぐそこには、右衛門ノ佐義助のいかつく坐りこんだ姿を男女は見ていた。さすが薬湯の匂いやこの病臭は、義助の不作法をちと鼻白ませたふうだった。——義助は仮病だと信じこんで来たらしい。それは、千種忠顕が「——仮病らしい」と彼に吹きこんだからだった。

「義助か。……昼も見舞うてくれたそうだが、このざまでの。……しかし夜中に、何事がおこつたのだ」

「別条ではござりませぬが、こよい千種殿のおやかたで、我慢ならぬことを耳にいたしま

いて」

「播磨発向の遅延はりまちえんだろうが」

「そうです」

「病には剋かてん。いかな義貞たりとも」

「ところが、千種殿は、笑うておられまいた。義貞ほどな武将も、女にはだらしがないと。……そして、自分が左中將の切ない恋を察して取りもったことも、また、せつかくな主上のおぼしめしも、これでは逆になった、仇あだになったわえ……と、しきりなお悔くやみ。義助として、黙ってきいてはいられませぬ」

「……で、そちは何とおこたえしたのだ」

「見とどけましょうと」

「見たろうが」

「その女性によしようですな」

「いや、わしが仮病か、仮病でないか、そのことをだ」

「それはわかりました。けれど千種殿のお疑いも、むりではない。時が時です。尊氏討伐を前にして、内侍の愛にひかれ、御門もとざしているとあつては」

「嫉やつかみだ、世間の口は」

「いや何であれ、ご病氣も嘘でないが、そこな女性と離れがたいお心もあるにはちがいない。それも余人なら知らず、三軍の上に立つお方がそれでは困ります。わけて河内守正成が、直々じきじき、主上へ御進言申したとかいう取り沙汰もある折に」

「正成が」

義貞のひとみに、ちらと猜疑さいぎめいた光がうごいて。

「なにを、主上へ？」

「さ、何かは洩れていませんが、もちろん軍沙汰のことでしょう。正成癡狂などと申す極

端なことをいう者もありますが、そうではなく、何か、非常な決意をもって、御諫奏に及んだらしく察しられまする」

「……ふム。……いや義助、とまれ讒者にとれば、わしが女色に溺れているなどは、よい口実になるだろう。正成も言いかねぬ」

「自分もそれを惧れます」

「よし、立とう。病を冒して、明日にでも播磨発向の途へ」

「えつ、お立ち下さる？」

「知っておけ。義貞、この女はぞつこん好きで好きでならぬが、さりとて軍を怠るものではない。そちまでがわしを虞氏に溺れた項羽のごとき愚将と見るな」

いうならば、武門生活はいつも剣の林の中に在る。

まちがえば、ここの猛者は不平にうごいて、いつ味方が味方を制裁に出る両刃の剣戟とならぬかぎりもない。――まして殺氣満々な戦時下だ。大将たりとその大将の座に、晏如と驕っているなどは、すこぶる危ないものであるぐらいなことは、左中將義貞ほどなもの、わきまえていないはずもなかった。

「御発向だぞ」

「明、三月六日」

「都門を立つは辰ノ刻」

右衛門ノ佐義助が、三条高倉を辞して、やがてまもない後である。この陣布令は、洛中に散在している諸武家の屯へ、触れ廻され、憂々の駒音が、夜どおし、都大路に鳴っていた。

もちろん、義助が帰ったあとの高倉ノ館でも、例外ではない。足もとから鳥が立つような準備に邸内は夜を徹していた。――が、なおまだ渡りの廊の彼方の一亭だけは、夜を惜しむひそけさだった。……暁まではと、几帳の蔭にすすり泣く黒髪のひとの恨みが細い灯影をいとど淡くし、義貞の膝を濡らしていた。

「わかつたな、麗子。……それとも、まだ得心がまいらぬか」

「い、いいえ」

「ならば、泣くな。日ならずして、凱旋する。その日を待て」

「……はい」

「ここは後宮でない。涙など武門では不吉とする。とりみだすのは」

「殿。お別れを悲しむだけではごいませぬ」

「では、何を」

「まだお病いたつき氣も癒いえきらぬお身で……。そのおからだでと思いますと」

「ぜひもない。これが武者というものだ。からだもつらい。そなたとの別れはもつとつらい。だが武門とはこうしたもの。……後宮は火宅とか、そなたは言ったが」

「ええ……」

「武家は常住、劍つるぎの中の起おき臥ふした。世の定まらぬうちは安心ということはない。いつでもどこかに敵を持つ。その覚悟なくては武家の女房とはなれぬ。いつそまた、そなたは後宮が恋しかろ」

「めつそうもない。むごい仰せばしでございます」

「女人は三界に家なしとか。むごいのは、そういう約束の世をこの地上に作つた人々だ。あわれとは思ふが、ぜひもない。……お、たれか来る。離せ」

足音は、家臣の群れだった。金属的なひびきがすでに彼らの鎧よろいいでたちを思わせる。――でも、憚はばつてか、廊の遠くで。

「殿、殿。……はや夜も白みそめて見えまする。疾とうお身みぎよ浄めのうえ、おしたくを」
「おうつ、いま参る。一同、外げ殿に揃ぞろうて待て」

義貞の声も大きかった。

しかし、遠ざかる武者ひびきへ耳をすましていた彼は、やにわに瘡病おこりのような発作で、彼女の白い濡れた顔を胸の下に抱きふせにかかった。とつさに、彼女のうけた彼の唇は乾いていて火みたいに熱く、羞恥もゆるしておかない気短なあららしい動作は、たちまち彼女に夢魂むこんのさけびをあげさせずに措かなかった。——それは後宮の火宅を出て、また剣つるぎの門へ嫁かした三界に家なきものの悲哭ひくとも歓喜ともつかない異様なまでの罪深いあえぎであつた。

半ば、この発向は、義貞の意地でもある。

病間やつ窶かれの翳かげに加え、眼はするどく、大鎧おおよろいも重たげに、

「陽ひも、久しぶり」

と、馬上、弥生やよいの空の下へ出たが、まだ氣懶けだるく、麗子のからだの香までが、心の奥にのこつていた。

しかし、二条、三条ノ辻、朱雀すじゃくの大路おおじと、諸所に勢ぞろいしていた万余の軍勢を一巡閱兵してまわると、ひたいは発汗に濡れて来て、もう彼女の存在など毛穴の一つにもとど

めてはいず、完全なる三軍の將義貞だった。

「止まれ」

里見義胤よしたねの一号令に、旗本隊はざつと一せいに騎を降りて、そして同じく、徒歩かちとなつて一人彼方へ行く義貞の背を見まもっていた。

花山院の仮皇居の前である。義貞は衛門まで進んで出陣の奏そうをよそながらお告げした。と、その門内からだった。

「おう、左中将どの」

「や、千種ちぐさどのか」

「ご快気の由、めでたい。今こんちよう朝、出陣と聞しめされ、天機もことのほかお麗うるわしく拝された。尊氏の首をみる御殊勲の日をお待ち申すぞ」

「お驢はなむけの辞、かたじけない。——じつは瘡きずを病んで、まだ少々病余にはござれど、武士の一分ぶん、押して今日発向つかまつる。仮病にてはあらざりしことも、いつか上じようぶん聞に達しおかれない」

「はははは」と、忠頭はあしらつて——「夜前やぜん、右衛門ノ佐すけから何か聞かれたな。しかしお腹を立てられな。正成の諫奏、其許そこにたいして、容易ならざる儀を申しあげたと洩れ聞

いたからだ。万一にもそのような献言が君辺をうごかすにでもいたってはと」

「あの河内守が、何事を」

「聞かぬがよろしかろう。すでに正成は、きうつおも氣鬱重しとあつて、ごじんぼ御陣簿からのぞかれ、閉居を命ぜられておる」

「とるにたらぬ河内の一守護。聞きますまい」

「きようぼく喬木風にあたる。何しろ、御勲功のかつかく赫々たるほど、人の嫉やつかみもしかたがあるまい。わけて特に、くんちよう君寵義貞に厚しともあれば……」

「お、申し忘れた」

「なにを」

「三条高倉の家に、あわれなる女をひとりのこしてまいる」

「こうとう ないし勾当ノ内侍？」

「その内侍です。もし女の望みで、生家へ帰りたいとなら生家へもどしてやっていただきたい。もしまた、あなたが御所望なら千種どのお内へおひきとりくださるもよい」

「たわむお戯れを」

「いや、つくづく、女をあわれと思うてのことです。この十日余、かたじけない恩寵の賜

物には堪^{たんのう}能いたしたが、義貞は武人、ひとたび門を立ててみれば、生死のほどは測^{はか}りたい」

「……………」

「かたがた、このたびの遅延を、女色に溺れたためと、世上に風聞をたてられたなども不覺至極。……義貞の前には、尊氏があり申した。尊氏を討つのほか、何が今、男の意地^{いぢ}にあり申そうか」

「出来^でされた。それでこそ源家の嫡流^{はすかし}を辱めぬ新田殿と申されよう」

「おだてめさるな。はははは。おさらば」

義貞は自分を待つ騎列の方へ、さつさと大股を返していた。

河内^{かわちまりうた}鞠唄

春の気象としては、とんでもない一ト晩だった。雷があばれ、大雨が翔^かけ狂い、明けてみると、住吉の燈明台はまず無事でいたが、倒れた松の数は知れない。

こんな朝を、からくも漂い着いていた船もある。

大きいのはいずれ四国か西国船であろう。いまやこのへんは都の食糧輸送路として活潑な役をはたしていた。嘘みたいに、空は青く照りかがやき、余波なごりのしぶきもまだ白い浦曲うらわの諸所では、早や荷下ろしが始まっている。また、命びろいしたような態ていの旅人たちは、思い思いな方角へみな足早に散らばって行つた。

「はてな」

これもその一人。木妻こづまノ辻のあたりまで来て、附近の新開地的な変り方に、雲水うんすいは驚いていた。

「いや、やつぱりここだ。戦とはさて皮肉なもの。都に焦土しょうどがふえる一方、ここらは逆に繁昌していたわけか」

どこかでは、刀鍛冶の澄んだ鎚音つちおとがひびいている。行くほどに、「後藤助光」と木札を打つた一軒の門もながめられた。さらに行くと、もっと軒ばを接しあつた長屋の一聚落しゅらくが騒音とともにあつた。――染屋、革はぎ、飾り師、小札鍛冶こざね、弓師、鎧師よろいしなど、すべて武具の一大工廠こうしょうともいえる職人町の横丁だった。

「おい、坊主坊主」

「え?」

「どこへ行くんだ。こんなところへ無断でへえつて来ちやあいけねえよ。無用の者入るべからず、と長屋木戸に立つてる札が見えねえのか」

「おつ。……禿はげ鳶とびだったな、おまえさん」

「なにを」

「めずらしい」

「ふざけるな。乞食坊主に知り人はねえや。おれはここらの具足師をしめくくつている打物屋の鳶とび七つてんだ。てめえらに禿はげ鳶とびなんて馴れ馴れしく呼ばれてたまるか。さ、出ろ、木戸の外へ」

「わからぬかな、おれの顔が。おい禿はげ鳶とび、六、七年ほど前を思い出してみな」

「え。……？」

「柳りゅう 斎うさだよ、おれは」

「あつ、あの」

「当時はここの一軒に住んでいた具足師の柳斎だ。変ったなアこの界隈かいわいも」

「これや驚いた。変ったなあ旦那の方ですぜ。どうしてそんなお身なりに」

「笑ってくれ。命が惜しくなったんだよ」

「へえ、いま頃はさぞ、いぜんの主家へお帰ンなすつて、数々な功名も立てておいでだろうと思つてましたが」

「その足利殿がだ、あの太敗をかぶつたあげく筑紫落ちと落ちぶれ果て、しよせん、見込みもなくなつたわさ」

「だめですよ、だんな」

「なんで」

「しらを切ツたつていけません。きつと足利勢はまたもりかえしてくると、たれだつてそう言つてますぜ。それに、だんなが足利家の内でも古参な一色右馬介いつしきうまのすけツてえ人だつたことなんかも、あとでとびしち鳶七も聞いていませあ」

「そうかい。……」介はすけふくみ笑ひを持つたまま。「ま、どつちとも判断はまかせよう。

それよりはむかしの縁。朝飯でも言つてくれないか。ゆうべの風雨しけで命拾ひをして来たばかりなのだ」

むかしは柳斎と変名していた介すけの下で、手代をしていた鳶七である。

「お安いこと——」と、すぐ彼をわが家へともなつて、朝風呂をたて、着がえをすすめ、旧恩を思つてか、下へもおかなかつた。

「ほ。……なかなか豪勢な住居じゃないか。ええ禿鳶^{はげとび}」

「へへへ。おかげさまで」

「いくさつづきで福々というわけだな」

「なにしろ、具足師などはいくらいたって足りやあしません。それに近年では、禁裏御用も殖^ふえ、諸家からは、あばき合いで買占めに來るし、でしてね」

「儲かつてたまるまい」

「正直、こんな景氣がもう十年もつづいてくれるようにツて——ごらんなすつて、あの通り神棚へお神酒^{みき}を上げて朝夕祈つてゐるんですよ」

「ははは。たまらんなあ、そう祈られては。ここらだけではあるまいが、住吉^{さかい}、堺^{さかい}、そのほか諸所の鍛冶屋千軒、具足師すべてが、みな家藏^{いえくら}たててゆく一方、天下の武者は、殺し合いに殺し合い、やがて死に尽してしまうだろう」

「なアによくしたもんで」

と、鳶七は、妾らしい女が運んできた膳部の盃をさつそく取つて、右馬介へ酌しながら、「いくらでも、あとから人だねは尽きませんしさ、それにだんなの前ですが、武家もお公家もあんまり伶俐じゃありませんからね」

「ひどいやつだな」

「だって、だんなはもう武家をお^や廃めなすったんでございませよ。……それとも
と言いかけて、

「おい、あっちへ行つてろ」

と、鳶七は急に、そばにいた女をあごで追いやった。

「だんな」

「何だ」

「ほんとのことを仰つしやいよ。鳶七がこうなったのもあなたのお蔭だ、忘れちやいませ
んぜ。——六年前、ここの具足師長屋は柳斎だんなの持ち物でしたよ。それが六波羅滅亡
の兆^{きざ}しと一しよに、だんなはここへ戻らず仕舞い、あとはごっそり鳶七が貰ってしまった
というわけでき」

「そうだったかな」

「おかしなすつていらつしやるが、ひとつ、^{ずぼし}図星^あを中ててみましょうか」

「なんの」

「だんなの腹をさ」

「む、言ってみな」

「兵糧にはお困りなさるまいが、筑紫^{つくし}といつても、武器や打物には調達にもかぎりがある、また急場にもまにあわねえ。そこで住吉、堺の鍛冶、具足師から買上げて、ごっそり船へというお使いじゃねえんですか」

「どうしても、おれをまだ足利家の者としか見ないのだな」

「一朝^{いちよういつせき}一^{いつ}夕^{せき}に、あなたが足利家から離れるなんて、得心はできません。そうなんですよ。あなた。それならそれで、おうちあけ下されば、鳶^{とび}七^{しち}だって、一ト肌でもふた肌でもぬいでみせますぜ」

「いや、ちがう」

「ちがいましたか」

「腹を割つていうが、じつは察しのとおり、足利の大殿のお使いでは来たのだが」

「それごらんなさい」

「しかし武器の調達などではない。極秘裡^{ごくひり}に、河内の楠木どのに会うため渡つて来たわけだ」

「え。楠木さまへ」

「こう、打ちあげたからには、鳶七、口外するとゆるさんぞ」

「なんで。ですがだんな。ここらも今は河内守さまの御領内。油断はできませんぜ。いつたい何の御用向きなんで」

「それは訊くな」

右馬介は、まったく、あらたまつた容かたちになつて。

「たしか近くの四天王寺には、正成どのの御舎弟が陣所を構えていたはずだな」

「いえ、その正季まさすえさまは、つい先頃、おひきあげと聞いてますが」

「河内の本拠へか」

「筑紫からおいでなすつたんでは、まだ御存知もないでしょうが——都にいた正成さまも、新田將軍の追討軍からのぞかれて、いまでは河内の奥に御屏居ごへいきよだつていうこつてすぜ」

「屏居とはおかしいな」

「それがいろんな噂でしてね。みかどのお怒りをかつたのだとか、ご病氣だとか、中にはいや乱心だなんていう取り沙汰までありますが、ほんとのところは、どうも新田殿とうまく折合いがつかないための帰国だろうつていわれてるんで」

「そうか」

介は、ちょっと、考え込む。あらぬ方へそらした目は、何か、いちばい目的への希望に燃えたふうだった。

「そうか」と、もいちど同じ嘆きをくりかえして「――笠置かさぎいらいの功臣、千早金剛でもあれほど働いた正成どのが、兵庫合戦では後陣へ廻され、またこんどもそうだとあつては、さだめし不平も大きかろうな。何か領内の不穩は聞かないか」

「さ。そんな噂は耳にしませんが」

「鳶七。じつはこれが頼みだ。ひとつおれと一しよに、河内へ行ってくれないか。密々に正成どのへ近づきたい」

「始終、御用をうけたまわっているおとくい先。いつでもお供はいたしますが」

「とうに先では忘れていようが、六年前、龍泉殿（正季の屋敷）の武器庫の土用干しに、ひと夏、雇われていったことがある。――正成どのと会わぬうちに、そのときの具足師柳齋と、他に見やぶられてはまずいのだ」

「ようござんす」と、鳶七はのみこんだ。

「――じつあ楠木家からも、物具もののぐの繕つくろいがたまっているから諸職の職人二、三十人よこせといわれていたんです。だがこのところ、手不足なので、まだ十人ほどしかやっており

ません。至急、あと一ト組を連れてゆくことにしますから、その仲間^いに交じってお出でなすつては」

「たのむ」

介は深くあたまをさげた。

何かよほどな彼の使命らしい容子がそれにもみえる。もちろん尊氏の密命たるはいうまでもない。

その日、僧服をぬいで、彼は一個の職人に姿を変えた。あたまは、あれからも伸び放題な蓬^{ほうはつ}髪^{はつ}だった。それを洩染の布で粽^{ちまき}頭^{ずきん}巾^{きん}にしてつつむ。

いたって、のん気な旅にみえた。鳶七が連れた職人は十人ばかりで、中に交じって行つたのである。介は元々、具足師で飯をたべてきた者だし、職人^{かんぎ}氣質^{かたぎ}にそつはなく、誰あやしむ者もなかった。

ほどなく南河内へかかる。

赤坂城がすぐ目に入った。

南河内もここらまで入るとまったく山里の感で、世が戦国とは信じられぬほど、人の顔までが暢^のんびりみえる。

葛城 かつらぎ

金剛

も、今日は薄むらさきの奥にいて、ひどく遠くなもののように霞んでいた。

山腹や麓の部落には、さくらも桃も一しよに咲いてきたし、しもあかさか下赤坂の城、また、かつての水分みくまりの御本屋ごほんや（館たち）も、みな新しく建て直っている。

その御本屋の前には、大きな桜の木があつた。『駒つなぎ桜』と里人が呼んでいたものである。かつての年、正成がみかどの召めしにこたえて、みずからこの館たちも焼きすてて千早ちはやの上になてこもつたときは、もうこの桜も枯死したかと惜しまれたが、年々歳々、春が来れば、花はこの老木からまえにもまして万朶ばんだにたわわな精を咲かせた。——里人は火に会つたのに不思議なと首をかしげ、これも御武運のつよいせいだ、いよいよ御本屋様の瑞ずいし祥ようであろうなどと解つたようなことを言いあつた。

きのう、きょう。

その桜も散つていたが、散るのが愉しくてならないように、その下には、追われても叱られても、すぐ子供らが群れ集まつた。侍長屋の子やら近くちかくの農家の鼻タレたちである。騒いでいた男の子の一ト組が駈け去ると、こんどは女めのわらわ童の組だけで鞠まりをつき、鞠つき

唄をうたっていた。

朝ざくら

朝ざくら……

と、声をそろえ。

夕べのさくら

さくら咲く

桜の里の

さくら乙女子

正成は遠くにこれを聞いていた。奥の書院で法華経の写経をしていたのである。——筆をおき、自分も胸のうちで、唱歌をまねているうちに、ふと、写経机に涙をたれた。

焦土の都ではじつにさまざまな女を見かけた。売女、女盗人、女喧嘩、餓鬼のように髪ふりみだして女の羞恥しゆうちもわすれた生態を見るたびに、彼は彼女をこうさせた戦のどがに「あわれ……」と胸を痛めるのが常だったが、この里のさくら乙女子たちも未始終まで、あのきれいな声と平和な姿でいられるだろうか。

こころもとない。むずかしい。武家のみならず、主上をめぐる堂上の公卿までがあつた。

うでは……と思うにつけふと目が濡れてきたものだつた。

「……われながら」

正成は、自嘲を覚えた。

「人のことばのごとく、これはちと、自分の氣鬱きうつ氣味か」

彼が郷里へ歸つたのは、もう十日ほど前になるが、たれ知らぬまであつた。だが、つづいて四天王寺の正季まさすえもひきあげて来たことから、がぜん四隣の族党のあいだでは、いろんな論議や臆測がおこっていた。それらをなだめるのにも正成はひと骨だつた。

「おつかれでございましょう」

「お、久子か。いい日だな」

「まことに。……お茶なとひとついかがでございますか」

「もらおう。ところで、あの門前でうたっている童歌わらべうたは」

「お耳ざわりでございましたか」

「いや何、古い里歌さとうたでもなさそうなと思ったまで。たれが作って教えたのか」

「卯木うつきさまでございまする」

「卯木があの鞠歌まりうたを童たちわらべへ教えたのか」

「はい」

「……道理で」

と、正成は久子のいれた茶を舌にまろばすほど少しふくんで。

「卯木と元成との仲に生なした子も、しばらく見ぬまに大きくなつたな」

「もう四ツになります。……観かん世ぜ丸まるも」

「観世丸か、名もめでたい」

「夫婦ふたりして長谷はせへお礼詣りに行つて参籠さんろうしたせつ、いただいて来た命名とやら。何ぞ長

谷がへ願がんを結んでいたことがあつたのかもしれないせぬ」

「あの妹夫婦の願掛がんかけと申せば、武門の外に生きたい、人を樂しましめる芸道のみちに立ちたい、ということである。——このごろは口に出さぬが、いぜんにはよく申しておつた」

「ええ、卯木さまのお気もちもそれなのでしょう。この乱世、親はぜひもないが、子だけには芸能なと仕込んで、やがては自分たちの意志をつがせようとなすっているようでございます」

「皮肉だの」

「なぜですか」

「その観世丸が生れたのは、四年前、あの千早籠城の中だった」

「ほんに、わたくしたち初め、草や木の根を喰べていた中でしたのに、ようひとりの赤子でも、乳も出ぬ母御の手に、無事に育ったものでございますなあ」

「そうだ」

思い立ったように。

「久子。あとで山支度を揃えておいてくれい」

「お出ましですか」

「法華経一巻、あと、奥書だにすれば写経が終る。それをたずさえて山上の金剛山寺に
おさめ、参籠さんろうをも遂げてまいりたい」

「では七夜ななよも」

「いやほんの、ひと夜」

久子が去ったあと。写経の末に願意、年月、姓氏を書きいれた。そしてもう半年も前から精進していた他の数巻とあわせて経箱へおさめ、また自身、廊の端の掛樋かけひへ行つて、課業のすんだ硯すずりの墨を洗っていた。

「や、ここにおいでなされましたか」

「爺（左近）か。何用」

「ただいま御門そとへ、えらく大勢まいりましてな」

「大勢」

「はい。住吉の打物屋とびしち鳶七と申すのが、お頼みうけていた武具つぐろ繕いの職人どもをやつと都合つけて連れまいりましたとのことでござりますが」

「それなれば龍泉の屋敷へやれ。正季まさすえが頼みおいたものだろう」

「いや龍泉殿へまいったところ、正季さまがお留守とあつて、こちらへ来たもののように申しまする」

「留守か。では爺、そちが下赤坂しもあかさかの城へひきつれて行け。そして物具もののぐ奉行の佐備正安へ渡すがよい。さきにも諸職の工匠たくみが入っていること。正安が心得おろう」

「かしこまりました」

「爺、待て。わしもその間に山上の金剛山寺へまいるであろう。ひと夜留守になる。たのむぞ」

「これはまた」

と、爺の恩智左近は、仰山な目をみはつて。

「俄に、何の思し召で」

「いや、かねがねの所願、出来心ではない」

と、正成は笑った。

山支度はほぼ狩獵^{かり}いでたちのそれに近い。弓の代りに山杖を持っただけである。

納^{のうきよう}経^{のうきよう}の経巻は、これを、一族河原ノ入道の子、薦^{つた}王^{おう}という童武者に負わせて。

「久子、行ってくる」

「あ、おまち遊ばして。お供の郎党たちは何しておりますやら」

「いや、それにおよばんと、いま^{りようげん}現^{りようげん}や新左の言もしりぞけたところだ。案じるな」

「でも、正季さまも仰つしやつておられます。とかく兄君はお身軽すぎる、和泉、河内の

御守護、もちつと、重々しゆうしていただきたいと」

「正成に敵はないはず。正季が叱つたらそういうがよい」

「では、せめて正行^{まさつら}でもおつれなさいましては」

「正行は勉強部屋、そつとしておけ。また正時や三郎丸^{まさのり}（正儀）もさつきから大庭のす

みで、独樂^{こま}遊びに無心のような。あれもそのままがよい、そのままが」

彼はもうそとへ出て、駒繋ぎ桜を通りこしていた。一童子の背に巻^{かん}を負わせ、先へ山杖

ついでゆくいがさすがた蘭笠姿は、守護の御領主とはたれにも見えそうもない。画中の一道者どうじゃか山人さんじんのようである。

が、下赤坂城の近くへ来ると、ちょうど大手へ曲がりかけていた一群の雑人どもをうしろに、爺の左近が目ばやく気づいて、遠くの方で立礼していた。

おそらくは、爺の注意によつて、爺に導かれていたとびしち鳶七や以下の職人たちも、

「え、御本屋様か」

「あれが、正成様だつて」

と、あわてて礼を揃えていたものだろう。どれもこれも、首をあげて、あと見送りながら言っていた。

「えらくお身軽なもんだな。河内の殿さまは」

「お供といつたら童わっぱひとり連れたきりでよ。ねえ御老臣さま」

「いつもここの殿さまはああなんですかい。あれでどこへお出かけなんです？」

爺の左近は、

「ご参詣じゃよ」

と、それへ言つた。

ぶつきら棒な答えでしかなかったが、彼ら凡下ほんげの推量おしかりで、殿を軽んじるようではならぬと考え直したか、また自分からこう語り初める――

過ぐる年の千早、金剛一帯の攻防戦では、何万人が死んでいる。お館やかたさまには、諸所に遺骸を寄せて、そのご敵味方なくご供養されてきたが、今日も御自身写経の何巻かを山上の御寺みでらへ納めにおいでられる。――いやそんな御奇特ごきとくは一いつさい再でない。さきにも天野山金剛寺や観心寺やまた久米田寺などへも、同様な納経をしておいになつた。――すべてそれは一日もはやく天下泰平あんどう万民安堵の日が来るようにとの切なる御誓願ごせいがんにほかならない……。

爺は、わがおあるじを頌たたえることに得々となつて、そう、しゃべりつつづけていた。

くそおもしろくもねえ、と言いたげなソラ耳でいたのは一行の鳶七だった。それにつづいてはこの中に交じっていた右馬介である。――彼もこの老臣の饒舌じょうぜつなどへは面もむけていなかった。――そしてはや水分みくまり神社の見える山坂道のほうへ小さくなりつつある正成の姿へ、飛び出すような目をして、じつと見送っていた。

よそ者もの

「薦王^{つたおう}。あるけるか」

「もつと早くですか」

「そうそう。そちは正行^{まさつら}より一つ年下、わしなどには負けられんな」

薦王の父、河原ノ入道は、一族の正家に附随して、遠い東国の常陸^{ひたち}へ赴任しており、兄の九郎正次は、天王寺在番として残されている。母はいない。……で正成はそれとなく、日頃、あわれをかけていた。

しかしこのいたずら盛りは、今日しも正成の供にひとり選ばれて来たにかかわらず、目をはなすと、いつか正成のうしろにも見えず、とかく道くさばかり食っていた。

「はて。また」

正成は立ちどまる。そして遅れた彼の姿をうしろに見つけてほほ笑んだ。

上の水分^{みくまり}神社の桜も、下の山添い道の山桜も、散りぬいていた。花ビラの斑^ふの妖^{あや}しい舞が彼の童心を夢幻^{こうふん}と昂奮^{しぎやくてき}の渦にひきこむのか。または子供の野性^{いど}というものは、余りに美しいものへは嗜虐^{しぎやくてき}的に、かえって無性な暴に誘惑されて挑^{いど}みかかってみたくなるものか。

見ると、蔦王は、棒切れを持って、跳びかかり、跳びかかり、花の梢を打っては歩いて
 いるのである。そして白い花の吹雪が変化へんげにでも見えるかのように、ひんぷんと散り舞う
 物を相手に、独りで立廻りを演じたりしているのだった。

ふと正成の胸に、何かの書で見たたれやらの詩句がうかんでいた……

タマタモナ

適 伴フ兒童

落花二戯レ

闘ヒ去リ 闘ヒ来ツテ

ウタタ

転 風流

正成は彼を呼ばなかった。ゆつくり先へ歩いていった。

花なのではほ笑まれ、兒童なので、うたた風流、とも見過ごせたが、人間の子には本来、
 蔦王のしていたような性情が生れつきあるらしい。余りに完全なもの、熟うれきった美しい
 もの、また超然たるものを憎む。理由なき憎しみと、その壊滅を見んとする快感とにそそ
 られる。その天邪鬼あまのじやくな人心が大きく動いては、しばしば地上の大戦も呼ぶ。

藤原氏が亡んだのも、平家が亡んだのも、また北条氏が亡んだのも、直接打ったものは
 武力という棒切れだが、案外、それを望んだ意欲は民心という天邪鬼がさせた業わざだったか

もしれないと、正成は歩きながら考える。——そして現朝廷の危殆きたいがまた、それでなければ幸いだがと思うと、ふと道も暗いここちになった。

「おやかた様、おやかた様」

追っついて来た薦王は、ひとりで笑いこけながら——

「そっちへ行つては道がちがいます」

「ほんにこう参つては桐山へ行つてしまうな」

「おやつ？」

「どうした、薦王」

「あんなところに、野晒のざらしがすてである」

「野晒」

「ええ、人間の」

「捨てたのではなからう」

数日前の大雨に土砂と共に流されてきたものとみえる。洗われて真っ白になった一個の頭蓋骨ずがいこつが、木暗い崖こぐらすそに、半ば埋もれていた。

「薦王、拾って抱いて来い」

「え。あれをですか？」

山坂いくつ。肌は汗だが、山高まるほど、山気は冷々と毛穴にせまる。

「おやかた様」

葛王は始終うしろからしやべりかけて行く。持たせられた骸骨が不気味でならないものとみえ、

「この野晒は、どうなさるんです。上の金剛山寺まで持ってゆくんですか」

「む」

「それよりは、おやかた様、おとし、お坊さんをたくさん呼んで御供養なすつた戦死者塚が途中方々にあつたでしよ。そこへ埋けてやればよい」

「でもな……」

正成もぜひなく、たまにはそれへ返辞をしてやる――

「千早籠城から四年もたつて、ゆくりなく、正成の手に拾われたその白骨だ……よほど宿縁……御寺まで連れて行って、参籠のついでに、よう御供養をして上げようよ」

「だって」

葛王は、艶のない卵白色の物の眼窩を気味わるそうに手に覗いて。

「敵だか味方だかも分らないでしよ。こんな亡者」

「よいではないか、敵でも」

「敵は憎い。そうお思いになりませんか？」

「死ねばたれもおなじ相すがたになるのだ。おまえの父も、東国で戦っている。東国の野で野晒となるかもしれん。正成もまた死ねばそのとおりな物になる」

「武士の家に生れたからにはしかたがないと、いわれています」

「だがの、憎しみ合いは、生きてる間でたくさんだろ。死者とは業ごうを終ったひとのことだ。ほとけさまだ、そのなにもないきれいな相すがたを見るがよい」

「ちつともきれいいやありません」

「はははは、しかしもし、その白骨の人の妻なり子なりの手にそれが届けられたら、子は抱いて涙をそそぎ、妻は頬ずりもするであろう。どんなきれいなものも、そのきれいに
およぶまい」

葛王には自分に関係もないはなしに聞えた。道はへんてつもない谷間へ入り、また次の胸突きを先に見上げていた。

ここらの木暗こくぐらい所には、なお拾われない白骨が土や落葉の下にどれほどあることかわか

らない。正成の心耳には切々とその浮かばれぬものの鬼哭きこくがわかる。石も草も木も蕭しょうし
々ようと物みな哭ないているようで、しかもその幽鬼ゆうきがみな自分を指さして責め咥せささやく。

——千早の大将が来たよ

——正成が行くよ

——あのひとが千早にたてこもらなかったら、おれどもは死ななかったかもしれないよ
——敵のおれどもも討たれはしなかったろうによ

——死ね死ねとあの人は言ったのに、あの人はすまして生きているよ

——果てなく出世するつもりだろうよ。おれどもだけは浮かばれないよ

今日だけとは限らない。正成はこの附近の谷を通るといつも地下の声を聞く。もろもろな形なき物に足もとをまといつかれる。だから口に真言の秘経をとなえて通るのがつねであつた。

そしてまもなく頂上にのぼり着く。豁然かつぜんと、心がひらけ、夢魔むまから醒さめるのもつねであつた。十方の碧空あわぞらにたいして、恥じない自分をも同時にとりもどしていた。

金剛山寺こんごうせんじでは正成の不意なおとずれに、院主役僧いんすらまで、何事かと驚いたらしく、

「まえもつて、御登山をうかがっておりましたらお出迎えにも立ちましたものを」

と、客殿にこの風来な領主を拝して、ひたすら詫びた。

正成はかえつて気の毒そうに。

「いや何の。今日は日和ひよりもよし、所願の写経も終ったので、ふと思い立って来たまでのこと。かたい儀礼はやめてほしい」

「御写経を」

「む。本尊法起菩薩の宝前に納めおきとうて」

「それは御奇特な」

「かたがた、こよいは参籠さんろうのつもりでまいった。なにかと供華くげの用意などしてもらいたい」

「かしこまりました」

日は暮れて、沐浴もくよく、夕餉ゆうけなどのあと、正成は浄衣になって、転法輪院てんぽうりんいんの本堂に入った。途中で拾つて薦王つたおうに持たせてきた白骨は僧の手によつて燈明や香煙のうちに安置され、やがて、僧たちの供養が春の夜をかけて長々といとなまれた。

夜半になると、正成はひとりで籠堂こもりどうへ移つて夜をあかした。ほとけと共に明かした朝はそう眠りもしていなかったのに体もあたまも清々すがすがとしていた。これが自分だったと

思われるような生き身の味を久々に味わった。

「そうだ、ここにいて」

下山が惜しまれて、彼はその日も翌日もつい山上にいてしまった。心に深い傷手があり、それを医すためとしている正成ではなかったが、彼をひきとめる何かがここにあったとみえる。

「おやかた様、いつおもどりになるんですか」

「薦王か、そちは退屈そうだな」

「でも、水分^{みくまり}では、きつと御一同さまが、お案じでしょう」

「ほんに、それも思わぬわしはちとわがままだったな。さよう、そちは山をおりて、なお数日正成はこれにおると、その由、館^{やかた}へつたえておくがよい」

薦王をも、その日、帰してしまい、彼は籠^{こもりどう}堂でいよいよ孤独を愉しんでいた。さりとて西行法師の真似びを追うて安らげる自分でないし、また周囲の桎^{しごく}梏は、そんな逃げなどゆるさぬ時代とも知っていた。

だから彼がここで求めたのは、ゆるされるかぎりの、わずかな憩^{いこ}いに過ぎなかったろう。あるいは、帝に直^{ちよっかん}諫申しあげたあとも、その絶望から将来の必然を千々^{ちぢ}に悩んで、も

はや一個の力ではいかんともなしがたい苦悶の自己を、ここでしずかに処理しているのかともおもわれる。

するとすぐ、二日程して。

「や、薦王。……またもどつて参つたか」

「はい、仰せはおつたえ申しましたが、今日は卯木さまのお頼みで、これを」

「なに卯木から？ ……これはまた、短冊たんざくではないか」

手にとつて見ると、

春柳 はるやなぎ 葛城山 かつらぎやま に

立つ雲の

立ちても居ても

妹し思ふに

万葉の一つである。なるほど筆蹟は卯木だが、歌の意味は、妻の久子の胸の代弁だナと
うけとれる。——久子が書かず、卯木がこれをよこしたなどにも、女心のあわれが読まれ
た。

ある日、というのは、正成が金剛山寺へ登って行つた日——。龍泉の正季まさすえは、郎党八、九人に馬をひかせ、自身も騎馬で加賀田の山道をいそいでいた。

「この溪谷のかけはし棧橋もいぜんは毎日のように通つたものだが」

加賀田川を下にのぞくと、正季は供へ言つた。

「たれか先に走つて、甚内と申す者をよんでおけ」

道の上には、朽ちた山荘の門が見えて来た。吐雲齋とうんさい毛利時親は、そのごいペンもこの

山荘へは歸つていない。すでにあれからもう四年になる。

「おつたか、甚内は」

「ただいま山畑からこれへ連れまいります」

そこへ野良着の半農半武士ていの男がまもなく呼ばれて来て、

「これは、龍泉殿でござりましたか、どうもお久しいことで」

と、地にぬかずいた。

正季はすぐ言つた。

「甚内。——時親先生の大江家伝来の兵学書一切はおまえの手に預けられてあるそうだな」

「何の仰せか、俄かなことで、よう分りませぬが」

「まだ物忘れする年ではあるまい。過ぐる千早金剛の大戦中、ここもあぶなくなつて、お師の時親さまには、ついに山をすてていずこかへ去り、いらい杳^{よう}として御消息もなくなつた」

「へい」

「おまえら山莊の召使は、このへんの山畑をもらつて、あとに残つたわけだろう」

「さようで」

「しかし、ただ残されたわけではなからう。そのさい、老先生からこれだけはと、かたく託された物があるはずだ。その軍書一切はどこにあるか」

「ございません。そのような物は全く以てぞんじませぬ」

「とぼけまい、甚内」

と、正季は一通の書面をとり出して「――読め」と、彼の目のさきへ投げやった。

まぎれもない時親の筆蹟である。甚内はくりかえし読んでいた。時親がどこになお生きていたなども驚きらしい。書面には、秘蔵書全部の託送が正季宛^あてに書かれている。その所在は、いぜんの老僕甚内が承知のはずともしてあつた。

「わかつたか」

「申しわけございません。そのせつおあるじから、かたく秘事にしておけど、申しつかつておりましたため」

「いいわけはよい。はやくその在る所へ案内せい」

甚内は先に立ち、段々畑の下の長屋裏へ伴った。そして蓄備倉のような洞穴のおくを示した。荷梱にくりにして数個、冊数にすれば千巻の書物ともいえる。

正季はそれをただちに馬五頭の背に移させ、そして郎党数名を付け、

「すぐ老先生の許へお届けに行け。近ごろは洛外大江山に御隠棲ごいんせいのよし書面に見える。

吐雲齋と訊けばわかるであろう。確しかと御返事をいただいてまいれよ」

と、命じた。そして彼は龍泉寺の邸に帰り、あくる日、水分みくまりに兄の正成を訪うと、正

成は納経のため登山したとのこと。聞くと正季は、嘆じて言った。

「どうも近頃の兄上はどうかしたなあ！」

その足で、彼は、下赤坂城の見廻りに廻っていた。

城とはいえ、下赤坂はかつての砦とりでで、一時、ここは北条方に占領され、その湯淺勢に焼き壊こぼたれたのを修理し、また近ごろでは久子の兄、松尾刑部季綱ぎようぶすえつなの奉行でいまなお出丸や矢倉門などの手入れをしている状況だった。

足場の上で、大工左官たちを督^{とく}していた松尾刑部は、正季を見かけると、すぐ下りて来て。

「龍泉殿、御出仕^{ごしゅっし}か」

「おう、あなたも御精が出るな」

「いやどうも、一こう工^{はかど}が捗^{はかど}らんなでな」

「もつと人手をふやしたらよいでしょうに」

「お館へも、いつもそれを申し上げるのだが、おゆるしがない」

「なぜで」

「仰せには、春は百姓仕事がきりもなく忙しい。秋の收穫^{とりのいれ}はこれからの丹精にある。そのような野良の手を、城普請^{しろふしん}のために徴発^{かりだ}してはならんとあつて」

「それでは遅々^{ちち}と進まぬ道理だ。とかく兄上の御意志はわれらには酌^くみかねる」

「自分にも分らぬ。たとえば……」と、季綱は設計絵図をとり出して示しながら「ここに二の丸を拵^{からめてもん}げ、さらに搦手門^{からめてもん}の上に、北曲輪^{きたぐるわ}を建て増し、また本丸には、多少、普請らしい工を凝^こらして、正成殿をはじめ、御台所や和子たちにも、河内和泉の御守護らしく、ここへお城住居を仰^こごうと申しあげるのだが、それも御気分^{みくま}に合わぬらしい。いまの水

分りで事足ると言っておられる」

「やがては、入にゆうどう道して、山林の一庵にでも籠こもりたい気でおられるのではないか」

「よもや」

「よもやとは思うがだ」

「それくらいなら、さき頃のような、思いきった御諫奏ごかんそうなどはなされまい」

「が、それは用いられず、堂上の笑いぐさとなり、みかどのご逆鱗げきりんにふれたらしくもある。……いらい、怏々おうおうとして、浮かぬお顔。……この正季にも、四天王寺を引払って、

河内へ帰れとのおさしずであつたには、むつとして、何でそのように新田や世上へ遠慮ぶかくなさるのかと、兄上と一ト論議も覚悟でこれへ戻つたが、さてあのお顔を見ると何もいえなくなつてしまう」

「まったく、あの御苦衷ごくちゆうのいろを見ては何もいえぬ」

「そして、諸寺への願文がんもんとか写経にばかり御専念とある。いまも水分みくまりで聞けば、きのうは金剛山寺へお登りとか」

「ム。爺の左近もそのように申していたが。……いや、その左近でおもい出した、きのう、住吉の打物屋鳶とびしち七が、これへ十人ほどの下職を連れて到着している。かねて龍泉殿から

のごさいそくにもかかわらず、つい遅れておりましたかと」

「お。やつと、あとの職人どもをつれまいりましたか」

そこで刑部と別れると、正季は曲輪くるわの内へ入って、物具奉行の佐備正安さびに会い、やがてまた、ただ一人で、外曲輪そとぐるわのガタガタする長い板廊下を踏んで、物具倉ものぐらと共にあるだだッ広い武者溜りむしやだまの床ゆかを覗きに行つた。

その一ト棟むねは、大きな工房と異ならなかつた。数十人の武具職人が見える。黙々とみな背をかがめて仕事していた。

工房といつておこう。工房の大床おおゆかのわきには、監督役人のいる袋部屋もある。

一大戦のあとでは、武器武装の補充や繕つくろいもたいへんな量と仕事になるわけで、どこの城や根拠地にもこういう武器廠ぶきしょうはあつた。ここなどはまだ小規模な方といつてよい。

外には鍛冶のふいごや鎚つち音おともしていた。床場ゆかばの内では、弓の弦師つるし、具足の修理、くさずりの縫工ほうこう、研師とぎし、塗師ぬし、革裁かわたち、柄巻つかまき、あらゆる部門の職人が見える。そして大きな切炉きりろの膠鍋にかわなべから膠の煮えるにおいと薪まきのいぶりがむうとするほどな物をたちこめていた。

「や、これは」

正季を見ると、溜りの役人二、三名がとび出してきて。

「黒^{くろ}緘^{おと}しの御一領は、昨日仕上り、龍泉の方へ届け申し上げておきましたが」

「ム、見た。だいぶここは手が揃ったな」

「これもきのうのこと。住吉から新たに十人ほどの具足師が来て加わりましたので」

「鳶七は帰ったのか」

「忙しげに、すぐ住吉へ立帰りました。龍泉殿へは何とぞよろしくと、申しまして」

「新しく入った職人とは」

「は。……あれにありまする一ト組、またこちらで、膠^{にかわ}着^{わづ}けをしている者、そしてむこ

うの隅で鍛^{しこ}縫^ぬいをしているのもきのうから参った者で」

指さす所へ、正季の目がくばられ、順にそれらの職人を眺めていたが、ふと、彼の注意をひいた者があつた。

「見たような？」

と、思つたのである。

その男は、渋色の粽^{ちまき}頭^{ずきん}巾をかぶつて、汚い布^{ぬの}直^{ひた}垂^{たれ}を職人結びに後ろでむすび、片膝^{かひざ}たてて革^{かわ}胴^{どう}の草^{くさ}摺^{すり}を大きな動作で縫つていた。――横顔でしかないので正季のひとみ

が待つようにじつと見てみると、なにかのはずみで彼の顔もこつちを向いた。——しかし正季が思っていた人間とはそれは違っていたらしい。まもなく正季は立ち去っていた。

「……………」

眼のすみで、それを知った男の容子には、ほつとしたいろがみえる。モミ上げを焼きちぢらし、顔も何かで汚していたが、これが右馬介であることはいうをまつまい。

さとられたかな？

と彼は一とき腹をかためてはいた。しかし、龍泉殿の生き一本いっぽんな気性は彼も知っている。取り返しのつかぬことはしてはならない。——やはり正成に直じき々じき会きう機会を得るまでは

——と、南無三、わからぬことを密ひそかに念じていたのだった。

が、ここにいたのではいつその機会をつかみ得よう。きのう老臣の恩智左近も言っていたし、またその人の後ろ姿を目に見てもいた。正成はいま金剛山寺にのぼっている。はや下山の途にあるか、なおまだ山上か、そこは冒険だが、あわよくば正成に会える絶好な機縁が、絶好な山中において、めぐまれぬことでもあるまい——。

彼は仮病を思いついた。

翌日、係の武士へ持病を訴えて暇をとり、里へ出て探ってみると、正成はまだ下山した

様子はない。さてこそやはり機会は今だったと、足を早めて、彼はたちまち金剛の山上をさして急いでいた。

まったく人目のおそれない山中へかかると、身なりはどうであれ、彼は、本来の武士一色右馬介に返り、その人になりきっている。

いつか千早川の水音もうしろに消え、下赤坂もはるか下だった。金剛の長い山裾は石川かわちだいらから河内平へかけてまで、模糊もこと、すべて天地いちめんが春の陽炎かげろうと化している。

「お。……おちつこう。これからは大役だ。自分には荷がかりすぎるほどな大役」

すけ介は、ひと息ついた。

ひんやり汗が沈む。自然、山のしじまが彼に物思わせる。

わけてこんどは主の尊氏から「介！すけ そちには多年のあいだ、縁の下の力持ちばかりさせて来たが、おそらくはこんどを以て、そんな蔭の働きも、働き仕舞いと思うてよかろう。それほどな大事だぞ、しかと頼む」と、あのお主あるじにしてもめずらしいほど沁々しみじみとした仰せ付けをうけて来たこともある。

「……果たして、そのお望みが、成るか成らぬか」

彼は自分を知っている。自己の器量があやぶまれた。主の尊氏でさえが、当代唯一の人

物と観ているほどの正成にたいして、よくその人を説得して、尊氏の意のあるところを徹底させるほどの力がこの自分にあるかどうか……。

「思えば、足利家に武士も多いが、おれほど奇道から奇道をあるいた者はいない。よくよくふしぎな主従、ふしぎなおれという家来」

その結びつきは、幼少にまでさかのぼる。

幼時の尊氏に傳もりやく役として付き、いらい尊氏が十八歳の初上洛の旅の日から今日まで、影と形のように、離れたことはない。いや体は他の家臣よりも、側にいる日ははるかに少なく、どこか遠い所にいながら、始終、影と形のような不即不離の役目ばかりして来たのだった。

おあるじの隠し子、不知哉丸いさやと藤夜叉ふじやしやのことでも、どんなに長い日蔭の日を送ったとか。いらい具足師の柳斎となり、主家の隠密をも果し、やがて、このごろの御陣となつても、何か暗中を翔かける使命にばかり向けられていた。——武士でいながらほとんど戦場には立たされたことがない。——そしてまたも、こんどは「これがそちの、さいごの働きとも思え」といわれて来た重い役目なのである。

「とまれ、いちかばち命がけ。当つてみるしかみちはない」

とうに腹はそれだったが、しかしもしこんな、いわば敵国の中で、この命を落したら、
たれが右馬介の一生などを知つて、念仏の一つでもとなえてくれる者があるだろう。ふと、
そんな思いにも吹かれたか、介は独り^{すけ}で首を振った。そしてあらたな勇を持ち直したよう
に、身をおこすやいな、急にまた足を早めだした。

すぐ、彼の姿は、大きな杉と杉との縞目^{しまめ}の中を通つていた。——そこを過ぎて、次の山
蔭へ入ると、しばらく姿は見えなかった。

ところが。——やがてというほどもないうちに、杉林の道をもう一個の人間がいそぎ足
に歩いて行つた。大きな男である。狩衣の袖をたすきに結び、反りを打たせている太刀腰
など、ただの急ぎ方ではない。

男は一時、崖の鼻の曲がり角に止まり、入念に先の道をうかがっていたが、突如、駈け
出して、手を振つていた。

「おおいっ。……待てっ」

^{すけ}介は、振り向いた。

「……っ？」

呼ばれたと知ったときは、もう後ろの男を見ていたし、おそろしく迅い男の足も、とつ

さに、彼の用心をかためさせていた。

「わしかね」

さりげなく見せて、まずいうと、男もまた、にやにやと、馴れ馴れしく。

「どこへおいでなさる？」

「大和へ抜けます」

「へえ、わざわざ金剛越えですかい」

「途中、修堂寺に用もございますんで」

「はてね、あそこにはいま、誰も人はいないが」

「そうですか」

「山伏寺だ、というよりも寝小屋寺だ、峰入りで、この間から閉まっている」

「じゃあ廻り道だけムダでしたかな」

「そうだね、よくは知らねえが、おまえさんの考えていることなどは、まずムダだろうよ。

素直に麓へもどりなせえ」

「ご親切に」

「冗談をいつてるのとはわけがちがうぜ。おい」

男は二、三步先へ出て、そして、ぐるりと向い直った。

「下りろ、麓へ」

「どうしてです」

「どうたつて、てめえは住吉から来た具足職人のはずじゃあねえか。どうしてこんな所へ用があるんだ」

「……………」

「ええ、おいつ」

と、介の胸板を一つ突いて。

「下赤坂のお城からこの御領内には、忍おしノ大蔵だいぞうという御家来さまが眼をひからしているつてえのを、てめえ知らずに入りこんできたのか」

「もし、ちよつとお待ちなすつて」

「いいわけはよしなよ。ただの御家臣ならごまかされようが、おれは元々、六波羅ほうめの放はな免んがしち頭あたまもしたほどの男だ。正成さまを慕つて、そのごはここで御奉公している身だが、いぜんから持っているおれの眼力に狂いはねえ。てめえが根からの具足職人か、他国から入つて来た怪しい奴かぐらいなことは一ト目でわからあ」

「ム。……そうか」

「何、そうかだって」

「しかたがないじゃないか。そう分ってしまったものは」

「観念したのか」

「しないわけにゆかない。しかし大蔵とやら、おれは決して、きさまの疑うような敵意を抱く物騒な人間ではない」

「では、何者だ」

「ぜひないゆえ打明けるが、正成殿に密々お会いしたいことがあって、じつは金剛山寺こんごうせんじへまいる途中だ。見のがしてくれ」

「ならねえ！　そう聞いちやあ、なおのことだ。とにかく、もいちど下赤坂まで降りろ。ごたくは、お城の内で聞いてやる」

と、また肩先を突いてくる。

一、二度小突かせておいて、次のせつなを、介はすばやく、身をひねって、投げを掛けた。大蔵の体は大きくもんどり打ち、何か吠えながらひどい勢いでまたぶつかって来た。腰の物を抜いたと見て、介はあとへ跳とんだが、さはなくて無手で武者ぶりついて来たもの

である。介は充分な余裕のもとに格闘してついに相手を膝の下にねむらせてしまい、溪流の崖へむかつて蹴落した。もとより殺す気はないのだった。

ただしかし、こういう意外な邪魔者も出て来たとなると、もうぐずぐずはしていられなかった。彼はあとも見ずそれからの道を頂上へと喘ぎ通していった。

昼の月

正成はその日、麓へ帰ることにきめていた。

なろうことなら、なお当分は山上にいて、静かに、写経でもしていたらと、なかなかこころを立つのも惜しまれはする。けれど一面、水分みくまりの館たちに留守している妻の久子の心を思うと、それもあわれでならなかった。

妻にすれば、長い戦陣の先からやつと帰つて来たばかりの良人であろう。それ以前といえば、あの千早の籠城やら一家の離散であつたし——せめて、戦いくさのない日だけでも、家庭の中に良人を見ていたいと念じているにちがいない。——幼い子らのためにも、父の姿を家のうちにと祈っているにちがいなからう。

薦王^{つたおう}に持たせてよこした卯木^{うつき}の短冊にも、

春柳　かつらぎ山に

立つ雲の

たちでも居ても

妹し思ふに

と、万葉の一つに寄せてそれとなく留守のわびしさを訴えていた。もちろんそれは久子が卯木に頼んで書かせた物と正成には分っていたし、あらわに、早く帰って下さいなどと言っていないだけに、よけい不慙^{ふびん}もまして、すぐ下山^{げざん}する気になったものだった。

「これはまた、俄な——」

と、金剛山寺^{こんがうせんじ}では彼の下山と聞いて、急に、その日の昼餐^{ひるげ}を、朝原寺の一房にととのえて、院主^{いんじゆ}がお相伴^{しやうばん}に坐り、役僧以下も給仕に付いて、

「ぜひ、またのお登りを」

と、礼をつくした。さらには一山をあげて、正成の帰路を、下赤坂まで送って行こうとするらしい支度でさえあったが、正成はかたくそれを断わった。

「ぜひまたまいるが、大勢しての送り迎えなどは、かえって迷惑。途中そぞろな愉しみも、

愉しいものでなくなってしまう。儀礼は一切やめてほしい」

「さようではございましょうが、ご領主にたいしまして、余りに非礼とぞんじますれば」

「いやいや、領主としてまいる日には、それと通達してまいる。——かつて千早籠城のみぎりには、ずいぶんこの御寺も拝借して、踏み荒らしたこと。まだまだ大分修理のとどかぬ所も多い。——いずれ正成の身に閑暇ができたなら、正成自身奉行して、一堂を寄進し、なお山門の手入れなどもいたしましょうわい。……いやおたがい、早くそのような日を持ちたいものだが」

と、あとの一語には、何か、心残りを置くようではあったが、そういつて笑いながら、一同の立礼をあとに謝して立去った。

すぐ、道は千早の旧籠城跡を下に見ながら急坂を降りかけていた——当時、足に負傷し、弓杖ゆんづえついて、ここを登り下りしたことやら、餓死寸前にあった城兵の、あの顔、この顔、みな土に爪を立てながら生き抜こうとした凄まじい人間の一心と団結力が、まだそこらの草の穂にも生き生きと息吹いぶいているように眺められた。

「あの、尊いものを」

と、正成は、うら悲しかった。身に責められた。——無むにしてはすまない——と思うの

だった。何であれ、千人の城兵が心を一つに発露した人間最高なあれは真美な火華であった。時により人間のうちには、土に拠よつて、あのような鉄の団結と相互愛をも持ち合えるものだということを、人間お互いの中に失わせたくない、疑わせたくないものと、正成は思ふのだった。

「おや。……誰か来る」

そのとき、供の蔦王つたおうが、下の谷間道をさして、言っていた。

「おやかた様。妙な男が、こつちへ急いで登つて来ますよ」

誰か。

と、正成も蔦王が指さす一個の人影を下に見ていた。

男は、千早谷からこつちへ喘あえぎ登つて来る途中なのである。といつて、べつに気にする理由はないのだが、蔦王が「——妙な男」というままに、注意を向けていると、なるほど、怪しめば怪しまれぬこともない。

泥まみれな布直垂ぬのひたたれに、頭巾ちまきを粽ちまきにむすび、肩や袖には綻ほころびをみせ、いかにも殺伐さつぱつな風采ふうさいであるばかりでなく、その足どりには、何かに追われているような迅はやさがあつた。

「あつ。これは？」

たちまち、男は近づいていた。思わざる僥倖ぎようこうに、かえって驚いた風であり、坂道を降りて来た正成の前に、その姿を投げ出すなり、地に平伏してこう言った。

「もしや、河内守さまではございませぬか。いや、先頃お登りのせつ、よそながらお姿を拝してもおりました。おそれながら、しばしの間、御見ぎよけんをたまわりたく、また親しく申し述べたい儀もございます。何とぞおききとどけ願わしゅう存じまする」

「ほ。……？」

正成は、じつと見て。

「そちは何者か」

「まず、それを申すが順ではございますが、お後ろには、侍童もおられます。ちと、ここでは」

「はて。侍童の耳をすら憚はばる者か」

「さればとて、決して、悪意を持つ者ではございませぬ。かくのとおり……」と、男は帯前を叩き、さらに諸手もろてを開いてみせながら「身に寸鉄も帯びてはいません。いやいや、とばかりではまだ信じてはいただけますまい。これを御一見くださいましょう」

と、頭巾を脱ぬぎ、頭巾の裏の縫目から、細かに折った一札いっさつをまさぐり出して正成へ示

したのだった。

「……………」

正成は披ひらいて、黙然と見終った。それは四国、山陽などの足利方の水軍の間に用いられ
ているらしい水路の関所せきしよくだ札——つまり船鑑ふなかん札であり、黒肉の割印わりいんに加えて、足利直た
義だよしの花押かきはんもまたあざらかといつてよかつた。

「さようであつたか」

正成はかろくうなずいて、すぐそれを相手の者の手に返した。かくべつ異いとも意外とも
してないらしい容子なのが、対者には、なお疑っているのかと思われて、むしろおちつか
ない眼まなざしにさせていた。

しかし正成はそんな狐疑こぎにとらわれているのではなかつたのである。ちよつと思案のい
ろはあつたが、後ろの薦王へ、

「そちはここにいて待て」

と言ひ残し、そして男の顔へ向つては、

「あれへ参ろう」

と、道の横へ、あごをさして、自身、先に歩きだしていた。

坂の途中から正成の向いた方へはいつてゆくと、そこには旧千早城の柵さくやら矢倉が朽ち傾かたむいていて、いまは人もなき砦とりでの跡の荒涼こうりようが、廃墟はいきよの石やツル草と共に足へつまずくばかりだった。

昼の月が淡く見える。

「それへ、かけるがいい」

言いながら正成も一つの石へ腰をおろした。

すると、そのとき不意に、男の背後へ襲やちよつて来た野猪のごとき者があつた。何か、吠えたとすると、二つの体は、早や組み合い、猛烈な勢いで、格闘していた。

事の不意に、

「大蔵つ、ひかえろつ」

正成は驚いて、制止した。

が、すでに二人の格闘は、鶏冠とさかを咬かみ合つた軍鶏しやものようなもの。耳もかす風ではない。とくに忍おしノ大蔵だいぞうにすれば、下赤坂から尾行つけて来たものを、途中、不覚にも道から崖下へ蹴落おされていたことでもあるのだ。ここに再度追ッついてその男を見つけたのだから

「——野郎つ」とばかり間髪かんはつも措かなかつたのは当然でもある。

しかし、本来の武士一色右馬介と、放免^{ほうめん}上がりの大蔵とは、ここでも格段な腕力の違いがすぐ出てしまった。——あつと、大蔵の巨体もしたたか地を打って転び^{まろ}、また猛然と突ツかかつては行つたものの前よりも遠くへ、でんと、再び投げとばされていた。

「よさぬかつ、大蔵」

正成に抑えられて、初めて、彼はその片^{かた}肱^{ひじ}で顔を横にこすつた。顔半分、柘榴^{ざくろ}のようにスリ剥^むけていたのである。

「なんで——」と大蔵はなお息まきながら「おやかた様には、このうさんな人間をそうお底^{かば}いなされますか」

「おちつけ。さほどの曲^{しれもの}者でもあるまいゆえ」

「いいや、敵方の諜者か刺客に相違ございません。具足職人のひとりに化けて下赤坂へ入り込んでいた奴が、いつのまにかこんな山中へ来ているなどは、てツきり殿をつけ狙ッていたからのことで、ゆめ、御油断はなりませぬ」

「案じるな大蔵。いささか思うところもあれば、あとは正成にまかせて帰れ」

「滅^{めつ}相^{そう}もない」と、大蔵は一方の曲^{しれもの}者以上にも正成のその言を怪しんで「——万一でもあつたら、てまえの役目が立ちませぬ。どう言葉巧みに殿へ近づいたものかは存じませ

ぬが、構えて、その貉むじなにお騙たばれなされますな」

「む、心得ておこう。しかし、自身でちとこの者に糺ただしたいこともある。そちは薦王と共に一ト足先に山を降くだれ。ほどなく正成もあとよりまいれば」

「え。お一人でここに」

「いかにも」

「ただおひとりで」

「早く去れ、去らんか」

大蔵はその恐い目を見て、口をつぐんだ。

何かは知れないが、やっと彼にも察しがついて来たらしい。まもなく不承不承ながら薦王と共に山路を降りて行つた。

——それを、ゆっくり見送つてから、右馬介は、またあらためて、正成へ頭ずを下げていた。

「ご家中の忠義者へ、まだ身素姓さえ告げぬ私の烏滸おこな腕立て。さぞ不快にござんでしたろう。何とぞ、平におゆるしを」

「いや、こちら無理りふじん不尽。気にかけられるな。……ところで、其許そこの名は」

「三河国一色村の郷党、一色刑部のせがれ、右馬介と申す者にござりまする」

「足利殿譜代ふだいの党人だな」

「は。尊氏の君には御幼時からの傳役もりやくとして仕え、今日に至っております」

「そして中頃では、具足師柳斎とも名のり、この河内にも、しばらくいたこともあつたの」
「えっ？ ……。では、その頃の私をば、なお御記憶でございましたか」

「はははは」と、正成は一こう相手を脅かす語気でもなく――

「それは覚えておるよ。たしかあの夜はひどい暴風雨あらしであつた。そして、初めて御辺ごへんを見た所は、龍泉の正季まさすえが家の奥。……な、柳斎、いや右馬介どの」

「まことに」

と、介すけはもう、その物やわらかな相手のあばき方にたいして、逆さかろう気にも言い逃げる心にもなれなかつた。

「おそらくは早やお忘れとのみ思つていましたが……。これは怖ろしい。あのつかのまのことをなお御記憶とは……。いや御炯眼ごけいがんです。恐れ入りました」

「なんの、忘れては正成こそ相すまぬ。――あの夜、妹の卯木夫婦うつきの者は、お辺に救われ
て河内を脱し、そして以後の幾十日も、住吉のお宅で厚いお世話になったと後に聞きました

た。——介どの。余りに古いことにはなるが、お礼を申す」

「これは！」

介は顔をあからめた。狼狽に似たものすら持つて。

「私こそ、お詫び申さねばなりません。当時の泥を吐けば、あの折こそ、じつは全く隠^{おんみ}密の目的で、ご領内に入り込んでいたものに相違^ごいませぬ」

「尊氏どののいいつけでか」

「いや、介の一存にござりまする。しかし、尊氏さまには、かつてまだ鎌倉においでの際から、河内に楠木氏と呼ぶ御一族のあることを、深くお胸に銘^{めい}じてはおられました」

「ほ。正成にとつて思わぬ知^{ちき}己^{かき}というもののだの」

「一つには、私が、かの笠置の戦雲いらい、御領下の民情は申すにおよばず、失礼ながら、正成どのと申すお方の人となりや御一族の内状までを、つぶさに探^ひツては主君の許へ密報していたことにもよりまする。……が、主君尊氏がお心の底からあなた様に惹^ひかれ出したのは、千早の御籠城百七十日のたたかいを、遠くにいて、見ておられた頃からのことにございまする」

「……………」

「やがてまた、世は建武となつて、わが殿もあなた様も、ひとつ都の内の朝臣として、朝に仕える日となりましてからも、折にふれ、事にふれ、あなた様の御名は、ままよう主君のおくちから常に伺つておりました」

「介どの」

「は」

「ご用向きの要旨をさきに伺おう。このたび、さように姿を変えて、お辺がこれへ忍んで来られた事の仔細は」

「もちろん、主君尊氏のお胸をそのままうけたまわつて、筑紫の御陣から差向けられて参つた次第にござりまする」

「ム。それはまた、いかなるお胸をあずかつて？」

「……まずはお聞き給わりませ。いかんせん、これまでは、政途の茨、四囲の諸事情、足利家として、あらわに御当家と好誼を厚うするなどの儀は不可能にございましたが、今はまったく天下の形勢も異なつてまいりました。しかも世は一転機のほかなき秋とも思われます。このたびのお使いとは、すなわち、私を以て、両家のかたい結盟を成しとげてまいれ。楠木殿のお望みもよう伺つて立帰れとの、極秘のいいつけにほかなりません」

正成は、聞いているのかいないのか、そら耳のように、淡い^{うす}昼の月を仰いでいた。石に腰かけている姿までが、石のごとき人に見える。

しかし、介はあくまでも、

「もしつ……」

と、懸命だった。雑草にうずめた膝がしらをにじりよせて、

「いかがでしょうか、打割ったお胸の底を、主君尊氏へ、お示し給わりますまいか。いやここで、私へお洩らし願えれば、かたじけのう存じますが」

と、息をつめた。

正成のしずかな眸は、やがてしげしげと介のおもてを見まもっていた。さて、べつにいうこともないような無感動をそのまま置いて。

「お使いのおもむきとは、それだけかの。——足利殿が、わざわざ、この正成ごとき者へ、^{よしみ}好誼を深うしたいと仰つしやつて下されたのか」

「はつ。……まずはさような御主旨にもとづきますが」

「身の面目よの。身は河内の一小武門。足利殿といえ、人も知る御名門だ。それさえあるに」

「いやあなた様を、武門のうちの武門、人の中の人と、お見込みあつてのことにございましょう」

「それは御同様よ。尊氏どのの御器量はよそながら正成も存じ上げておる。稀れにみるお人柄の一人として」

「ありがとうございます」と、介はわがことのうに感激して、

「御意、そのままお伝え申しあげたら、主君尊氏も、さぞ、およろこびにございましょう。まことに、士は士を知るの譬え。使いの私にもかほどの歓びはございません。つきましては」

と、彼は乾いた唇を舐めた。もう何を語っても大丈夫と観たものであったらしい。

「——じつは、ただいま筑紫表にある主君尊氏も、今夏か秋のころまでには、九州、四国、山陽のお味方をこぞつて、再び上洛のご予定にて、着々、後図をめぐらしておられます。で、その日には、ぜひとも新田軍の背後より、楠木どのの御内応を得たきものと、切なるお望みをかけ、もしその密約に、御一諾を給わるなれば、はや天下は掌のうちに図り得たようなもの。……いかなる条件のお報償に应じてもよいがとの、御意中なのでございしました。……いかがでしょうか。その儀、ここにて御確約は願われますまいか」

「はて、事難しゅうなつて来たの。では、他日尊氏どのが東上のさい、時を期して、この正成に、宮方を裏切つて足利方へ加担かたんせいとのおすすめか」

「わざと、主君の墨付すみつきは持参いたしませぬが、何とぞ、密使右馬介をお信じ下されまして」

「お伝言は確かだと信じよう。しかしそのお求めには応じかねる」

「えっ？」

と、介は愕がくとしたように、胸を張つて。

「おききとだけはかないませぬか」

「おろかな問いを」

正成は初めて、語氣に自分をこめて言つた。

「正成は武人です。また、笠置へ伺候してこのかたは、身も心も今きんじょう上の御一方に誓いまいらせた一朝臣あそん。さよう、江口の遊女おんなのように、世を浮舟と渡るすべはよう存じておらぬ」

介すけは、黙るほかなく、しばし首をたれてしまった。

が、これで退きさがるほどな使いなら誰でもする。——主君尊氏の依嘱いしよくもその熱意も

決してそんなかい思惑おもわくではなく、

「このこと、容易には正成も一諾しまいが——」

とは、すでに見越されていたことでもある。使者が使者たる命を果すか否か。それはこれからの自分にあり、ここぞ正成との勝負のしどころ！ と介は説客の決意でひそかにその唇を齒で潤しめすのだった。

「おことばですが」

と、彼はしずかに、やがて一矢を相手にむくいた。

「なぜ足利殿と結ぶことが、楠木殿には、武門の名折れになりましたか。——元をただせば、楠木家とて、北条幕府の下の一被官だったもの。——足利家もまたしかりです。

——が、世の乱脈に会い、幕府の命脈もつき、必然な世直しの到来から、御当家も武家の使命、一方に拠って立ったものでございましょうに」

「御辺みへもいのか。近ごろの流行り言葉はやを」

と、正成は一笑の下に。

「だから、変節も裏切りも世の慣ならい。何をばかすることがあろう、と申すわけよな」
「それとはいささか違います。いや、大いに違う」

「どう違う」

「私欲の反逆や無節操と、世をよくしようと念じての苦節とは」

「まことに」

と、正成は素直にうなずいてみせた。しかし一步も譲ッているのではなかった。

「尊氏どのの本心も、それではあろう。……けれど世を思うことにおいてなら、みかどは申すにおよばず、おおかたは、世が悪しかれとは祈ってまい。まして至上の御位にあるみかどに私利私欲のないことは誰よりもあきらかなこと」

「が、それを繞る公卿、武家輩。これは一概に申せませぬ」

「朝廷も世間のうち、人と人との寄りあい、げに、その弊は否みがたい。が、遠い祖たちが叡智で築いた国の要だ。乱離にしてよいものではない。正成はこの国の民、父祖いらい北条氏の被官であつたには相違ないが、かつても大本の朝廷をおろそかに考えたことはなかった。朝廷に代るほどのものがこの国にありうべくもなしと奉じてきた。すでに心の宮柱としておるものを、何でわれからわが心にそむけようか」

「御意」

と、介は同調して。

「主君尊氏のお心も、全くそこにござりまする。朝廷に敵対し奉る意志などは少しもお持ちではありません。ただ悲しいかな、今のみかどとは、事々御理想も違たがうため、そしてまた、義貞輩よしさだはいの讒ざん謗ぼうのため、朝敵乱賊などと、一たんの汚名はうけられました。しかしひそかには、持明院統の御一方から院宣をいただき、あくまで、大君には仕え奉るおころざしではいるのです」

「それは理窟だ、大君を国柱くにばしらとし、大君に仕えるとは、衆智の理を超えた理の磨き合いにほかならぬ。でなければそのような国姿は、かえって悪徒に利用されがちな乱らんの因もとと相なろう。その点、尊氏どのは乱臣と呼ばれてよい。正成とはまったく異なる道ことをあゆむ人。あかの他人だ。ゆくすえまでも、正成の敵ぞと、おつたえあるがよい」

「では」

と、介もついで色をなした。

「——わが殿尊氏とは、永劫えいこく、相容れぬ敵だと仰せなされますか」

「むム」

正成は、ためらいなく肯定してみせたが、またふと、

「いや永劫とは申すまい。おたがい生あるうちの宿業といったらよかろう。ともあれ尊氏

どのと自分とは、まったく両極。——もし足利勢が筑紫より大挙上洛の日には、正成もまた小ながら、河内の奥からただちに討つて出て、戦陣の間にまみえ申そう。ご返辞はこれだけだ。立帰つてありのままにそう申されい」

「これはおかしい」

と、介は苦肉な一笑に出た。

「さまで朝廷をおもんぜられる楠木殿が、持明院統の皇^{きみ}には弓を引かれますのか。まぎれなく、持明院統の前帝も、皇統のおひと方なるに」

「だまんなさい」

正成は初めて高い姿勢でものをいった。

「どなたであれ、御一人のほか天子あるものではおざらぬ。かの君、この君、皇統でさえあれば、朝廷をたてうるなどは、そもそも乱賊の考え方。尊氏どのの謀略だ。正成は時のみかど以外を存じもよらん」

「それや余りな御偏見でしょう。——順なれば、いまのみかど後醍醐は、御位^{みくらい}にはないはずです。大覚寺統と持明院統と、御位^{みくらい}は一代がわりに更迭^{こうてつ}の約束でした。それを後醍醐はあえてお破りなされた」

「……………」

「それなども、乱の始めでしょうが。乱をすべて、臣下の所業には帰しているが」

「いかにも、ご理想の急やら四圀の公卿衆にも科とがはある。したがの、それは宮廷御自体の反省と政事によつて正さるべきこと。かりにも武家が天下の烏合うごうをかりあつめて戦場に問うべきなどではない」

「でも、その儀にかぎらず、いまの御政治でよく一世を統すべて行かれましようか。諸民の安堵はおろか、諸国の武士も一つになれぬこの無秩序ぶりです」

「そうだ。……今はそうだ。だから努めるしか臣の道はない」

「が、巷ちまたの沙汰にも聞いております。せつかな楠木どのの御苦諫ごくかんも、みかどの容れ給うところとならず、逆鱗げきりんさえ蒙こうむつて、むなく故山こさんに御帰臥ごきとやらを……。さまでのことは、まだわが殿尊氏も遠くにいて御存知ありませんが、もし聞かれたら、なんぼう、あなた様のために惜しまれることやらと思われてなりませぬ」

「はははは。同情はかたじけないが、さまで正成の身に立入つてくれるにはおよばん。山さん沢さんたくの子には、また山沢の子ならでは分らぬ本懐ほんかいと一楽いちらくがある。むしろ尊氏どのの道こそ終生如何あろうかと惜しまれる。……おう」

と、不意に石から立って、

「おもわず時を過ぎたぞ。介どの。これから一人で麓へ出てはあぶない。正成が連れて進しんぜよう。こう参れ」

「あつ。……もうしばし」

介すけは、あわてて、正成へ追いつがった。だが、振向きもせぬ彼だった。のみならず少し先には、とうに山を降りていたはずの蔦王と忍ノ大蔵が、なお用心ぶかく、物蔭からこなたをじつと睨にらんでいた。

峰づたいに、南へ越えれば紀伊の人里へ、東へ行けば、大和へ出られよう。——介はここで正成と別れ去るべきか、なお正成について、下赤坂へ降りるべきか。さんざん迷った。「ふしぎなお人だ」

彼には、ただただ、解らない人の、一語につきる。

本心、尊氏を敵とみるならば、その尊氏の股肱ここうであり密使でもある自分を、どうしてこゝう寛大にして帰すのか。

生かして返さぬまでも、究くつきよう竟なとりことして、これを責め折檻せつかんのすえ、敵状を知る手懸りとするなどは、武門の常識、慣ならわしといつてよい。

「……それなのに？」

介は、疑いながらも、その怪しみに引かれて、ついつい犬の子の如く、正成のあとについて行つた。

正成もまた、あとの者を、犬の子ほども、氣にとめていないふうだった。——そして大蔵は先に麓へ追いやり、薦王だけを連れて歩いていたが、介が近づくのを、ふと待つて。

「介どの。まずは真つすぐ筑紫へ帰る氣か」

「は。ついに無能な使者と相なつてしまいました。帰るしかございません」

「氣のどくだつたな」

「残念に存じます」

「ぜひもない」

「が、まだ、あきらめ切れてまいりませぬ」

「思い出される」

「何事を？」

「あれは建武元年の秋、紅葉のさかり頃。石清水いわしみずの行幸みゆきにしたがい、われらも、また足利殿も、供奉ぐぶいたしたことがあつた」

「男山の御祈願で」

「さよう。みかど帝以下隨身みな山上に二泊の折、足利殿には一夜不慮の刺客に襲われ、そのこととて翌日、内裏の校書殿きょうしよでんにて親しくお詫び申したことがある。……思えば、二人が心の端を語りあつたのはただ一度、その校書殿の夜だけでしかない」

「……………」

「が、その折、尊氏どのもかなりお胸の底をみせ、正成も偽らぬ自分を、おこたえしておいた。おそらく、正成が終生の友ならぬことはあのときさと覺られていたはずと思う。……されば、まもなく大塔ノ宮を禁獄しまいらすなどの悪策をもあえて押し進められたのではなかつたか。……正成にとり、宮は笠置かさぎいらい、苦憂も末の愉しみも共にしてきた無二の御知己。それをついに弑逆しぎやくし奉つた足利兄弟は、とりも直さず正成のあだ。その点でも両者が永遠の仇敵あだがたきとならざるをえぬ宿命は疾とくにお覺悟だつたに相違なからう」

「……………」

「さるをば……今さらふたび使いをよこして、この正成が胸をただ紮されるなどとは、尊氏どのも、流浪の空にて、よくよく血迷うておられるものか。……介すけどの、この儀も確しかと尊氏どのへお伝えあるがよろしかろう。決して使者のお辺へんが至らぬゆえの破談でないことの

証明^{あかし}にもなる」

もうそこに、下赤坂が望まれている。

介はついに一言も正成へ追い打ちかけてみることも出来ずにしまったばかりでなく、何事か、彼方からは一群の武士がここへ近づいて来るのを見ていた。

それは、さきに正成が麓へ走らせておいた忍ノ大蔵で、うしろには、下赤坂城の家士十人ほども連れていた。

正成は近づいて来た先頭の者へ、すぐ訊ねた。

「大蔵。小六はおったか」

「おいいつけどおり、あれへ連れてまいりました」

「ご苦労だった」

大蔵を横へ措いて、彼はすぐべつな群れへ向い、その中の一つの顔へ、

「桐山の小六」

「はっ」

「これへ来い。珍しい者に会わせてやる」

と、言った。

小六と呼ばれた者は、組の頭でもあろうか、はやぶさ隼のような侍だった。不審そうな顔を持って、前へ進み出て。

「何事でございますようか」

「小六。そちには忘れ難いはずの人だ。久しぶりお目にかかるがよい」

「え？」

正成が身を退けると、そこには彼の見つけない人間が立っていた。小六には俄に思い出せなかったが、介にはすぐわかった。

「おつ。和殿はあのときの刺客、桐山の小六だな」

「貴公は」

「いっしきうまのすけ一色右馬介」

「はて」

「この姿、思い出されぬのもムリはない。それに四年も前——男山八幡みゆきの行幸に供奉して、楠木殿も足利殿も山上に明かした一夜のこと」

「あつ。ではあのときの」

「足利殿の家来のみひとり」

「あの一色どのか。……あの翌朝、おれの縄目を解いて放してくれた……」

「いや、縄を解いて放してやれと仰つしやったのは、たれでもない、和殿がその前夜、男山八幡の石段で、殿でんノ法印ほういんの身うち岡本坊と共に、暗殺やみうちしようと計つて仕損じたわがおあるじ尊氏どのだ」

「これは？ ……」と、小六はあきれるほかなかった。

そのさいの足利家の一家臣が、どうして、正成と共にここにいるのか。これは解らない方がもつともだった。

正成はそこで初めて大蔵へも小六へも、事のわけを話してきかせた。そしてまた、かつて尊氏は、この桐山の小六にたいして、腹の大きな処置をとつてみせたとも言った。

およそ、わが身を狙つた刺客といえ、これを八ツ裂きにしてもあきたらぬのが当然なのに、尊氏は、捕えたその明確な下手人を、介に命じて、放してしまった。しかも兇漢は楠木家の一郎党と、はつきり知つてもいたのである。

その処置にたいして、正成も口を拭いてはいられず、翌晩、校書殿きょうしよでんの人なき所で、深く部下の不心得を彼へ詫びたことではあった。しかしそのことは正成の心に尊氏への「借り」としていつまで記憶されていたらしい。

で今、その償いとはべつにいわなかったが、桐山小六へ、特にこう命じていたのだった。
 「小六。そちを初め、組の者の手で、介どのの身をつつがなきよう、住吉の浦までお送り申せ。わしの領内でもし危害を加える者などあつたら正成の心がすまぬ。足利どのの先の度量にたいしても面目ない。よろしいか、確と申しつけたぞ」

「こころえました」

桐山の小六は、そういつて。

「確と、この者は住吉の浦まで送りつけます。が、すぐこれより立ちますので」

「いや」

正成は介をかえりみて。

「はや今日は黄昏れ。明朝、早く立たれてはどうかの？」

しかし、右馬介にとれば、その好意にも、どうという答えも持てない風だった。ここは敵中、とりことして扱われても仕方がない身なのである。何事にも唯々と従っているしかない。

正成は一同をつれて、そのまま水分ノ館へと歩いた。館の前の「駒つなぎ桜」はもうわずかな日のうちに散り褪せていて、その下には、領下の雑人たちの直訴でもあるのだ

ろうか。さまざまな風態の人間が、地にぶつ坐っているふうだった。

が、彼らは、

「ア、おやかた様だ」

と誰かの一ト声をきくと、みな立つて、門へ入って行く正成のすがたへあたまをさげていた。

小六と大蔵たちは、介をつれて邸内の長屋へ入り、正成は正面の式台をふんでいた。

「……お帰りなされませ」と、久子の笑顔を中心にみな揃って出迎えている。正行まさつらも見え、卯木うつきも見えた。また幼い者たちの、はしやぎ廻る足音や、爺の姿や、ほか家臣たちの礼をも廊下に見て通りながら、この主あるじのからだは、奥の一室へおちつくまで、賑やかな声にくるまれ通しだった。

「……あとで。……あとで」

正成はすぐよりたかつて来る子たちを、卯木にあずけた。そして爺から留守中の報告をうけ、さてようやく、久子とふたりきりになったところでふと訊ねた。

「門前に見えた大勢の雑人たちは、いったい何か」

「石川あたりの散所民さんしょみんたちだそうでございます」

「散所の者か」

「はい。あの衆たちは、おやかた様が朝廷のおとがめで引きこもったのか、さもなくば御病氣かと、巷ちまたの噂を案じ合つて、相談のすえ、お見舞にうかがつたものと申ししております」

「すまん。それはすまん。正成はこのとおり病氣いたつきでも何でもありません」

「ですが、何であれ、おなぐさみになればうれいとか申しまして、干魚、干肉、菓子、酒などたくさんに持ち、中でも散所の芸人たちは、ぜひ、自分たちの芸をお慰みにいれたいと、あのようにな、いくら爺さしに諭さとさせても、帰らないので、ほうッてあるのでございます」

「それは悪い」

正成は言つた。

「散所の民は、ゆらい領主も何もないはずの者。それがああして、せっかく自分らの代表をたて、わしの慰めにとこれへよこしたのに、むげに断るのは心ないことだ。長屋へ入れて、あすはその衆の芸を見ようと、爺からいわせておくがよい」

めずらしい仰せ出しと、久子だけでなく、爺の左近も、家臣たちも、それには意外な思ひをしたらしい。もつとよろこんだのは、せっかくやって来た散所の代表者たちである。

それと、正行まさつらやその下の幼い子どもたちだった。

どんなことになるのかと、みなあくる日を楽しんだ。正成は桐山の小六をよんで、介すけにもそれを見せ、それから住吉へ送って行けと、いいつけた。

次の日。

野芝居の場所には、館たちの庭のほどよい所が見たてられた。

散所民の芸人たちは、竿を立て、袖幕を張り、笛太鼓座ふえたいこざなどのしたくがすむと、

「こちらは、いつでも」

と、見物が揃うまで、長屋で酒飯しゅはんのご馳走にあずかっていた。

まもなく、楠木家の門は、もう朝からむらがついていた老幼男女のために開放されていた。

「日ごろめつたに家を出ぬ者は誰なと見に来い」

との触れだったので、多くは家士たちの家族だろうか。中には歩けぬ老人が背負われて来るのさえあった。また山里の百姓たちは「おやかたの内を拝見するだけでも」と、おずおずと連れだつて、大庭のまわりを埋め、まばゆげな顔を野天にそろえて坐り合つた。

正成も縁へ出ていた。

正行や三郎丸などの幼少をそばにおいて、いかにも祝福された父親の姿だった。卯木も

觀世丸と共に、家族のうちにいたが、久子だけは見えなかった。それを氣にして、

「母上。始まりますよ。はやくいらつしやいよ母上」

と、正行は何度も、自分で呼びに立ち、やがて、爺の左近が連れて来ると、父のそばをあけて、そこへ母を坐らせた。

母屋おもやの縁だけでなく、書院の廊から下屋しもやの方にも家臣の顔がいっぱいだった。水分みくまりの

大家族はほとんど揃かんツた観がある。龍泉の正季まさすえも家来をつれて書院廊の角に坐っていた。しかしなぜか正季の周囲には、この光景を愉しんでいる色がなかった。

散所ばやし囃子——

が早や賑やかに鳴り出している。主樂器は太鼓と鉦かねであった。それに笛やササラの音ねがからむ気だるい野趣やしゆをおびた民樂みんがくだが、遠くには、金剛や葛城かつらぎの山波が横たわり、空には昼の月があった。いわばそれらが舞台をなし、いつかしら、ここの群集のうえには、いちじよう

一場の法樂の天国が、理窟なしに降りていた。

そのうちに、衆の笑い声が、風と花のように、どよめき合い、どの顔も、相好そうごうをくずし出した。散所芸人たちの野芝居は、野卑みだらで、淫猥みだらで、人間の皮を剥むいて見せるように開けツひろげな芸であつたが、しかし少しも暗くはなかった。悪人も聖者ひじりも尼もみなどこか

滑稽で、しかもあわれな者、みな自分らと等しい人間たちとして、^{ひと}彼らは演じているのだ
った。

「おもしろかった」

正成は彼らをよんで、充分な引出物をそれぞれにとらせた。半日の野天興行もめでたく
終り、正成にもよろこばれ、散所民たちは大満足で帰って行った。

招かれた老幼もみなぞろぞろと去りかけている。その中を、桐山の小六は、^{うまのすけ}右馬介を
うしろに連れて、

「では、ただいまから、住吉の浦へ立ちます。ほかに何か御用は」

と、正成のいる縁の庭先へ来てひざまずいた。

「おう、行くか」

と正成は、介へ、一言の別辞を送った。——尊氏どのへよろしくという意味深い一言だ
った。

すると、そのとき、廊をこつちへ歩いて来た正成の弟正季が、

「小六。待てっ」

と、声荒く、呼びとめた。

正季は庭へおりて来た。

しかし、小六へ用があるふうではない。小六のうしろにいた右馬介へむかつて、

「待て、柳斎」

と、するどく呼びかけ、

「はや筑紫へ帰るのか」

と、挑むいどような眸をそそぎかけていた。

「お。……ご舎弟様で」

介はニヤとしたきりで、あいまいな顔を守った。

このご舎弟と正成との性格の差は知りぬいている。だから何事も起らぬようと、ここはただこの場のがれを密かに希っていた彼だった。しかし正季はすでにすべてを聞いていた風で、やりばない忿懣ふんまんが語気そのものにあらわれていた。

「やいつ、介とやら。いや足利家の諜者いぬ、よくも多年わが領内にいりこんで、正季が目をくらましていたな！」

「……………」

「敵がならけなげな奴だ、汝の主人尊氏に代ってほめてやる。だがこれが兄上でなく、正

季の手で汝を処分していたなら、その素ツ首は、無事に、尊氏の許へは返されまい」

「……………」

「命いのちみようが冥めい加かな奴ではある。かえすがえす、ありがたいと思え。したが、このことを以て、

楠木党の甘さと見たら大間違いだぞ」

正季は、ずかと寄つて、

「覚えておけ。ここには龍泉の正季もいることを」

と、いきなり介の横顔を平手打ちにばツと撲うツた。

介は、顔を抱えて少しよろめいた。それへ向つて、さらに正季の二打だが追いをみせたと
きである。縁の上から正成が、

「正季つ、よせ。よさんか。児戯じぎのようなまねは」

と、つよく叱しツた。

ふとその兄を振向くと、いかにも愉しまぬ、不愉快そうな色だった。その態度が、この
日頃にあつた正季の不満の吐け口をつい誘った。

「児戯しおき? 何で正季の仕置しおきが児戯しおきでしようか」

「打つてどうなるのだ」

「腹にこたえさせてやるのです。いずれはすべて尊氏の耳に入ること」

「尊氏に笑われたいか。さような児戯、尊氏は大いに笑うだろう」

「兄上は尊氏が恐ろしいのですか。宮（大塔ノ宮）を殺した怨敵^{おんてき}、みかどの逆臣、世をみだす乱賊。あの尊氏が」

「……。小六、何しておる」

正成は、弟へ答える代りに、桐山の小六へ、あごをしゃくつて、

「介どのを連れて、はやく行け。介どのも、気にかけるな。はや立たれよ」

と、せきたてた。

小六は部下と共に介の身をとるかこみ、すぐ邸外へ出て行つた。用意の馬に介を乗せ、自分も騎馬となつて、たちまち、水分^{みくまり}をあとにしていた。

彼は途中で見た。

おなじ館^{たち}から今日半日の遊樂にみたされてぞろぞろ帰つて行く老幼男女の影や散所芸人たちの群れである。——介は、不思議な国をいま訣別^{けつべつ}してゆく感だった。この郷^{さと}での過去さまざまな見聞も思い出され、ふたたび、ここへ来る日はあるまいと思うにつけ、何か、第二の故郷でもあるように、金剛山が振向かれた。

ひびき灘なだ

ことし、またも改元（年号改め）がおこなわれた。

どうもこれまでの建武という称もおもしろくない。新政体の発足とともにせっかく用いられてきた年号だが、事々不吉が多かったようである。尊氏の西走と、洛内の人心一新を機として、よろしくこのさい改元を布しかるべきである、というのがおもなる理由であった。何も天下の吉凶は年号によるものではあるまいに、時代の新しい思想を持ち、その実現を抱負としている堂上が、わけて若公卿までが、こんなことには完全に一致して、早々、令を見るに至ったのであった。

二月二十九日以降は、従来の「建武」を廃して、
延元えんげん

とするとなつたのである。

ところが、奇くしくも。

この延元元年の二月二十九日は、さきに西国へ遁とんざん竄さんしていた尊氏が、敗残の兵をのせ

て、長門ながとの赤間ヶ関をはなれ、海上一日の航路をへて、たそがれ、筑前の芦屋あしやノ浦へただよい着いた日にあたっていた。

が、ここで断わっておかねばならない。――それは、尊氏の侍臣右馬介の河内潜行より約一ト月もさかのぼっていることである。――すなわち尊氏が、ひそかに、

「そちだけは、ここを去つて、河内の楠木ノ兵衛ひょうえに会うて来い」

と、介すけを密使として途中から放したのは、それ以前のことぞくに属し、従つて介が、下赤坂や金剛の峰をうろついていた時よりも、日はあとへもどり、同時にその天地もここで筑紫の一角へ移るとする。

「おうーいっ」

芦屋ノ浦の夕暮れは、文字どおり墨絵のような芦や砂丘と蕭々しやうしやうたる風だけだった。

「おおうういッ……」

と、さつきからの芦の中の声に、どこか、はるかな陸でも、同じような声がこたえていた。

そのうちに、

「オオ、煙があがつた」

「船をすすめろ」

「もつと先だ。あの煙が味方にちがいない」

と、それまでは用心ぶかく河口に船体を隠していた数十そうが、いちどに遠賀川おんががわの水面にみなその船影をあらわした。そして、えいえいと、川すじを深くのぼって来た。

親船とみえる一そうの船上では、さきに太宰府から赤間ヶ関まで、尊氏を迎えに渡つていた筑後ノ入道少弐妙恵しょうにみょうけい（貞経）の子の頼尚よりひさが、水案内みずさきを勤めて、みよしに立ち、

「待った、待った。水夫かこの衆、宰相さいしやう（尊氏）の御船はここらでとどまれ」

と、制止していた。

そして彼は、尊氏のいる胴どうの間まの座所へ来て、

「はや宵に入つて、物の黒白あいろもわかりません。よも合図たがに違いはなからうと思いますが、万一があつては大変です。それがしどもがまずその辺の陸地を先に物見して戻りますゆえ、もうしばらく、ここにてお待ちねがいまする」

と告げ、ただちに自己の一小隊だけをつれて陸へ上がつて行つた。

これまでの九州は、いわば中央争覇そうはの圏外けんがいだった。ここも武家宮方の両派に別れていたが、要するに、両勢力のいずれに自家を託すか、遠くにいて、武族みな思い思いに、未

来を賭けていたにすぎない。
が。

尊氏の九州くだりは、俄然、颶風の進路が一変、急角度に筑紫九カ国の空をおおつて来たようなもので、いまや中立帯でも衛星国でもなく、ここもいやおうなく、争乱の中心となつて来たのだつた。そして、

「なおしばし、御船にあつて」

と、尊氏を遠賀川の船上にのこして、岸へかけあがつて行つた少弐しょうにの太郎頼尚よりひさの胸には、じつは、陸上の物見以上に、気が気でないべつな不安もあつた。

彼は、さきに。

父の大宰だざいノ少弐みょうに妙恵みょうけいから命ぜられて、弟の頼澄よりずみ、一子の氏鶴丸しかくまる、ほか郎党三百をひきつれ、率先そつせん、尊氏の誘導隊として赤間ケ関まで迎えに行つて——そしてここまでは来たのだが——赤間を船出する前に、

「肥後の菊池武敏、阿蘇あその大宮司だいくうし惟直これなおなどの宮方が、太宰府の手うすを知つて、水木の渡しをこえ、俄に、大軍を駆かツて太宰府へ急進中——」

との報を、留守の老父妙恵（少弐貞経）からの早打ちで耳にしていた。

元々。

妙恵と彼との作戦は、まず足利の宰相（尊氏）を太宰府にむかえ、九州一円へ檄をとばし、肥後の菊池党とは、その後において堂々の一戦を展開しようとするにあつた。――が、はやくも敵に先を取られ、逆に彼の襲撃をみてしまったのだ。そこで、

「もし今日にでも太宰府が陥ちていたら？」

と、航路の一日中、心も空な頼尚だつたのである。またそうした不安も尊氏には告げていなかっただけに、芦屋の岸へあがるやいな、彼は、

「太宰府の侍は来ていないか。誰であれ、味方がいたら、ここに頼尚ありと触れて来い」と八方へ手分けして、まず太宰府の安危と、老父妙恵の消息をさきに知ろうとした。

すでに、ここの様子も変だつた。彼の予想のようでない。

本来なら、足利方と目されてゐる島津貞久や大友具簡の軍兵も、尊氏の通達で、一部は来会していなければならぬはずだ。しかるに、そんな軍隊は見えず、やがて捜し出されたのは十数名の太宰府からの落武者と、遠賀川のやや上流で、焚火をあげていた一団四、五十名の味方が発見されただけだつた。

その中に、太宰府の家臣、畦倉豊前守の末子井筒丸もいて、頼尚の姿を見ると、

わつと泣いて、頼尚の足もとへ泣き仆れ、

「筑後さま。遅うございました。太宰府は今こんぎょう暁、菊池勢に攻めおとされ、大殿の妙みょう恵様、宗応藏主さま、ご一族は内山へ逃げ退いて、御寺へ火をかけ、火中にて御自害をとげてみなお果てなされました。……さんねんです、さんねんでございます」と、一切を告げた。

「……………」

頼尚は一時茫然とした。

涙も出なかった。

どつぷりと遠賀川は夜になっていた。

芦をわたる暗い風には、響ひびきなだ灘きざらぎのとどろきがある。

尊氏はまだ船の上だった。二月の星はいいようもなく肌ざむい。わけて敗軍の身、流亡の空だ。来しかた、明日の未来、尊氏は居眠つてもいるように、船むしろに坐つていたが、心は複雑なのであろう。夜鳥の水音にも、ふと耳をたて、そしてまた半眼はんがんにもどつていた。

「はてなあ？」

やがて呟いたのは、幕将たちの一人だった。そこへ仁木義長と高ノ師直も、舩を接している隣の船からはいつて来て、同じような焦躁をおもてに持ち、尊氏へむかつて言った。

「殿。いまだに頼尚がもどつて見えませぬが」

「ム。どうしたか？」

「それに、上流の煙を見て、さきに上陸したお味方の面々も、何の連絡もしてまいりません」

「妙だな。声だにせぬ」

「もつとも、この暗さ。浦も川すじも、芦屋一帯が闇と風音ばかりです。が、どうもこの地は吉い気配とも思われませぬ。いちど貝を吹かせて、こころみに、おひきあげを命じてみてはいかがでしょうか」

「いや」

と、尊氏は好まぬ色をみせた。

「いずれといえ、みな生死をとむと誓つて、ここまで落ちてきた者どもだ。その者たちの心を疑うようなことはせぬものぞ。——それに少弐の太郎頼尚は、かならず戻ると言

つて上陸あがつて行つた。彼の容子にどこか憂いが見えぬでもないが、二心ない丈夫おとこと尊氏は見込んでおる。まずもすこし待つてみるがいい」

といつても、彼自身、待ちしびれたにはちががなく、身じろぎして、坐り直した。

かたわらの将はみな流亡の垢あかとつづれを纏まとつていたが、尊氏だけは、紅地金欄あかじきんらんの鮮あざらかなよろい小袖と具足を着ていた。——これは頼尚から彼へ。「父の妙恵みょうけい入道が、筑紫入りの御晴着おんはれぎにと、とくに新調させたもの。なにとぞお召し給わりたく」と、先に献上していたものだつた。——尊氏はよろこんで、それを着用すると共に、少弐父子の誠実さをも、同時に、心へ着込んだ風だつた。

すると、やがてのこと。

その筑後ノ太郎頼尚が、

「お座船ざふねの衆」

と、岸の上に姿を見せ、

「諸所、物見をとげましたが、陸上何ら異状はございませぬ。ひとまず宰相の御座所は、芦屋の一寺に用意いたしておきました。お船をつけ、いずれもこの辺より御上陸なされませ」と、大声で告げていた。

すでに、直義ただよしだの、高ノ師泰こうもろやす、師重もろしげ、南遠江守、畠山阿波守、細川あきうじ顯氏などは、先にべつな所から上がっており、尊氏は執事の師直もろなお、仁木、石堂、上杉、吉良などの幕將をつれて、陸に立った。——いやこれらの股肱ここうの者のほかに、西下途中の室ノ津むろつへ、持明院統の院宣をもたらし来て尊氏にそれをさずけた光厳院の御使みつかい、三宝院ノ賢俊けんしゅんもそのうちに立ちまじっていた。

「いざ、こうお越しく下さいまし……」

すぐ、頼尚よりひさは先に立った。しかし寥々りようりようたる陸上の人数である。尊氏も不安なきをえなかった。

童武者わらべむしやから中間ちゆうげんの輩はいを入れても、なお尊氏の供は五百人に少し欠けていた。

そこへ少弐しょうにの太宰兵だざいへい三百名が加わったので、やや意を強うし、なお芦屋ノ浦では、数倍の九州軍が参加あるはずと覷みていたので、

「……まずは」

と、或る目算もたてていたのだった。——ところがいま見れば、新参加は、わずか五、六十人の影でしかない。

しかも、それさえ意気は沮喪そそうしているし、姿も疲れはてているようだ。「ただごとでな

い」と、尊氏も思わずにいらなかった。

しかし尊氏は、途々何も問わず、ただ先に立つてゆく少弐頼尚を信じ、頼尚もまた、この誤算について尊氏へ何の釈明するところもなかった。

やがて、同勢が着いたところは、芦屋から小一里奥の、えぶり杣の一寺だった。

見るからにわびしい田舎寺だ。しかし先に頼尚がいつけてあったのか、庫裡くりではさかな炊煙すいえんだった。なによりは一同の飢えが頼尚の責任感にあったとみえる。

はじめて、ここでは頼尚をよんで、尊氏が不審をたずねた。

「直義たちの手勢はどこへ上陸あがったのか」

「のこらず杣えぶりの部落に屯たむろしておられます。いずれ後刻、お打合せにまいられましょう」

「たそがれ、河口から望まれた煙は、敵だったのか、味方だったのか」

「味方の群れにございました」

「それにしては、この地で参陣あるはずの、新しい手勢と見ゆるほどな兵も見えぬが」
「じつは」

と、頼尚は申しわけないような態ていをがくと両の肩に落して。

「それには、ちと」

「何か、異変でも」

「は。……為に、大いなる齟齬そごを来きたまして」

「とだけではわからぬ。何事かが起つたのか」

「肥後の菊池勢が、はや大挙して太宰府へ押し寄せ、味方は防ぎに苦戦しております由。これへ来て聞き知り、じつは、臍ほぞを嚙かんでおりまする」

「しやつ。逆手を打たれたか」

「が、ご憂慮なされますな。老いてはおりますなれど、留守にはわが父みょうけい 妙恵入道がおりまする」

「妙恵は、健在か」

「はつ……なおまだ……」と、頼尚よりひさはしいて語氣に気をつけながら「なかなか氣丈な老父でございます。たとえ菊池、阿蘇あそ、どれほどな大軍に囲まれましようとも、宰相さいしやうのお顔を拝すまではと、死力にかけて、防ぎ戦っているに相違ございません。なにとぞ、充分ここでお支度の上、御進軍ねがいまする……」

苦しかった。

頼尚として、すでに討死している父の死を想うことも、それを尊氏かくへ秘していることも、

腸^{はらわた}のちぎれるような思いだった。

が、もしここで、九州の地をふんだかりの出ばなにおいて、太宰府の失陥やら、大宰の少貳妙恵入道の死を公然にしたら、尊氏その人とはともかく、全将士の意気の沮喪^{そそく}はどうしようもあるまい。——頼尚はぜひなく自己をころしたのだった。そしてまた、陸上にいた者へも、すべて口止めしていたのであった。

ほどなく、直義^{ただよし}がみえ、直義についている上杉伊豆守重能^{しげよし}そのほかもみな集まって、急遽、宵のくちの軍議となった。

結論として。

太宰府の危急——

菊池勢の猛威——

「一刻も猶予はならぬ。すぐ行け」

とは、きまった。

しかし総勢八百にも足りないのである。装備といったら馬さえわずかな数でしかない。

「これはどうするか？」

であった。

「どうのこうのを言っているところでない。むかし頼朝公が石橋山に破れて、海上を小舟で安房へと、落ちのびられたことなどにくらべれば、まだわれらには生死を共に誓った八百の精銳がここにある。何の怯みを」

左馬頭直義は、このとき火のごとき言を吐いた。人々もそれに打たれて二言となかつた。

が、尊氏はあくまで慎重な唇をとじ、そして、一同の積極的な意気を篤と見たあとで、頼尚へきいていた。

「ここから宗像までは道のりどれほどあろうかな」

「途中、山路もあります、まず四里と見たらよろしゅうございましょうか」

「ひとまず宗像ノ大宮司をたのんで行こう。先触れには、南遠江守、曾我ノ左衛門の両名駈けろ。……もし大宮司に二の足がみえたらすぐ戻って来い。攻め破って通るまで」

「かしこまりました」

と、曾我と南は、すぐ尊氏のむねをおびて、先に宗像へ馬を飛ばす。

つづいて、尊氏、直義以下の全員も、寺を出て、西の道へいそいだ。真夜なか、蔦ヶ岳をこえて、野坂、許斐へ出る。——と、大宮司宗像氏重の一族の者がすでにそこまで

出迎えていた。

やがて、また、大宮司の館では、

「どれほどのお力になれようとも思われませぬが、まずはお心やすらかに」

と、宗像氏重が、自身で尊氏を内へ請じた。そして、邸内を開放しての歓待だったが、尊氏は、

「いや、そうしてはおられぬ身、しばし御門前を床几の場に借用したい。そして馬に水飼^{ずか}い、兵にも腰兵糧^{こしがて}の用意をさせなどしたら、すぐにもここは立ち申す」

と、門前に床几をおかせ、身を休めるにとどめていた。

このあいだに、宗像大宮司のはなしから、初めて、尊氏は知ったのだった。――すでに太宰府はきのうのうちに陥^おちており、少貳^{しょうに}妙恵^{みょうけい}入道以下、あえなく、内山の城で自害し終^はつていたということを――である。

「さもこそ……」

と、尊氏はうなずいた。

落胆もしたが、同時に、

「あわれや、頼^{より}尚^{ひさ}の心根」

とも思わずにいられない。——それを自分に秘^{かく}していた彼の心はよく分つていたので、すぐ頼尚を床几の前に呼び、彼の父妙恵の死を共に悼^{いた}んだ。

はじめ、頼尚は事実を告げた。そして、

「じつは、これが老父の遺書にござります。……老父妙恵が、自刃の直前に、井筒丸と申す童子武者に持たせよこしました物……」

と、袖のうちから、血に染んだ一書を取り出して尊氏にみせた。

尊氏は読んだ。一読、愁^{しゆうぜん}然としたきりであつた。

太宰府を死守して、そのこの失陥とともに自刃した妙恵入道が、子の頼尚へあててよこした末期^{まつご}の一文は、悲壮きわまるもので、その走り書きをたどれば、

——自分は遂にここで終る

元々

足利どのと志^{こころざし}を契^{ちぎ}つて

御^{おん}為^{ため}の下に果てること

さらさら何の悔^くいではない

このうへは

其許そこ（頼尚）を初め

生き残ったわが一族は

いちばい心をかため

そして尊氏公を

天下のあるじと仰ぐまで

忠節を尽せ

働き抜け

それが我われへの大仏事ぞ

だらにきよう陀羅尼の経もどんな供養も

それ以外に

我への回向えこうはないとせよ

と、あつたのである。

「頼尚よりひさ……」

やがて、尊氏が言つた。

「わが家には、家祖家時公の置文おきぶみ” というものがあつた。これは少弐しょうじの家の置文と

いつてよからう。護符ごふとして、大事に肌に持つているがよい」

尊氏は、妙恵の遺書へ、ていねいな拝はいを添えて、頼尚の手へ返した。——太宰府が早や敵手に落ちてしまったのは、このさいの尊氏には、まったく捩より所どころを失った大傷手おおいたでではあつたものの、同時に妙恵のこの一書が、いかに彼の滅失を鞭打べんだし励はげましたことか、これも、はかり知れないものがある。おそらく、彼の胸には、意識なく、平時の日に坐つていた「禅」の禅機が生きて働いていたにちがいない。

もう行く先のあてはないのだ。また、あとへ退く所もなかった。天涯てんがいの孤軍である。

「いつそ、よからん！」と、尊氏は胸のうちで言つてゐるかようだった。必然、一死を期したに相違なく、迷いも澱よどみもない姿とその眉は何か清潔な感をすら左右の者に覚えさせた。

「直義ただよし」

「はっ」

「聞いたな」

「うかがいました」

「いまは秘かくしておくにおよばん。太宰府の陥落、少弐妙恵みょうけいの死、すべて、ありていに

全軍へ告げわたせ」

「こころえました」

「待て。さらにこう言いそえておけ。敵の菊池勢は二、三万の大軍と聞きおよぶ。味方はこの小勢だ。しよせん、勝目はあらじと、怯む者は、疾う疾うここを去って立ち退けと申せ」

直義は、すぐ立つた。そして尊氏の床几布令のままを、あなたこなたでくりかえし叫んでいた。

さすが一瞬は死の風が通つたようなひそまりだった。しかし、怯み騒ぐらしい動揺はなく、宗像の大宮司も、一族百余人を、加担人に提供し、また、秘蔵の黒鹿毛の駒を、「み軍のはなむけに」

と、尊氏へ贈った。

すでに明け方へかけては、刻々と、敵のうごきもここへ聞えている――

一挙、太宰府を落し、その勢いで、なおぞくぞく前進中と聞えていた菊池武敏を主力とする阿蘇、秋月、黒木などの九州宮方の大軍は、今晩早や、博多箱崎の地点に近し――という情報がしきりだった。

菊池党
きくちとう

古い俗間のことばに、

菊池千本槍
やう

という伝えがある。

それまでの日本には鉾ほこはあったが、槍はなかった、槍は九州の菊池党がつかい出したのが濫觴はしまりであるというのである。

ほんとか嘘かは定かでない。もつと昔の「後三年合戦絵巻」などには類似の武器を用いている武者図があるし、必然な闘争動作からも「突く」という働きは本能的にやることだから、すでに鉾ほこすら上代からあったのに、槍の発明がそう遅かったとも考えられない。

しかし「菊池千本槍」の起りは、そんな考証にかかわりなく、箱根竹ノ下の合戦のさい、必要上、非常手段として、それに似た物をつかったという一いちじょう場の戦場談から始まったものだった。

建武二年、新田勢が朝命の下に東海道をくだり、尊氏は「義貞弾劾状」を朝へ出して後、

ただちに蟄居ちつきよの一寺から上洛の兵をすすめて、両者、箱根の奇勝に拠つて、雌雄しゆうを争つたあのときの戦である。

肥後の菊池武重は、その日、新田軍の総くずれと共に逃げ退いたが、途中、兵を竹林ちくりんに隠して手頃な竹を伐らせ、それに短刀を結いつけて、追ッてくる敵を待った。そして不意に穂をそろえて突いて出たところ、敵は見たこともない武器にうろたえ、意外な戦果をあげた。それが千本槍のおこりだといわれている。

真偽はともかく。

肥後には古くから肥後鍛冶かじが発達しており、当時、刀鍛冶の延寿国村えんじゆの門輩がさかんに武器の需要におうじていたことはたしかであるから、菊池武重の実戦における経験から、これからの戦は槍

槍に利あり

と見て、大いに自領の肥後鍛冶のあいだに槍の製作を工夫させ、従来よりは一進歩したいわゆる延寿鍛ええんじゆぎたの菊池槍きくちそうを大量に作らせたろうという程度には考え得られる。

いずれにしても、武門としての菊池党は、九州豪族中での重鎮じゆうちんだった。

頼山陽らいさんようは、その詠史えいしの詩のうちに言つて、

すゐなんかならずしもくわうくわにまさらず
翠楠 未必勝 黄花

と、うたつたが、菊池の一族一門中、初めから終りまで、官方へ味方して、終始一貫、変節者や離反をひとりも出さなかつたことは、たしかに、ひがしに楠木、みなみに菊池党、ほかになかつたといつてよい。

しかも世はあげて、不道德不感症時代である。節操はすたれ、利をみれば、旗も墨で塗りつぶし、義といえ、愚者の無知と嗤う世だ。

そんな中で勤王といい、官方と称えても、他の武門とちがひ、この党だけには、うそでないほんものの概があつた。なお廢れてない清烈な武門の旗がここだけにはあつたといえる。

肥後の菊池郡限府町がその本拠だつた。

元々、上古の久米部の兵士の裔でもある。

中頃、後鳥羽院の武者所に勤番し、承久ノ乱にも官方、元寇の乱にも、率先、国難にあたつてきた。要するに、筑紫のくさわけでもあり徹底した防人精神のうえにその家風も弓矢も伝承してきた菊池家だつた。いわれの無いわけではない。

——こう観てくると。

時の後醍醐が、この九州菊池党へ、秘勅をくだして、早くから筑紫無二のお味方と恃まされたのも、決して偶然なことではない。

さきに、みかどが、隠岐ノ島を脱出して、名和長年の伯耆の船上に抛り、御旗上げをされたさいにも、

「まず第一に、九州では菊池の党へ」

と、密詔の檄は、どこよりもはやく、肥後の菊池城へとどけられていた。

当時。——これを拝して起つたのは、当年まだ四十二の寂阿入道菊池武時——すなわち今の武敏の父だった。

その寂阿武時は、

「わが一代の事、今にあり」

と、おなじ志の阿蘇一族をかたらって、阿蘇火山の噴煙をうしろに、筑後川をわたり、博浪一撃の下にと、博多の北条探題邸の襲撃にむかった。

当年——元弘三年三月に起つた博多合戦とその前後のことは——もう先に「船上山」の条から「博多日記」のあたりで一おう書いておいた。

けれどなお、かさねて、ここで想起してほしい幾つかのことが遺っている。

そのときの探題襲撃は、見事、菊池方のやぶれに帰し、寂阿武時以下、一族郎党三百余人は、犬射ノ馬場で斬り死をとげ、じつに凄惨な全滅をみてしまったが、原因は一に、味方とたのんでいた者が、俄に、裏切りに出たことにあつた。

それを、たれかといえは、

少弐ノ入道 妙恵（貞経）

大友ノ入道具簡貞宗

の二人である。

以来、菊池党として、これこそ深い恨みでないはずはない。

ところが、時勢は急転した。

鎌倉幕府、執権高時、すべて昨日の覇府は地上から消えた。

余波はすぐ九州へもおよび、博多の地に過去十余年の業績と人柄を称えられていた九州探題の北条英時も、たちまち、四面楚歌の包围中におかれ、鎌倉滅亡の日からいくばくもない、当年の五月二十五日、館に火をかけ、自害して果てた。

じつに、怪しいのは、こんなときにおける人のうごきで、先には、探題英時に与して、菊池寂阿を自滅させた少弐妙恵と大友の入道具簡も、こんどは、阿蘇、菊池の諸豪に

伍して、共に、探題攻め包囲軍中にいたのである。——白樂天はくらくてんのことば——行路ノ難ハ山ニモアラズ水ニシモ非ズアラ、タダ人情反覆ハンブクノ間ニ在リア——という事実を人々は目のあたりに見たことだった。

だが、市井しせいの目が、そのまま真相を映すかといえ、これもそうとはかぎらない。激動中の表裏ひょうりには、怪奇複雑なかけひきやら、政治的な離合りごうなども、さまざま、波の底にはおこなわれている。

一時、菊池党と結んだ少弐、大友の二党も、やがて建武新政の両三年を経て来るにしたがつて、いつかまた、水と油の反目をみせだしていた。

元々、九州九カ国の諸豪は相讓あいゆずらぬ対立を持していたし、またとくに、少弐、大友の二氏は、菊池党とはまったく違う時勢観と利害の上にも立っていた。

それというのも、ひとつには尊氏の遠謀だった。少弐、大友などが、尊氏と密盟を持ったのは、きのうや今日のことではない。まだ尊氏が六波羅にいて、六波羅奉行の腕をふるっていた建武初年の頃からであった。

当時、都に在番の少弐、大友、島津らの子弟はみな、
「足利殿の人物は大きい。新田殿とは比較にならぬ」

と、帰国の都度、郷党の者へ語りつたえる風だったのである。

もちろん、遠謀に富む尊氏は、そのころから筑紫諸党へたいしては、かくべつ政治的便宜をはかり、またあらゆる好意を送っていた。で事々、筑紫の武族間には、

「なるほど」

と、こころよく受けとられ、同時に、

「さすがは、赤橋殿の妹いもとむこ 聾、うわさのごとく、なかなか器量人か」

と、衆望の観みるところにもなっていた。

ゆらい疑い深いのは武族間のつねだ。それが未見の尊氏へ、どうして、こうつよい信頼を九州では高めていたのか。

もつとも、これまでに、彼らの尊氏観かんが固まってくる根底には、それとの結び付けとなつた重要な前時代の前提がないではない。

何かといえば。

その胚子たねは、すでにこの地で亡んでしまっている前の九州探題北条英時ひでときが蒔まいておいた徳望だった。

英時は、探題十余年の在職中、治め難いこの九州諸豪のうえに在あって、よくその平和を

維持していたばかりでなく、庶民の評判もよく、その人柄はわけて皆から親しまれていた。が、それほどな英時も、大本おおもとの鎌倉幕府の倒壊とうかいに会してはぜひもない。保身的な豹ひょう変者ようへんしや、元来からの宮方勢の包囲のうちに、あえなく自刃をとげてしまった。が、菊池党のような正真正銘の宮方をのぞいては、

「惜しい人をば」

「あえないことに」

と、後々ではみな悼いたみもし、英時の善政なども、今さら慕したわれていたことだった。とにかくそこへ尊氏の擡頭たいとうだった。彼の名がようやく武門の焦点となるにつれ、はしなくも尊氏という人物が、この九州では、特に大きく、彼らの意識にのぼって来た。

なぜならば。

英時は、北条一族の赤橋守時の実弟だった。

その守時は、いうまでもなく、尊氏の妻、登子とうこの兄でもある。——で、尊氏にとれば、前の九州探題英時は他人でない。妻の兄だ。この九州と尊氏との宿縁もまた、浅くはない。
「いつかは、この九州へ、お手をかける日もあるにちがいない」

少式妙恵などは、夙つとに、こうした洞察をもっていた。大友、島津らの党も、ひそかに宮

方から離れていた。

大友具簡ぐかんの一子貞載さだとしが、中央にあつて、箱根竹ノ下で寝返り、義貞を離れて尊氏の手へついてから、九州でもふたたび、宮方と足利方とは、真二つに割れ、ここは大揺れに揺れ返していた。——尊氏の九州下りは、じつにそんな時であつたのである。

亡き菊池寂阿じやくあ（武時）には、たくさんな子があり、元弘げんこうの博多合戦で、父寂阿じやくあと共に討死したのもあるが、みな父の遺志をついで、後醍醐めしの召に応じ、中央へ出て二心なき戦功をあげている。

——で、建武初頭の論功のさいには、

嫡男ちやくなんの菊池武重を、肥後の守護職、兼けん、左京大夫に。

四男武茂たけもちは、対馬守つしまのかみに。

その弟武澄たけずみは肥前守。

また、末弟の武敏は掃部助かものすけに。

というふうな、一族みな任官、受賞の榮に浴した。

当然、これには亡き寂阿の忠死もあずかつて勸賞かんしょうの考慮にいれられたことではあるうが、およそ一家でこれほどな恩賞をうけた例はほかにない。同時に、九州における菊池

党の位置もここへきてすばらしい勢威を増していた。——大宰だざいの少貳しょうに家も、鎮西奉行の大友も、もののかずともみえなかった。

まさに、九州九カ国の重鎮とは、この家のことであり、朝廷の意向も「——九州の抑えおさは菊池を要かなめに」と恃たのむところにあつたであらう。

——尊氏きた来る！

とは、このような菊池家のうちに早くから反撃の奮起を呼びおこしていたのである。肥後の山河、阿蘇あその噴煙が、ただならず揺るぎ出したのは、まだ尊氏が、芦屋ノ浦へも上陸あがして来ない前からのことだつた。

が、長兄の武重は、なお都にあつて、国元ではない。

そこで、末弟ながら武敏が一切の軍事にあたり、上の武茂たけもちは、あとの守りに残つた。

武敏は、精悍せいかんな若さと、すぐれた臂りよりよく力をもつていて、

寂阿じやくあの再来さいらい

といわれ、その麾下きかには、いわゆる「菊池千本槍」の武名を持つ旗本の精鋭と、七千の兵があつた。

また。

隣郡の阿蘇一族も、変らない宮方だった。阿蘇ノ大宮司これなお惟直、これずみ惟澄も、ともに兵をすすめたので、あわせると、すでに万余の大軍となる。

この時からして、九州宮方の合い言葉は、

「尊氏に筑紫を踏ますな。——遁亡とんぼうの将尊氏ごときに、一步でも九州を踏み荒させてなるものか」

であつた。

また、

「まずそれには、尊氏と通じている太宰府を陥せ」

でもあつた。

太宰府へ向う途上、諸所において、少貳しょうに一族の抵抗はみたが、穴川口の戦い、太田清水の一戦、水木の渡し、菊池勢は行くところ破竹はちくの勢いでそれらに勝った。

これへ、秋月寂心の兵数千も味方に参じさん、日和見ひよりみだった深堀、龍造寺、相良さがら、杉、富とみみ光みつなどの小武族も、ぞくぞく陣へ投じて来る。で、全兵力はたちまち二万をこえ、全九

州も風靡ふうびするかのような勢いで、延元元年二月二十七日には、もうこの大兵力のため、少貳みようけい妙恵みょうけいの守る太宰府——宝満山のふもと有智山うちやまの城——は十重二十重にとりかこまれ

ていたものだった。

ささえうるはずがない。

妙恵みょうけいの子頼尚よりひさは、尊氏の迎えに赴おもむいて遠くにあり、兵も連れて行ったので、ほとんど、ここは手薄だったのだ。

しかし、少貳妙恵は、よく防戦した。

太宰府の居館を焼かれたので内山にたてこもり、一族の託磨たくま、中村などの少数を督とくして、よく一日半ほどは、死力のふせぎに敵の大軍をてこずらせた。

が、ここにもまた裏切り者があらわれた。しかもそれは少貳の娘婿むこ、原田対馬守で、

「存ずる所あつて、われらは今よりは官軍へ味方する」

と、俄に、とりでの高い所に、中黒なかぐろの旗（新田方の印）を掲げ、妙恵の床几しょうぎの前へ

来て、

「舅殿しゅうどのにも、いまはお覚悟のときでしょう。これまでの盟約などにとらわれているの

は愚のいたりです。あの大军、この小勢、守れるものではありません」

と、降こうをすすめた。

「そうか」

妙恵貞経さだつねは、うめいた。

むき出しに見せられた人間の奥底のものに、わけて娘婿の豹ひょうへん変に、いいようのない顔いろではあつたが、

「ぜひもない、わしも臍へぞをかためよう。が、託磨、中村などを諭さとすあいだ、お汝ことはやぐらの上へあがつて、わしの合図を待て。合図を見てから敵を招き入れろ」

と、言つた。

原田は、急いでやぐらの上へ戻つて行き、一時、降旗こうきを巻いて、舅しゅうとの合図を待つていた。妙恵貞経が、先に尊氏の迎えに行つた子の頼尚へあてて、あの悲壮な遺書を書いたのは、この瞬間のうちだつた。

したため終ると、それを侍童の井筒丸いづつまるに持たせて、

「そちはすぐ落ちろ」

と、搦手からめてから出し、屈強な兵十人ほどもつけてやつて、さて、左右の一族へは、いまは最期のほかなしと告げ、

「火を放かけろ、まず、やぐら下から一面に、火をかけろ」
と、凄まじい命を下くだした。

こうして、彼は有智山寺へ駈け入り表の廻廊に坐りこんだ。一族郎党百数十人も共にそこへ居ながれた。とりでの炎は、みるまに、あたりを熱風にし、大おお廂おびさしの裏がわを舐なめ廻る。――するうちに、妙恵の顔がニタと笑っていた。――彼方のやぐらの上で、炎に巻かれながら躍り狂っている娘婿の影をその目が見たからであつた。やがて、煙の中の蚊かのごとき人影はみな仆たおれ、やぐらも音をたてて轟ごう然ぜんとその火の柱を燃えくずした。いちめん、火の塵ちりと火の風が、有智山寺の縁を吹き巻いた。

妙恵以下、すべて、そのときもう自分の刃で、身を伏せていた。火も熱くなく、冷たくもない姿だつた。

妙恵の末子、頼尚には弟にあたる宗応藏主ぞうすは、まだいと若い仏門の人だが、父に殉じゆんじて、おなじく自殺した。しかし沙門しゃもんの人だけに、武士の列には並ばず、本堂の御厨子みずしの前に、部しとみの格子戸たきぎや薪を積んで、仏者らしい火定かじようのかたちをとって死んだ。

――あくる日もまだ余燼よじんは冷めきつていなかった。が、寄手の大將菊池武敏は、さつそく、ここへ来て、妙恵入道以下の黒焦くろこげの死体を篤とくと実検して、そして言った。

「南無……。これで先の年、博多において、少弐、大友らのため騙たばかられて無念の死をとげたわが父寂阿殿じゃくあどのの仇あだを取った」

これで仇あだをとつた！

武敏が発した声のうちには生なまのままな人間が躍っている。

時潮の人間は、大義名分だけでも去きよしゆう就しゆうしていない。利害こうはいだけで向背こうはいするとも限っていない。恩や恨みによつてもままうごく。

乱雲の模様のように、地上の乱にうず巻く時の武族の離合集散ほど、はかり難いものになかった。

しかしいま、菊池武敏の若い眸には、毛頭、そんな顧慮などない。太宰府をふみやぶり、少弐妙恵みょうけい一族を屠ほふり去つて、

「あとはただ尊氏あるのみ。その尊氏とて、漂泊ひょうはくの一亡将だ、何する者ぞ」
の気概だった。

内山の——まだ余燼濛々よじんもうもうたるあとに立つて、
「勝鬨かちどき、勝鬨」

と、三たびの凱歌を全軍にあげさせ、その二万余騎にのぼる味方にほこり、もう明日の大捷たいしやうをも、確信していた。

そして、思うには。

「朝敵第一の賊尊氏が九州へやって来たのは、招かずして、わが菊池家の門へ、幸運の鳥が来て啼いたようなものだ。——尊氏を討たば、その軍功は当然、宇内随一の勲功。——いやでもこの全九州は菊池家の下風に服せざるをえまい」

あながち、これは彼の夢とばかりは言い難い。

朝廷でもいまは、尊氏、直義の首には、何カ国の恩賞を附すもよいとしていることだし、ゆらい、九州の豪族間ではまた豪族同士で、この狭い領土を侵し合つて、すきあらば寸土でも自家の勢力を伸ばそうと、互いに虎視眈々と境をせめぎあっていたのでもある。——たしかに今このとき足利尊氏を討てばだった。——一躍、武敏の夢も夢でない実現性は充分にあるといえる。

「それにはまず、尊氏方の手足から先に一掃せよ」

と、武敏の令で、全軍はその日、博多へ殺到した。

鎮西奉行大友具簡がその目標だったのである。ところが、大友はすでに見えず、この日ごろ博多附近にありとみられていた島津道鑑、大隅忠能、中原貞元らの兵も早やどこかへ引き払っていた。——そして一部の宮方だけが、わずかに菊池党を待っていて、

「風聞には、尊氏の一勢、およそ五、六百、少弐頼尚の案内にて、昨夕、芦屋へ上陸し

たとのことにございまする」

と、口をそろえて告げた。

武敏は、動^{どう}じない。すでに途上でそのことは、いくどもない早馬の報で知っていたからである。——けれどまた、まもないうちに、尊氏以下が、杣^{えぶり}の一寺を出て、宗^{むなかた}像へ急進中——と聞いたときには、やや意外そうな顔いろだった。

「はてな。そんな無勢で、彼から行軍を急いでくるはずはないのだが？」と。
彼の胸算用では。

まずは宗像一族も、ぜひなく尊氏へ味方と加算し、それに少貳^{よりひき}頼尚、大友具簡、島津道鑑、大隅忠能、そのほか河田、渋谷の徒^と、つまり九州足利方のあらましが加わったとみても、たかだか千か千二、三百人。尊氏の手持ち勢と合せたところで、ほぼ二千にたらぬ兵力だ。笑うべき小勢にすぎない。

敵は小勢だ、わが十分の一以下だ。それに、太宰府や博多の要^{ようしやう}衝^{うち}もこう抑^{おさ}えたからには、これ以上、尊氏方へ転^{ころ}ぶ馬鹿もあるまい。また地理的に行けもしない。

「砂か……。これやひどい。風が強くなつて来たな」

武敏は、その床几で、顔を払った。

附近で兵糧をとつていた将士もみな背をまげて、弁当を庇つた。午頃から北風はいよいよ募り、時々浜砂を持った烈風が、痛いほど目鼻を撲つてくる。

そこへ、味方の一将、秋月寂心が、伝令にもよらず、自身、彼の床几を訪うて来て、掃部助（武敏）どの。兵糧はおすましか。どうも心得ぬふしがみえるぞ」

「心得ぬとは」

「宗像にいた所縁の者が、逃げて来たが、その話によれば、尊氏の一勢は、宗像ではつかのま休息しただけで、ひた急ぎに、西へ急いでいたと申す」

「こなたへ向つて」

「いかにも」

「それこそ、灯をみて飛びこんで来る虫よ。われから死所へ急いでくる敵なら、望むころではあるまいか」

「いや、そうばかりもいえませんまい。尊氏とて凡将でなし、直義には勇猛の聞えもある」

「知れたものだ。彼らは筑紫武者の骨髓を知っていない。来れば思い知らせてやる」

「が、先導には少貳頼尚、大友、島津、大隅らも加勢のこと」

「何の、たかだか千か、千五百。味方は三万にちかい。鎧袖の一触だ」

「にもかかわらず、その小勢は、まじぐらに前進中と聞えてくる。敵にも何ぞ目途もくとするところがなくてはかないませぬ。何か、目あてが」

「玉ぎよくさい 砕さい だろう。彼らとすれば」

「それは恐こわいことではございますまいか。小敵といえど」

「あなどらず、か」

「おそらく必死を決した猛兵かとおもわれます」

「それはそうだろう。この九州へ上がったものの、這奴しやつらの運命は、自滅のほかはありえない」

「けれどもし、小勢ながらその敵が、高地を占めて、地の利をとつたら、ちと厄介ではありましょう。よろしくお味方もいまのうちに軍をすすめ、先鋒せんぽう、本軍、遊軍などの布置ふちに、抜かりなきを期しておかれてはいかがとぞんじますか」

「抜かりがあるか」と、武敏は笑つて——「布置ふちは今朝から武敏の胸には描けている。きょう、これより管崎はこざきノ宮に戦せんしやう捷の報をささげ、なお尊氏討伐の祈願をこめる」

「は」

「去つて、多々羅たたらの浜へ出、さらに北へ一里、名島なしまから松ヶ崎の高所を見たてて旗を立て、

あの附近を本陣としよう。——そして武敏の床几場を中心に、蓮華坂れんげざかから八田、土井方面へまで、わが二万余騎を扇なりに展開して待つ」

「さすがは！」と、寂心は賞めほそやした。「早やお胸にそこまでの御寸法があるものを、いらざることを申しあげました。仰せのごとく、鎧袖がいしゅう一触いつしよく、もはや恐れるものはございませぬ」

北風はいよいよ強い。

あたりの陣幕とばりを吹き捲くり、その一端の裾すそが、武敏の半身へも、うるさく絡からみついてくる。

「伝令。阿蘇あそどのを呼べ」

と、その床几しょうぎの声だった。

旗本の一騎は、黄旗をえびらに挿して、すぐ飛んで行つた。

風に攫さらわれた黄旗が地に捨てられてゆく。——まもなくまた、阿蘇惟直これなおと一族の惟澄これずが伝令と共に陣幕とばりへかくれた。

ほか、菊池の一族重臣もみな呼ばれ、武敏と秋月寂心の中に、砂風さふうの中の立ち話みたいな忙しい一会議がそこでおこなわれた。戦場の選択やら配備のしめしあわせらしい。

みな了解した。

とくに先陣を命じられた惟直のいそこ阿蘇惟澄は、

「身の面目」

と、勇んで去った。

二陣、三陣、また遊軍、それぞれの将もみな、

「こころえて候う」

と、ばかり各自の隊へわかれて行き、そのあとすぐ本陣から進軍令の貝の音ねが鳴りわた
り、諸隊の貝もそれにこたえ、屯々たむろたむろの陣幕は一瞬のまにたたまれ出した。

しかし大軍である、この二万余騎の軍馬が、すべて博多の巷ちまたを出切るまでには、重たい
熔鉄の流れに似て、勢いかなりな時をついやした。

ひとつには、猛烈な空ツ風のせいもある。

途中、

「あれよ！」

と、幟のぼりや旗さし物を吹きちぎられ、そんな道くさにも、少なからず手間どり、やがて武
敏の中軍が、笥崎はこぎさきノ宮の大前に着いたときは、はやその日の午後も凄まじい夕焼け空と

なっていた。――明確に言えば、延元元年の三月一日――申ノ下刻さる げく（午後五時）ごろ。

武敏は、用意の願文をおさめて、神前の拝を終り、そして参道の方へ退がりかけると、送迎に立っていた神人のうちの老禰宜ろうねぎが、おそろおそろ彼へ告げた。

「いらざることをとのお叱りちりを蒙こうむるかもしれませぬが、敵方はみなこの烈風を見て、旗はたの幟ぼりは用をなさじと、杉の葉を笠かさ印しるしとしておる由にございます。……お味方におか

れても、何か吉兆の物を兵の章しるしになされましてはいかがなものぞんじますか」

「なに、敵は杉の葉を笠印に付けて行つたと。そ、それをそちは、どこで見た？」

「わたくしが目に見たものではございませぬが、今日、香椎かしいの附近の噂と聞いておりましたので」

「香椎かしいで」

「はい、尊氏、直義どの以下、一軍こぞつて、香椎ノ宮前に駒を降りて休息の折にとか」

「まことか」

「なんでいつわりを」

「寂心じゃくしん殿！ どう思う」

彼は色を変えて、うしろの秋月寂心へ、こう息を弾ませた。

「——香椎^{かしい}といえ、いわずもがな、ここからわずか北一里。はやそこに足利勢を見た者があるというか？」

寂心は小首をかしげた。しかし彼の答えにもおよばず、このときすでに先陣へ出ていた阿蘇^{あそ}惟澄^{これずみ}から一騎つづいて二騎三騎、あわただしい急をこれへ報じて来た。報によれば、予定していた名島^{なしま}から松ヶ崎の重要な高地には、意外にも、はや敵が陣場^{じんば}を占めている模様であるという。

多々羅^{たたら}合戦^{かつせん}

——前夜。

尊氏は、宗像^{むなかた}の大宮司家^{だいぐうしけ}の門前で、しばらく兵馬を休ませていたが、あれからまもなくそこを立つていた。

「敵は南、味方は北。もし追い風ならば味方の利だぞ」

馬上で彼は言った。

はやそのころから北風のきざしが草木のそよぎに見えだしていたからだった。

宗像では、大宮司家の申し出で、兵百名ほどの助力をうけたが、なお総勢は八百余にすぎなかった。

これを以て、無慮三万にちかいと聞える敵の大軍へどうあたる気か。作戦のあてがあるのか。——正気でない急ぎといつても、疑う方がむりではない。

そうした危惧を、兵の心理を、尊氏も、充分知って知りぬいていたろう。いよいよ、明日へかけて、博多へ向つて急進撃と、南下の令をくだしたさい、

「この小勢を少なしと思うな。味方は敵の中にいる！」

と、全軍の者へ言つた。

いわゆる「出陣の辞^{ことば}」を以て、こう励ましていたのである。

「——敵の主たるものは菊池党と阿蘇^{あそ}、秋月の二、三党にすぎぬ。が、九州はひろいのだ。筑紫九カ国は数十党の力と地盤のうえにたもたれている。——従来、わが足利家の教^{きょうし}書^よに誓いをなした家々は十党二十党の少数ではなかった。——しかし尊氏の下向と、菊池方の進軍の急なりしたため、心ならずも一時菊池の麾下^{きか}につくとみせて機を待つ者、あるいは、間道に立ち迷つて、まだここへの参陣を見ぬ者など。——それらはみなあしたの味方よ。申さば、この一勢は少ないが、九州地下水の呼び水なのだ」

と、説きすすめ、

「建武いらい武家はむかしの下種とみなされ、公卿専横の御支配もすでに腐爛の状にある。みちのく、北陸、五畿、山陰山陽、武家の不平の声なき所はなく、九州とても鬱勃は久しかろう。——それらが挙げて尊氏を迎えぬはずはない。——が、それもただ呼び水のわが一軍の意気如何にはかかつておる。みなに誓う。尊氏は引く地を持たず、勝って生きぬく道のほかに生きてはおらん。しかし一条その道は明るいぞ、ここから博多までのあいだに、みな運も、わしの運も、また、天下いずれに傾くかのあしたもきまる！ 生き抜こう！ 死にもの狂い、死中に入っておたがい榮えある生を剋ちとろうぞ」

といつて結んだ。

肅と、すべての顔が、光る眼を持つて、聞き終った。

出陣の辞はままある例だが、こんなにも長くまた熱をこめて尊氏が言ったなどの例は、左右の将ですら覚えがない。

第一、尊氏はなかなか急を見ても腰をあげないたちだし、よほどでないと、乾坤一擲といったような大勝負には出ないほうの人である。——だから尊氏をよく知る者ほど、この出陣の辞には、胸をうたれたし、そしてひどく氣負つてもいないことばの正直さにか

えつて駈引のない覚悟をも、ひきしめられた。

事実、その言は決して彼の希望的な観測だけのものではなかった。少弐頼尚よりひさの意見をきき、また諸情報の総合などからも、尊氏自身、かたく信じていたのである。

で、じつにわずかな小勢にはすぎなかったが、

わああッ……

と、出足のとたんには、武者声をふるい揚げ、たちまち、後ろを見ない鉄の怒濤となつていたものだった。

許斐山このみやまを越えると、道は西郷ノ庄を望んで展ひらけ、右の山切れには、折々、水平線低く、玄海灘が壁画へきがのような顔をあらわし、強い北風もしばらくは後ろの峠にさえぎられる。

「オオ明け近いぞ」

まだまつ暗だが、玄海の沖には、旭日の微光が映さし、そしてこの頃からの参加者だった。「足利どのの御一勢と見たてまつる。それがしどもは」

と、道に会かいして、参陣を名のつて来る者が——三十人、五十人、——ひきもきらない。

「田川郡の田川則武のりたけと一族の者でおざる」

「これは、かねて御教書みぎょうしょを給わった直方ノ庄の一党」

「御上陸と聞き、問道、夜を日についで、馳せまいった鎮西村の者どもです」
諸族雑多だ。

しかし、龍造寺党や深堀、杉党などの大族の系類もあり、また、千葉氏や宇都宮氏のよ
うに、尊氏の将にしてこの筑紫に領地のある者もいたので、当然、それらも馳せ参じた。
かくてこの混成隊も四百人ほどに達していた。なおまた、これら途上からの加担人が、
いずれもいうには、

「立花山はこれから西へ三、四里ですが、きのう、博多の鎮西屋敷をひき払った大友近江
守（具簡入道）どの、島津道鑑どののお手勢などは、そこでみな、宰相以下の御軍
馬を、首を長うしてお待ちしておられるはず。兵も千余はございましょうか」
とのことだった。

「さてはよ」

と、尊氏の顔にも暁が映っていた。ほつと燃える眉で。

「島津、大友の勢は、いかにせしと思うていたが、そこで待つ腹であつたか。……したが
頼尚、なぜ立花山とやらに足ぶみしているのであらう？」

「ご存知でございませぬか」と、駒につづく駒の背から頼尚がいう。「——そこは粕屋

郷^う青柳ノ里と申します。和^わ白^{しろ}ノ浜を近くに、花鶴川を北にひかえ、小高い七峰を平野^{そび}に聳^{そび}えたて、うちの一つを井^せ楼^{いろう}山^{やま}と申し古くからの大友党の一城^{じょう}郭^{かく}です」

「ほ、大友の城か」

「されば、近年そこに住もうていたのは、いまの大友具^ぐ簡^{かん}の一子、貞^{さだ}載^{とし}でしたが、その貞載は、過ぐる箱根竹ノ下の合戦にあたり、宮方軍を脱^{だつ}して、足利將軍のお手につき、為に、新田義貞は、大敗して都へ逃げくずれたと聞きます……」

「や。あの貞載の」

「はい。立花城とよぶ彼方の山こそ、彼が故^{ふる}郷^{さと}にございます。……が、その貞載は、箱根合戦からいくばくもない後、都において、結^{ゆう}城^{きやう}親光の刃^{にん}傷^{じやう}に会い、あえなき落命をとげました」

「む、おぼえておる。忘れはいたさん」

「今日^{こんにち}、貞載の父具簡が、亡き子の城の跡に拠つて、將軍をお迎えつかまつる心根も、分らぬことではございませぬ。……おそらくは、わが子^{とむらい}の弔^{とむらい}合戦の決意と、あわせて、貞載の死を、足利殿御兄弟にも、思い出していただきたいのでございましょう」

尊氏は、うなずいた。

「頼尚、そちの一勢は、ここより養生ノ浦へ出て、浜道を行け。尊氏は立花城へ真ツすぐ向う。夜は白んだ。もう一ト息ぞ」

井楼山せいろうやまの上に立つて。——そこから和臼ノ浜わじろはま、さらに、北の山岳方面などを監視していた歩哨の一兵は、

「や。……?」

何をみとめたのか、とつぜん身をひるがえして、立花城の一郭いっかくの内へ飛んで行つた。ここの一砦いっさいは、貞載のあとをうけて、弟の氏泰うじやすが常住していたが、きのう以来、大混雑の様だった。——博多から父の近江守貞宗（具簡ぐかん）をはじめ、島津道鑑しもうかんだの、また大隅忠能らの部下もみな一つとなつて引きあげて来、徹夜で籠城の構築にとりかかつていたのである。

「なに、御勢おんぜいが見えたと」

「宰相さいしやうの御着ごちやくとある」

「それ、お迎えに出ろ」

こんな騒ぎの中へ、尊氏の軍は巳ノ刻みこく（午前十時）ごろこれへ着いた。

出迎えに立った城将たち環視のなかで、尊氏は、そのうちの一人へすぐ眸をとめた。と思うと、われから進み寄って、その者の手をかたくにぎっていった。

「尊氏です。あなたが具簡か」

「近江守具簡でおざる」

「都では、大事な御子息を亡^{うしな}わせた。——あの太友貞載^{さだとし}——よい武士であつたものを、尊氏へ大功を尽くさせたばかりにあえなき死をとげさせた。おわびする」

「な、なんの」

太友具簡は、初対面の彼から、いきなりこれをいわれたので、つい老いの目をキラと赤くうるませてしまった。

「兵家^{へいか}にはありふれたことでおざる。わが家のみの悲事でもおざらぬ。ご斟酌^{しんしゃく}はかえつていたみ入る」

「が、尊氏もきつといつかは貞載のうらみをなぐさめいではおかぬ。聞けばこの立花城はその貞載が住居であつたとか。浅からぬ宿縁とおぼえ申す」

「されば、はしなくここに宰^{さい}相^{しやう}の將軍をお迎えしたてまつるもまことに不思議。ここを根じろに、一^{いちじよう}定、弔合戦の覚悟にござりまする」

「いや」

と、尊氏がこのとき、ここに拠つてたてこもる意志などはちつともないような語気を出したので、城将はみな彼へ疑惑の眼をそそぎかけた。

「空濠からぼり、逆茂木さかもぎなどの工はただちに止めさせたがいい。敵は三万にちかい大軍と聞きおよび。途上、按あんじてまいったが、ここは守るに利のある地形とも見えぬ。かつは尊氏が一城に籠こもつて、屈居くつきよすると聞えたら、なおまだ多い筑紫諸党の武士は、いよいよ菊池の麾下かへ寄るであらう」

「では……。御所存、いかがなところに？」

「すぐ博多へ襲よせてゆく」

「この御勢おんぜいで」

「それしかない」

「したが？」

「勝算をあやぶまれるか」

「たれが眼にも」

「もつともだ。が、案じられな。味方あは敵の中に在る。かねがね教書を以て、心をかよわ

せていた九州諸族も、我に百難の中も行く意気あるを目で見ねば、なかなか来り投じまい。
一定、ここは九州のわけめ、いや天下のわかれ目だ。進んで戦うほかはない」

具簡はだまつた。尊氏はすぐ夜来の兵たちに一刻の睡眠をゆるし、自身はなお、一郭の内、軍議にはいった。

初対面だった具簡は、このとき、尊氏という人間に、一見、よほど感じたところがあったらしい。

後日の話にはなるが。

「続・伝燈広録賢俊伝」のうちにはこういう一記事が載っている。

九州平定のいくさも終つたある日のこと、その大友具簡が、尊氏の侍僧日野賢俊にむかい、つくづく懺悔して、こう述懐したのである。

——じつ申せば

われ始めのほどは

到底、勝戦なきを思ひ

ひそかに

將軍（尊氏）を討たむもの

とちかひ居しが

そのをり將軍の形質を看^みたるに

面^{めん}容^{よう}優長^{ようちやう}にして

げに大人^{たいじん}の風貌^{そな}備^{そな}はる

天下^{てんか}の器^うとして

この人、何の不足かあらむと

即座^{ばく}に幕下^{ばくか}たるを決したるなり。

云々^{うんぬん}と。

これで見ると、立花城にとどまつて足づみしていた大友たちの腹は、まだ決して尊氏一
辺倒^{へんたう}だったものではなく、次第によつては、尊氏を捕^とり籠^こめて、おのれが、菊池党以上の
勲功を一挙に揚げようという二の足掛けていたものであつたらしい。

この一話は、じつに当時の物騒きわまる九州武族の腹の底をよく打ち割つてみせてもい
るし、また彼らが、尊氏の九州下りをいかに待ち、いかに觀^みたかの、好実例といつてよい。
——尊氏にすればまったく薄氷の上どころではなかつたのだ。

ゆえに、もし彼が消極的な大事をとつて、立花城に籠^{こも}るようなことだったら、具簡らに

も「およそな者」とその器量をみくびられて、逆な悲命を招いていたかもしれない。——といって、そこまで複雑な人心のけわしさを尊氏がよく看破かんぱしていたというわけのものではなからう。尊氏にすれば、すでに身を九州の一角においた以上、そう出る積極以外、勝機をつかむ途なしと信じていたまでのことだったにちがいない。

やがて。

一郭かくでの軍議はすぐきまつた。

大友は、この辺の地勢にあかるい。

「昨夜らい、敵も博多へ入っており、きようは兵をととのえて、北へ進撃して出るものとおもわれます。また、お味方もここを出て進むとすれば、必定ひつじょう、その会戦の地は、香椎かしいと筈崎はこぎさきノ宮との間——多々羅たたらヶ浜はまからあのあたりの広袤こうぼうでしかございませぬ」

との、観測を述べ、

「そこは宇美川うみかわ、久原川くはらがわの流れが合がっし、また支流は縦横に走って、沼や芦原や、いたる所、砂丘さきゅうの雑草もふかく、わけて足場のわるい平野でおざる。——そして西はいちめん多々羅の浪打ちぎわ。——御勢おんぜいの利は、一刻もはやく、同所の北寄りに散在する高地、名島なしま、松ヶ崎、陣ノ腰などを占めて、敵に先さきんずることにあるかと存ぜられる」

と、鎮西屋敷所蔵の、詳細な絵図をひろげて、献策した。

「よくぞ」

と、尊氏はすぐ腹をきめ、その場で諸将へ命令した。

「具簡の献言、至極と思う。絵図でみるも、松ヶ崎までは一、二里の近き。ここの城に代えて、先の高地を取れ。まず、そこを占めてから休もうぞ」

香椎はすぐだった。ものの一里ほどしかない。

立花山にあつた足利方の総勢がそこまで進出を見せたのはわずかなうちで、すでにここらが危険地帯に入るうわさは土地を風靡ふうびしていたのであろう。通つて来た部落から香椎附近でも人はおろか犬の仔すら見えなかつた。それに昼ながら天地はひどい烈風の形相ぎようそうでもある。

だが、香椎ノ宮の神人たちはみな並んで尊氏以下を迎えに立った。

彼が、祈願をこめたことは、後日、子の義満よしみつが当社に納めた願文のうちにも見え、またこのさい、全軍の将士が、神主かみぬしから杉の葉をうけて、それぞれの笠印かさじるしに挿したということでもある。

「金葉集」にも。

——隆^{たかいへ}家の卿^{ださい}、大宰ノ帥^{そつ}とな

りて、二度、香椎^{かしひ}へ詣^{まゐ}る。

かんぬし、形のごとく、杉

の葉を折りて、帥^{そつ}の冠^{かうぶり}に

挿^よすとて詠^よめる。

ちはや振る

香椎の宮の

杉の葉を

ふたたびかざす

我が君ぞ 君

熊野詣^{くまのもう}では、柳^{なぎ}の木を折つて、髪^{かみ}や冠^{かぶり}にかざして帰る風俗があるから、ここでも杉

の葉をそうするような風習があつたのだろうか。

あるいは、この日の強風に、旗さし物などは、用をなさずと見た尊氏が、戦略的な考えのもとに、

「かぶと、よろいの綿貫^{わたぬき}、どこにても、味方は味方とすぐわかる目じるしを付けよ」

という単なる思い付きの布令ふれいであつたかも知れなかつた。
いずれにしろ、全軍は、

「それつ」

と、ただちに、香椎からすぐ南の丘きゅうりようたい陵帯へ思い思い駆けのぼつて、その高所から、さらに南を望み、

「敵は？」

と、菊池方のうごきを視野にさがしたにちがいない。

が、この時刻ごろにはまだ菊池勢は博多を出たかどうかの頃であり、その先鋒すらなお、箱崎附近に見えていなかった。

後になつてみれば。

じつに、多々羅合戦の勝目と敗けのわかれは、この機微な時間差のうちにあつたといえぬこともない。

「しめた」

直ただよし義は、躍はつて言つた。

「敵はまだ、影も見せぬ！」

一軍を名島に、一軍を蓮華坂れんげさかに、また一軍は松ヶ崎から陣ノ腰へかけての山上へ、長く横に布陣して、敵を待った。

とはいえこの横陣おうじんが、奥行きの浅い薄手だったのはいうまでもない。

総軍、わずか二千余だ。

これを古典の諸書すべてが——菊池方を五万騎となし、足利勢は六、七百騎にすぎず——としているのは明らかなまちがいである。すくなくも二千がらみの兵は尊氏も配置したものともみてさしつかえない。ただ彼が戦わぬ前に稼かせぎ取っていた地の利は、やがて、その用兵を十倍にもする効果となっていたのである。

果たして。それから一刻ときほど後には、箱崎から多々羅へかかって来た菊池方の大軍がみえ、さすが武敏はすぐ、敵がすでに地の利に拠よつているのを見て「しまった」と臍ほぞを噛んだ。

ひとくちに多々羅ヶ浜といつても、南は筥崎はこざきノ宮みやから北は香椎手前かしいでまえの丘陵線までの渚なぎさ一里半、芦あし、泥田、砂原などの広い平野もふくんでいる。

そして、総じてここらは、元寇げんこうノ役えきの遺跡だった。

国をあげて、外敵にそなえた日の防柵ぼうさくや石垣や乱杭らんぐいの腐木ふぼくなどが、今も川床かわどこや草

の根に見あたらなくはない。

菊池武敏は、浜をひだりに、箱崎の松原を、ひがしへ出た（現・九州大学附近）。――
秋月、星野、草野、黒木党などを両翼に、少しさがっては、松浦党だの神田党など、どつちをみても、味方の軍勢で、野も海辺も埋めつくしていた。

「敵はどれほどかある？」

武敏の問いに、

「ざつと二千余」

といったのは、大物見からいま返つて来た赤星六郎兵衛で、

「それ以外な隠し勢は、よも、あるまいかと思われます」

と、つけ加えた。

武敏は馬上でうなずきながら、かぶとの眉^{まゆ}廂^{さし}に手をやって顔をそむけた。――敵のいる陣ノ腰から名島の方を望むたびに、その真^まつ向^{こう}から吹きなぐツて来る北風が、かぶとの鉢^{はち}金^{がね}やよろい金具に砂^{すな}音^{おと}をたて、皮膚の出ている部分は痛いほどだった。

「越前。彼方の小川は」

「^{すえがわ}須恵川の水です」

そう答えた城ノ越前守へ、武敏がすぐ一令をくだしていた。

「水を前に、一陣の敵が見える。越前、こころみに仕掛けてみる」

「はっ」

と、すぐ二百騎ほどが、夕陽を背にしてまっ黒に突いて行つた。——すると、芦のうちから起つたべつな敵の伏勢が砂丘をめぐつて越前守の兵の後ろへ出た。武敏は驚いて。

「や、あぶない。六郎兵衛すぐ加勢へ向え。ひがしの芦原には敵が雁のように無数、隠れているぞ」

「おうっ」

と、赤星六郎兵衛もすぐ手勢三百を叱咤して駆けて行つた。

この方面が序戦だつた。

浜の手の方面では。

阿蘇惟直、惟成の兄弟。また一族の惟澄などが、同時に、呐喊の声をあげていた。

が、敵は浜戦を避けているかにみえる。——多々良川の川ぐちまでのあいだ、敵影は見えず、対岸の名島の高地に、旗、幟、うす煙などが強風下に翻々と狂い舞っているだけだつた。

もとよりこれは偵知されていることなので、三千の喊^{かんせい}声は、その黒い怒濤を右折し、川に添って、松ヶ崎の下へ迫った。高地の一部を占領して、山^{さんりよう}稜に拠^よっている足利方を、両断するの作戦であつたらしい。

ところが、そこへ迫るやいな、まず乱^{らんせん}箭の雨に見舞われた。——逆風なので矢向きは不利と初めから菊池方では接戦を主眼としている。ほとんど、こっちの矢は一矢^{いっし}も役に立っていない。

「知れたものぞ」

「敵は小勢」

これは合い言葉みたいに菊池方ではくり返された。しかし矢ばかりでない、土砂も吹きつけてくる。みるまに、犠牲が積まれてゆく。——「ひとまず退^ひけ！」と退いたのもまたなおまづかった。敵の仁木義長、千葉大隅^{おおすみ}らの兵に追い打ちをかけられて、みるまに阿蘇^{これなり}惟成は負傷し、以下、数百の死傷をここの退路に出してしまった。

落^{らくじつ}日も薄れ、浜の手も野面^{のづら}もいつか暗かった。

陣ノ腰の高い所から形勢をみていた尊氏は、

「師^{もろなお}直、師直つ」

と、左右の人影へむかつて。

「浜の敵は逃げくずれ、松原の方面でも、味方は深追いに入つた様子だが、まだまだ序戦だ、敵の死命を制するには足らん。——それに早や宵闇。——長追い無用と、味方を退かせろ。全面的に、引きあげさせろ」

「はっ」

と、高ノ師直は、すぐ旗本の数騎を、伝令に放ツた。

ほどなく、多々羅のおちこちで退^{ひき}貝^{がい}の音^ねが鳴つた。——しかし、敵の逃げ足に釣られてつい箱崎あたりまでも深追いして行つた味方が少なからずあつたらしい。——すべての将士が引きあげ終るまでにはかなりの時間を要したし、なおまだ、貝を吹けども吹けども、ついに戻つて来ない味方もある。当然、それらは敵の重囲に陥ちて、ふたたび帰ることない被^ひ殲^{せん}滅^{めつ}者^{しゃ}とは察^{さつ}しられながら、貝の音は、子をさがす母のように、いつまでも、あきらめきれぬその呼び貝を、夜の野に、吹いていた。

「……ちと、意外」

と、尊氏は引き揚げてきた諸将を周囲に見て言つた。

その夕、最前線にあつたのは。

頭こうノ殿どの、と人の呼ぶ尊氏の弟、左兵衛頭さひようえのかみ直義ただよしをはじめ。

曾我上野介そうぜのすけ師資もろすけ

南遠江守

宇都宮彈正たいひつ大弼

仁木義長

千葉大隅守

高ノ越後守こう師泰もろやす

などだったが二、三帰らぬ顔もあつた。

それにせよ我の十倍以上にものぼる敵が、なんで脆もろくもついえたのか、尊氏は、諸将から聞きとつた戦況を按あんじて、たやすく勝ちに驕おごれなかつた。

「……察するに、今日の烈風、敵も利ならずと考えて、決戦はあしたにと、俄に一時、退軍をみせたのであらう」

と、引き緊しめて。

「油断はならぬ。明日こそは、われらの一期いちごだ。まずは酒に体でもあたたため、こよいは充分に身を養つておけ」

と、野戦食を喰べながら評議にかかった。

風は、夜半ごろから小やみを示している。——いっすい一睡をとって、やがて起つと、諸将は、名島から松ヶ崎そのほか諸所の高地にかりを焚き、また無数の旗じるしを、木々の枝にまでつけて、偽陣ぎしんの態ていを作った。

そして、暁早く。

尊氏はその本陣を、多々羅の低地へふかくすすめて、旗を伏せた。

直義も、師泰も、足利勢すべてこの日は、近々と敵前へ出て、後方の低い山々には、一兵も残していなかった。——要するに、総当りの体勢で——きょうを以ていちかばちの決戦の日と、期したのだった。

反対に。

菊池勢は自重しすぎた。

「なにほどこあらん」と思い。「敵は小勢」と初手しよてにあまく観たのが案外だったので、その反作用からかたく堅陣をとつてうごかなかった。加うるに、彼方の偽陣を見て、それも足利方後詰ごづめかと、誤算していた。

あかつき。——風はなく——けさは白い川かわもや霽さえ、たちのぼっていた。

その久原川を、ザブ、ザブ、ザブ、百余騎の影がいま南へ越えて行つた。

足利方の千葉 おおすみのかみ 大隅守 だごのしゅ だつた。

「敵の首将菊池武敏が、今朝は陣地がえして、多々羅のみなみ、津屋へ出ている」と偵知したからである。

そこは、自陣ともつとも短距離な地点だ。――抜け駆けは軍紀の禁だが、みすみす、目のまえに敵の首将がいる！ 大隅は後日のとがめを覚悟で単騎斬り込みの挙に出たものだった。

しかし、武敏の旗は、数千の兵馬で厚く守られている。すぐ気づかれて、

「しやつ、小癪 こしやく な敵」

と、大隅の兵は、朝討ちの奇功をあげないうちに、取りまかれてしまった。

これに気づいた今屋敷 いまやしき 方面の足利直義 ただよし は、

「大隅を討たすな」

と、急に、助けの兵を突貫 とつかん させた。――わああつと、その野俣 のこだま を機 しお に――様相はこの一角から激変した。

「一方の大將は尊氏の弟、直義とみえまする」

と、聞いた菊池武敏は、

「のぞむところの敵」

と、彼も自身、陣頭指揮にあたりだした。

名のりかけて——将と将との一騎打ち——といったような古風はもう廃^{すた}っている。けれど首将みずから劍^{けん}槍^{そう}の中を駈^{かけ}けるき、歩兵や騎兵を叱^{しつた}咤^たし廻る戦鬪^{しんとう}ぶりに変りはなく、武敏の手にある一槍^{そう}もすでに血ぬられて、

「ひとりも生かして返すな」

と、その包囲力は直義をつつみ、さらに麾下^{きか}の人数を寸断していた。

助けに來た直義も、果然、ここで苦戦におちた。

「あれよ。頭^{こう}ノ殿^{どの}があぶない」

足利方は、動揺した。大きな作戦の狂いでもある。

不用意に敵へ迫った大隅や直義らの兵は、洲^すや水に、後ろを断たれ、いわば死地の孤軍となつた形なのだ。

「時を措^おいては」

と、少^{しょう}貳^にの兵、大友の部下、宇都宮^{うつみや}彈^{だん}正^{しょう}らも、自陣をすてて、救援にはせつけた。

——しかし敵の増援はそれにもつと数倍している。

「しよせんは、斬り死にか」と、直義はいまは覚悟のほかなかった。

そこで彼は、乱軍の中から兄尊氏の陣へ使いをやり。「どうも、やり損ないました。直義は討死のほかございません。残念ながら兄上はもいちど周防長門の遠くへ落ちて、ご再挙をはかってください」と、よろいの片袖をちぎって形見に送り届けたという。——これは「梅松論」の説だが、そんな余裕があつたとも思われない。おそらくそれほどな危急だつたということだろう。

——この危急をよそに。

そのあいだ、尊氏が何していたかは、すでに多々羅全面、戦塵漠々せんじんはくばくのとどろきで、よくわからなかったが、ただし、彼がじつと、その危機感に耐えていたことにはちがいない。

彼には、ひそかに、待つものがあつた。

その待つものを眸にするまでは、たとえば直義が戦死と聞いても、彼はおそらくめつたな妄動には出なかつたろう。

同時刻——

浜寄りの方面でも、敵味方の戦列が、互いの顔が分るくらいな近距離まで接近して、しばしば、

わああつ……

うおおツ……

と武者声を揚げあつていた。

なぎぎ
渚を洗う大波は高かった。

まだきのうからの余風をおさめきらない多々羅ヶ浜一里余の磯は、いちめん、まっ白な潮けむりなのである。——両陣数千の兵も馬もまた刀とうそう槍の光も——まるで飛沫しぶきに翻弄ほんろうされる千鳥ちどりの大群か何ぞのように見えもした。

当然、矢は用をなさないので、長柄ながえ、なぎなた、太刀、槍の白兵戦となろうが、いつまでも、或る至近距離から内へは敵もすすまず、こつちも出てゆく風はなかった。——対峙のままただ喊声かんせいをからして、両軍、どつちも潮に濡れ光っている。

この手の足利方は。

細川あきうじ顕氏、上杉しげよし重能、畠山国清などで、それに少貳しょうに頼尚も、陣のさきに立っていた。

その頼尚は、かねがね、尊氏へむかつて、

「——敵はどんなに大軍でありましようとも、恐れることはありません。いずれ皆、お味方にまいらんと希っている者どもですから」

と、言つていた。

果たして、そうなのか、どうか。

前面に在る敵は、菊池方の阿蘇あそノ大宮司これなお惟直これなりの軍勢だった。弟の惟成これなり、いとこの惟澄れずみ、みな一陣らしい。そのほか数千の後詰ごづめがみえる。とうてい足利勢とは比較にならない陣容だ、鉄壁の陣だ。

そのとき、少弐の隊にいた饗庭あえばノ弾だんじょう正左衛門ささえもんが、頼尚の馬前へ来て、

「これでは果てもありません。万一、かかるあいだに頭ことうノ殿どの（直義ただよし）が破れ、宰相さいしやう（尊氏）の中軍も突かれなどしたら一大事です。——まず饗庭あえばが捨て石となつて駆け入りますゆえ、ときを外はずさず、おつづきください」

と、言い捨てた。いうやいな、馬をおどらせて、敵兵の戦列へ猪突ちよとつして行つたのだつた。

きツかけは、かならず一人か二人かの果敢かかんによる。あとは、たちどころに、入りみだれ

ての乱軍だった。猛兵というよりは盲兵のすがたである。斬りむすぶというよりは叩き合
 いだった。逃げる、追う、また取り組む。その上へ、大波が来て、波にさらわれて渚なぎさを這
 う兵もある。

でも、しよせんは、圧倒的な兵力を持つ方の勝利でしかないと見えたのだったが、俄然、
 ここを契機として多々羅全面には妙なうごきが歴然と見えだしていた。——重厚な総菊池
 軍のうしろから、いやどこからともなく、

「や、や、おかしいぞ」

「異変だ。裏切り」

という奇妙な絶叫が諸方で流れ、陣は陣自体を寸断して、黒い渦、黒い奔流、まったく
 秩序を失った猜疑さいぎぶかいただの群集と化し去ってしまったもののようにみえる。

せつな。

これを砂丘の上でみとめた尊氏の眸は、細く目尻で笑ったようだった。

——味方は敵の中にいる

とは、かねがね、彼も言っていた今日の信条だったのである。満身の声で彼はそこから
 中軍の将士へ言っていた。

「突ツ込め。前面の敵へ無二無三突撃しろ。時は今だ」

寂^{じゃくしん}心、秋月種^{たねみち}道は、味方のくずれに押し返されて、落馬した。

「しゃッ、なぜ退^ひく？　なんで逃げる！」

彼はさつきから、尊氏の中軍を前に、機をうかがっていたのである。

尊氏の弟直義の一勢が、久原川の洲^すで危殆^{きたい}に陥ちたかたちなので——もし尊氏が、その救援にうごいたら、ただちに、陣の側面を突いてやろうと、虎視眈々^{こしたんたん}でいたものだった。ところが。

とつぜん、尊氏の中軍は、一大喊^{かんせい}声と共に、こっちへ突進して来たのである。

「や、や？」

彼が意外としたのは、そのことではない。味方全体がなぜ戦わぬうちにドツと逃げ足立てたことだった。——このとき、後方にも起っていたとっさの変^{へん}が、彼にはまだ意識されていなかったらしい。

けれど原因は、寂心にもすぐ分った。——杉の葉でない、折り笹^{おざさ}を笠^{かさ}印^{じるし}とした紛^{まぎ}れ。——さては裏切り者の内^{ない}応^{おう}かと、寂心も早や狼狽措くところを知らなかった。

「松浦党だ！ 松浦党だッ。——裏切りは松浦党と神田党だぞ」

悲調な叫びが野を掃はいている。けれどべつな所では、

「龍造寺党だ」とも聞え、

「いや、草野党だ」

「相良党もだ」
さがら

と、いったふうに、まったく一致していない。

事実、離反者は名のりもあげず、いきなり矛ほこをさかしまに味方の腹を切り裂いてあばれ出したものであるから、明確に捕捉しえなかったのも当然だった。

ただいえることは。一党や二党の少数の裏切りではないことである。

ために秋月寂心じゃくしん種道たねみちは、この逆巻く人海から逃げおくれ、ついに、あえない戦死をとげた。

また、浜の手方面の阿蘇あそノ大宮司一族の軍も、箱崎方面へと一散になだれ立ち、なお、とどまる所なく太宰府の方へ落ちて行つた。——そのうえ大宮司惟直これなおも、弟の惟成これなりも、本国へ帰る途中、尊氏方の呼応者こおうしやにとりかこまれて、部下百六十人と共に、無残な死をとげてしまった。

わけて、惨^{さん}たる人は、総大将の菊池武敏だった。

彼に、もう一刻^{とき}の時をかしていたら、久原川の洲で、敵将足利直義^{ただよし}を討ち取ってもいたろうに、せつなを、自軍の内から覆^{くつがえ}されて、城^{じょう}ノ越^{えちぜん}前、赤星六郎兵衛、ほか三十七人の旗本まで、みなバタバタと討死をとげ、彼自身も重傷を負って、からくも危地^{だつ}を脱しえたほどだった。

様相すべて、ものの半日もたたないうちの一変である。

いったい、なにが？

何の作用が、この狂奔と大転機をよんでいたのか。——血の曠野はただ狂える物のようでありながら、尊氏の行く一勢のみは、それを中心に、続々と、騎馬鉄甲の影が厚くなつて行くばかりだった。——おそらくは尊氏自身すらも、こう急激に凱歌の門が、こつねんと征野の前に開かれようとは、予想もしていなかったのではなからうか。とまれ彼は、残敵^{そうどう}を掃蕩しながら、その日の午後にはもう博多の内へ入っていた。

ふな
船あつめ

尊氏の博多入りは、歩武堂々な入市ではない。途々、降参人を入れ、掃蕩の余勢を駆ツて、いつか巷に乱入していたのである。

町屋を見ると、彼は急に、駒を辻に止めて、

「火を放けるな。路地へ逃げこんだ雑兵などは放ッておけ。ただ町口に木戸を設けて警備に付け」

と、命じていた。

町そのものは案外なほど平静だった。戦争は別世界でしていることと見ているような表情なのだ。概して、この地の建物も住民の皮膚も、中央や東国の民よりは、はるかに豊かで健康らしく思われた。玄海の磯の香、湊の風物、異国的な色調の橋やら客館など、尊氏には物なべて、

「ここが博多か」

と、目新しい。

また、その尊氏の姿を、遠くでながめている女子供を交ぜた群集も、

——どこから来たお人や？

と、眩しげな怪訝りを顰めあっている顔つきだった。——が、たれからともなく「足利

殿だ」とささやかれ出し「足利殿、足利殿」と、ものめずらしきを、さらに大きく呼び起すと、兵が追つても追つても、すぐ寄りたかつて来てやまなかった。

「具簡——」と、尊氏は駒をつらねていた大友近江守を見て。

「——かつて鎌倉の探題がいた探題屋敷はどのへんか」

「すぐ彼方の、櫛田神社のひがし隣にございまする」

「あの大屋根か」

「はっ」

「案内を」

尊氏は、彼をさきに立てた。

が、休息もとらず、彼は宏大な築土の館門に入ると、そこそこを見まわして、何か、感慨無量な容子だった。

「具簡……」

「は」

「鎌倉最後の探題、赤橋修理ノ亮英時（北条英時）どのが御自害の地はここだったな」

「さようで」

「御墳墓は」

「後に、おかたみは、承天寺の一僧がたずさえて、英時殿のお妹にあたらせられる東国の御方へ届けられたとうけたまわっておりまする」

「それはわしの妻の登子とうこよ。いかにもそのせつ登子の許へ、かたみは届けられて来たが、お墓はないのか」

「当時、何分にも、九州全土は、宮方一色の有様となり、いずれも宮方のとがめを怖れ合っておりましてので」

「そうか。いやむりもないことだ。きょうここに、尊氏が参ろうなどとは、当年、たれに予測しえたらうか」

ふと、彼は、身をかがめた。

そして両りょうの掌てに、足もとの土を掻すくい取り、それを持ったまま彼方へ向って歩きだした。前裁せんざいから大庭へ入ったひだりに、まろい山芝の築山がある。

何をなさるのか？

と、人々は怪しみ見ていた。大友具簡どうかんをはじめ、島津道鑑とうかん、少式頼尚よりひさ、ほか筑紫諸党の大將輩たいしょうばらも、そろそろ、彼のあとについて行つた。

尊氏は、一塊いっかいの土を、築山のうえにおいた。そして、それを亡き英時の霊とみて拝すように、下へ退さがつて、ぬかずいた。

疑うまでもない。尊氏の多感な今日の胸はわかる。

乾坤けんこん一擲てき、勝つて、博多の土をふんだのだ。そして、妻の兄英時が、あえなく滅亡をとげた恨みの地——探題屋敷の跡——へ勝者の將軍として十余年後のいま立った彼なのだ。一塊の土へ向つて。

彼がぬかずいたのは、自然な万感からであつたろう。とりあえず、英時の霊へ、回向えこうの意こころだつたにちがいない。

だが、足利譜代ふだいの諸將はともかくいられたが、九州諸党の大將輩にしてみると、これは何か肌寒い。卒然とみな色を失つた。

なぜならば、その英時滅亡の日の、攻囲軍中には、ここにいる全部の九州武族が、みな宮方となと称なえていたのだ。——つまり今日こんにち尊氏に従っている者も、かつては、ここの探題屋敷を攻めて英時を自滅させた当時の下手人ならざるはないのであつた。

大友具簡、しかりである。

頼尚よりひさの父、少貳貞経しょうじ（妙恵みょうけい）も、その一輩だ。

また、島津道鑑どうかん

深堀正綱

龍造寺家泰いえやす

松浦連れん

草野間真かんしん

むなかたとつまる
宗像土都丸

など、ほとんどが菊池、阿蘇あその協同者だった。そして英時ひでときを屠ほふつたのだ。——それらすべてが尊氏には義兄あにの仇あだといえなくもない。

だから彼らは、尊氏がこの土につよい旧怨を持っていたらしいのを見て、またその回え向こうの態ていをながめて、

「さてはまだ、過去の恨みをお忘れないものとみえる」

と各、尊氏の報復を、今後に思つて、ぞつとしたに違いなかった。——で、尊氏が拝を終ると、具簡ぐかんは畏る畏る、追従ついしやうしてこう言つた。

「泉下せんかの赤橋（英時）どのにも、今日はいかばかり、およろこびか。また、將軍（尊氏）におかれましても、お恨みの一端が、まずはいささかお晴れ遊ばしたでございましょう」

「……ウむ、……何？」

反問するような顔を持ちながら、尊氏は、大庭の大きな平石へ腰をおろし、

「いい年をして、具簡はなにをいうか。復讐とな？　——そんなおろかな妄執を尊氏は念頭にもおいておらん」

と、すこし叱りきみな口調でつづけた。

「やれ、義兄のあだ、子のかたき、親の怨みのと申し合っていたら、弓矢の本道などは見失われてしまいうだろう。それのみか、復讐は果てなきまたの復讐を生んでゆく。永劫、

修羅の殺し合いを演じてゆくほか世に何を残す？　……。ばかな。われら弓矢の家の使命

とはそんなものでない。……ときによりあえない犠牲を身内に見るもぜひなく、英時どの

など、真にお気のどくなお人ではあった。とはいえ、しよせん幕府と共に末路をいさぎよ

くなさるほかないお立場でもあり、それがそのお人の弓矢の大道であるならさぞ御本望で

あったろう。——尊氏はそう思う。そう思うて今日の御邂逅に、地下へ一言、ごあいさつ

を申したまでだ。恨みの何のと、そんな小義にとらわれて、愚痴なお手向けしたわけでは

ない」

いくさは復讐でない。復讐のため戦はしない。

尊氏の弓矢はもつと大きな抱負と使命にある。そんなケチな……と彼は笑う。言い終つて笑つたのである。

「……………」

叱られた大友具簡をはじめ、筑紫諸党の大將輩は、ほつと、みな色を持ち直した。それまではたれにも澱んでいた一抹の危惧だったものも、恩怨すべて、尊氏のことばで、すかつと、一掃された感だった。

「ときに。道鑑」

と、次は島津貞久へむかい、彼はすぐ、こう訊ねていた。

「ここ博多の探題所は、英時どの滅亡のあと、大友、島津、少弐の三家が寄合にて、九州の国事を視て来たというが」

「されば、以後は探題と呼ばず、松ノ口寄合衆と称え、三家の合議で治政してまいりました」

「その一員、少弐妙恵は太宰府で忠死いたした。いまからは、子の頼尚に妙恵の職をつがせよう」

これ一つでなく、尊氏はその日に戦功のあつた大友へも島津へも、また宗像、龍造寺、

松浦、草野の諸党の将へも、それぞれ、なにかのかたちで賞をやった。——いかに彼が九州諸豪のこころをつかむことに氣をつかつていたかがわかる。

即刻。

町にも町布令^{まちぶれ}を布^しかせ、人心の安定につとめさせた。——逃げこんだ残敵の自首して出るのやら捕われて来る者などが、夜どおし門に絶えなかつた。

さらには、前線からの伝令も、しきりに来ていた。

武藤^{ぶげん}豊前ノ次郎という者が、

「頭^{こう}ノ殿^{どの}（直義^{ただよし}）のお使いにて馳^はせまいりました」

と、尊氏の前へ出たのは夜明けがたであり、尊氏も夜来^{やらい}、物ノ具を解かず、大庭^{とばり}に幕を張^{たて}らせ、楯^{たて}のうえで、ほんの仮寝をとっただけだった。

「次郎。使いのおもむきは」

「は。頭ノ殿には、はや昨夜のうち、太宰府へお入りあつて、降参人あまたを入れ、いまは宰相の光臨をお待ちするばかりの由。次郎、お迎えにまいってござりまする」

「疾^とう来いと^{むね}の旨か」

「博多から太宰府まで、五里の道、もう敵の残軍は一兵もおりませぬ」

尊氏はうなずいた。

博多、箱崎に抑えをとどめて、本軍はその日、太宰府へ転進した。

直義は、水城ノ址みずき あとまで出て、兄を迎え、共に、原山の陣所へ入った。原八坊の一つ四王院がすでに営えいとして装よそおわれている。

着くとすぐ、尊氏は、きのう以来の戦果や降参人の実数などをつぶさに聞きとった。そのあとで、直義は、

「このたびの大捷は、すべて人じん力りきとは思えません。今となってみると、ただただ神の御加護という気がします」

と、彼に似に気げない謙虚で言った。——が尊氏は、多年つちか培かっていた沃野よくやに鎌入かまいれをしたま
でのこととし、すぐ、別な旨むねを言いだしていた。

「喪もに服して、今日から七日の間、尊氏は酒、魚鳥を口にせず、別べつぎ行よう（精進しょうじん潔斎けつさい）
を執とろうとおもう。そしてあすは内山にて、亡き妙恵とむらを弔うであらう。衆僧に用意をつた
えておくがいい」

あくる日、尊氏は、直義や日野賢俊けんしゅんをつれて、内山の有智山寺うちやまにのぞみ、少式妙恵
の霊をねんごろに弔った。

法会ほうえにつらなつた筑紫つくしの諸将は、犠牲者への心からな傷みいたを尊氏の姿に見て、「——このような將軍へなら、身の将来をこのひとへ託しても悔いはない」と、みな尊氏への信頼を一ばい深くしたようだった。

わけて、少貳頼尚よりひさは、

「かかる破格な御供養をたまわり亡父ちちには死し花はなが咲いたようなもの。さだめし地下でよろこんでおりましょう」

と、法会ほうえがすむと尊氏の前で感泣かしていた。

けれど前夜いらい、尊氏が喪もに服して「魚鳥を口にせず」としていたため、なんとなく、陣中、土気も揚がらないふうだった。

で、頼尚はその晩、尊氏の営所へ、わざと鮮魚や野鳥の一ト籠を献上に持って出て、

「十二刻とき（一昼夜）の御別行ごべつぎよう（服喪ふくも）だけでも、このさい過分至極なのに、もしお体にもさわつては一大事ですし、また、陣中どこなく銷しょう沈うちんのていにもござります。なにとぞ、ご服喪は今日一日だけのこととして、おすましを願いまする」

と、進言した。

尊氏は、聞いて、

「それも一理」

と、うなずいた。

そこで、彼が持つてきた魚鳥をさかなに、杯を用意させ、

「諸將、兵士の端々にまで、こよいは酒をやつて、喪は一日かぎり、と、触れ直せ」

と、その夜は、精進落しの酒宴を開き、彼も大いに酔ったということである。

これなども多分に尊氏の政略だったにちがいない。武將尊氏であるよりは、彼はつねに政治家尊氏であつた。またそこに、より彼らしい真価もみられる。

多々羅の一戦などでも、単騎奮迅の猛は、決して、彼のよくしたところではない。――

――が、大友具簡らの油断ならぬ老武族のこころをもよくつかんで、博多から太宰府に入つたあとでも、いかにそれらの「他郷の他人」で――そして勇豪な――九州人を心服せしめるか。それに心をくだいていたあとがみえる。

たとえば、妙恵の追善にしても、その諷誦文（悼辞）は、自身が親しく筆をとつていた。その文は「歴代鎮西要略」にあるが、ここでは略す。

またおなじ「鎮西要略」には、尊氏がこれと同時に、九州の諸武士へ、勸賞していたこともみえる。――戦場でのちをおとした者の妻、子、その縁類、郎従にまで、いたわり

と次の勇氣を与えているのである。

こういうあいだにも。

むろん菊池攻略と、他の反尊氏勢力への追撃は、着々、すすめられていた。——多々羅にやぶれた菊池武敏は、そのご、四散した味方をよびあつめて、筑後の黒木城に拠り、戦力の再編成に他念もない。

尊氏は、令して、それへ。

仁木義長と上野頼兼の両大将をさしむけ、九州では松浦党をその先鋒として攻略に急がせた。すでに三月もなかばに入っていたのである。

菊池党のほか。

日向には、肝付兼重と、伊東祐広などの宮方が、

「なんで、尊氏ごときに、九州を思いのままにさせてなろうか」と、あくまで頑強な抵抗をしめしていた。

尊氏はその方面の地理人情にあかるい島津道鑑を主力に、腹心の畠山国清を付けて、「およそは、征伐が目的ではない。ただ邪けを打ち挫く分にて、たたかいの目標は足るぞ。

——あとは高ノ師直よりの執事の令に従つて去就いたせ」

と、いつて発^たせした。

師直の執事^{しつじれい}令を、とくに重く出先の大將たちへ尊氏がこう言いふくめていたのは、す
 でにもう尊氏の心のうちでは、九州の地を去つて、再^{さい}挙^{きよ}、ひがしへ軍を回^{かえ}すの用意が――
 ひそかに、急がれていたからだろう。

一面。菊池の黒木城の方は、

三月十七日

よせて
 寄手

ことごとくこれを破^は却^{きゃく}

菊池一類は

本地へ向つて潰^{くわい}走^{そう}のまま

お味方総勢

目下□追撃に移りをり

肥後半国以上も

はや風^{ふう}に靡^{なび}いて御座候ふ

との報^{しら}せだった。

これが出先の、仁木、畠山の二大將から、尊氏のもとへ、通達されていたところ。——彼はすでに、まったく、べつな軍務と指令に、あたまのかぎりをはたらかせていた。なにかといえば。

九州津々浦々の船を、また、それに要する手馴れの水夫楫取たちを、博多の一カ所に集めさせることだった。——大挙して、ふたたび上洛の用意であるのはいうまでもない。

そのため、博多には、一色ノ禅門範^{のりうじ}氏を^{おいて}、それらの運びを総攬^{そうらん}させ、また託^た磨^{くま}之親^{ゆきちか}を、わき役として、師直から出す執事^{しつじ}令^いをぬかりなく進めることに努めさせた。船集めは、大事業である。

遠くは、薩摩^{さつま}、日向^{ひゅうが}から。もちろん豊前^{ぶぜん}、肥前^{ひぜん}の沿海からも徴集し、しかもそれは戦艦として使える堅牢な船質でもなければならぬ。

さらに、ともなう糧食やら馬匹、おびただしい数量の武器、征矢^{そや}。じつに容易なしたくではない。

しかし、この規模^{きぼ}と、またそれのよく行われてゆく実力とをみて、いまは九州の各地にひっそくしていた武士もみな出て来て、尊氏の軍門へくだった。——残るものは、日向と肥後とで、なお抵抗をつづけやめない一勢があるだけだった。

しかもその菊池武敏は国境の第二戦でまたやぶれ、つづいて合志郡鳥栖ノ原でも負け、ついには、本国菊池郡の大琳寺ノ城まですてて一族深い山間の地にかくれてしまった。——不撓不屈な菊池だましいの本領である。——そこ北筑後から西肥後の山谷へ隠れてしまつては、もう寄手は、幾万の兵力を以てしても、彼らに手はとどかなかつた。自然、その方面のたたかいも終熄して来た頃である。——ある日、一色右馬介が、遠い河内の使いから歸つて来た。そして、さつそく、太宰府の營に、主君尊氏を訪うていた。

ひそかに、待ちかねていたことだつたろう。尊氏は、

「介。立歸つたか」

と、すぐ会つて、彼の長途の労をいたわつた。

右馬介が尊氏と会うばあいは、いつも人払いをして二人きりになるのがつねで、いまでも侍座にはたれひとりいなかった。

「して。河内の方は」

と、尊氏に何よりもまず、その吉左右を先として、

「河内では親しく正成に会うたか。また、首尾はどうであつたぞ」

と、その成否にかけていた密かな熱意のほどもただならぬ訊き方だった。

それだけに。――介は、

「はッ……」

と、いったのみだった。主君の期待にそえずに帰って来たむなしがつらく、

「されば、せっかくな御秘命をうけたまわって参りましたが、いかんせん、河内どのお心はかたく、事は不調に終りましてござりまする」

と、おもてを伏せた。

「ふ……ウむ」

あきらかな失望というよりも、もつとつよい落胆の色を顔いっぱいにじませて。

「では、正成とのはなしは、ついにつかずにしまったのか」

「お使いとして、介のいたらぬところにもございましょうが」

「いや、そちが至らぬの何のと申す仔細ではなからう。さきは楠木河内守。ことわけは、よう囁みくだいた上の返辞であつたにちがいあるまい」

「じつは、河内の水分へまぎれ入ッて、当の河内どのへ近づくにも、さまざま、心をくだいたことにございましたか」

「さもあるう。そして」

「金剛山の人なき場所で、まったく、ただ二人きりでおはなし申すよい機会に恵まれましたなれど……」

「この尊氏の胸は」

「ことばを尽しておつたえ申しあげました」

「が、正成は、一笑に附して、耳もかさぬ態であつたのか」

「いえ、さらさら、さようなご態度ではございません。……むしろ、ご謙虚に」

「謙虚に」

「身は河内の一小武門。足利殿といえは天下の武家中の名門。さるを、そのようなお人よりの知遇は身に余る過分なれど、仰せられての上のことで」

と、介は、正成が自分へ言つたことばどおりを、寸言も余すなく、また誇張もせず、前後一切の様子とともに、尊氏へ、そのまま語つた。

「……………」

終始、尊氏は瞑目して聞いていた。

——介のつぶさな報告を聞くにつけ、正成を味方にと望む、彼の正成にたいする愛執と

惜しみはむしろ、いよいよ募るばかりであるらしい。

ひとり中央といわず、この九州でも、武族間における離反雷同のあさましきは、いやというほど、四圍に見てきた彼である。なかなか正成への未練は多い容子であつた。しかし、あきらめるしかない介の報告なのだ。尊氏はやがて独り言のように。

「……そうか!」と、深くうなずいた。いたずらな嘆声も出せないほど、彼には正成の心もよくわかつていたのである。

すでに、あきらめ顔の尊氏は、こう彼をねぎらつた。

「介。大儀だつたぞ」

「なんの、面目次第もございませぬ」

「いや、そちのせいではない。……が、もいちど訊きおく。……正成はことばのさいごに、しよせん、この尊氏とは、異なる道をあゆむ者、ゆくすえまでも相容れぬ敵ぞと、きつく申し切つたのだな」

「さようで」

「永劫の敵とまで申したか」

「は」

「そしてまた……。正成は今上きんじょうの御一方にちかいまいらせた一朝臣あそん。さよう、江口の遊女おんなのように、世を浮舟と渡る上手なすべは知り申さぬと」

「仰せられてござりまする。御苦笑のうちに」

「いや恥かしいことだった。そちのつみではない。そちを密使にやった尊氏の不覚だった。尊氏という者は、人をみる明めいがないとおもわれたことであらう」

「……………」

「その一点はいまいますが、荒磯あくたの芥あのなかに一粒の真珠を見たような心地はする。——いやこの尊氏の前途にあたって、そのようなゆゆしい大敵が待つかと思えば、尊氏もまた、いちばいな智と勇をふるいおこさずにはおられん。珍重ちんちょう。もうよい……。介、充分に休息をとれ」

この日頃であつた。

介の帰陣と、ほとんど、時をひとつに、播磨の赤松円心からの急使が、太宰府の営に着いていた。

状には——

三月初旬しよじゆんこのかた

新田金吾（義貞）ノ大将

当城（白旗城）を取籠とりこめ

防禦おこたりなしと雖もいへど

兵糧、不用意

万一にも

御帰洛、延引えんいんあらば

城方しろかたの結束も

堪忍かんにんせしめ難し

早々さう

御進発 急がれたく……

云々しかじかとあつて、事態の容易でないことを、訴えて来たのであつた。

尊氏が西下のさい他日を約して、山陰、山陽に残しておいた仁木頼章よりあきや今川駿河守な

どからも、同日付けの飛脚が、前後して、尊氏の手許へ着いた。

みな、一様に――

御東上、延引となれば、とうてい新田の大軍はささえがたい。急ぎ、御進発を

と、いまや尊氏の再上洛を首を長くして待つ声ばかりなのだった。

——かくて

歸洛の御評議あるも

衆言、たちまち

両議に別る^{わか}

とは「梅松論」が言っているところで、要するに、準備は未^{いまだ}しとなす尚早論^{しょうそうろん}と、即刻東上をよしとする意見とが二つにあったものとみえる。

が、尊氏は、即刻東上の方を取った。

元々、彼のはらは早くからそこにあつたらしい。——彼は約一カ月ほどしか太宰府になかったが、そのあいだ、太宰府から他の戦線へは、いちども動いていなかった。——そしてただ執事師直^{もろなお}を督して船集めに専念していたものである。——で、大小数百艘の船は、ただちに九カ国の兵と馬や食糧を満載して、博多湾をひがしへ出てゆき、尊氏自身は、べつの一軍をひきいて、四月三日、陸路を筑前^{ちくぜん}芦屋ノ浦へと急いでいた。

さんかいそうもん
山海相聞

はい。

じつに早かった。

われながら、尊氏はいま、薄れゆく九州の地をかえりみて、船上からそう思う。

さきに赤間ヶ関（現・下ノ関）から九州へ渡ったのは二月二十日。——そしていま、芦屋ノ浦からその舳^{みよし}を再度、赤間ヶ関へ回^{かえ}している今日は、四月七日。その間^{かん}、たった四十六、七日でしかなかった。

「……思えば」

これは何の力だったのか。尊氏は自分に慢^{まん}じ切れなかった。直^{ただよし}義はたんに神明の御加護とそれをいつていた。が、彼にはそれとばかりもありがたがつていられない大きな責任感と、また現実の勝負とが、まだまだ前途には果てなく横たわっているのである。

「……つるぎの刃渡りは、そう何度も図^{あた}に中る芸ではない」

彼は、海峡の船中で、大いに思い直すところがあつたらしく、

「師直。船はこのまま府中（現・長府）までやれ。串崎^{くしぎき}をめぐつて、そこへじかに」と、俄に、針路^{しんろ}の変更をいいつけた。

師直は、意外として。

「では、赤間ヶ関へは」

「立ち寄るまい」

「ですが、御牒ごちようによつて、長門ながとの厚東こうとうノ入道、周防すおうの大内義弘よしひろ、そのほか大島義政なんども、みな、人数にんずをあげてお出迎えに出ておりますが」

「いや、それへは、早舟を一そう遣やつて、云々しかじかの由を、沙汰がえ申しておけばよい」

「は」

「赤間から府中までは、わずか東へ一里少々。かくべつ、彼らの当惑にも相なるまいが」

「かしこまりました」

かくてその夕、尊氏の主船隊は、串崎を迂回し、長門ながとの府中ノ浦へ着いた。

予定は、赤間ヶ関に上陸、後続の船隊を待つて、ただちに、東上の戦機へうごくはずだったものである。それが府中と変更したので、陸上に迎え出ていた側ではいくら程近い府中にしても、いろいろな手ちがいにはちがいない。

まもなく。

尊氏とはべつに、博多を発した九カ国の九州軍も、ぞくぞく、赤間ヶ関を見過すごして、

海峡をひがしへ通つて行つた。——海峡附近の浦人たちは「……物々しきよ」と、目を見はつた。彼らがざつと数えただけでも、次の日へかけて、ここをひがしへ通つて行つた船影は大小四百余そうをくだつていない。

しかし尊氏は、この船舶や軍勢でも、なお足らないと観たのであつた。九州は彼にとつて多分な冒険であり、俗諺にもある——運と岩茸は危ない所にある——というその岩茸を岩頭によじ登つて採つたようなものだが、これから臨む東上には、

「運はない。力と力。實力の差だけがあるのみ」

と、まったく用意を革めていたものらしい。

按ずるに、軍ももう一倍の充実と作戦の練り直しが要る。——首を長くして急援を待つ赤松の白旗城も、その他の味方も、すでに尊氏がここまで来たと知るならば、ここ一番の持ち支えはするだろう。——尊氏はそう見たのである。そして先を急ぐよりは、まず充分な必勝の準備をと、それに重点をおきかえていたのであつた。

数日のうちに、浦々は船に、陸は軍馬にうずまつた。

ここから尊氏は、諸国の武士へ教書を発して、

——急ぎ参じ候え

と、東上一致の大同をうながした。

兵はふえ、兵糧も集まり船も寄つて来る。ここは結集と団結に地の利であつたのみでなく、こらい古来、

くしぎぶね串崎船

と名のある串崎も、遠くない。

尊氏は、長門ノ守護、厚こうとう東ノ入道武実たけざねを呼んで、

「串崎の腕ききの船頭どもを、厚くもてなして、水軍に配属するよう」

と、いいつけた。

ところが、串崎の船頭は領主でもうごかしえない独自の自治と特権をもっている。――

というのは、源九郎義経が平家を壇ノ浦に討ったさい、その水案内みずさきにはここの串崎船が先陣をつとめ、その功で以来「――日本國中、津々浦々、どこに寄つても、串崎船は公役を受くるに及ばず」という公役免除の墨付すみつきをうけており、いかなる軍官の命でも、おいそれとは応じない氣質かたぎをもっていたのだった。

しかし彼らもこんどは、

「足利殿の御用とあれば」

と、進んで課役に応じ、屈強な串崎男八十人は水夫の群れに投じてきた。中には赭顔白髪やがんの老船頭もいて、これらは「風見」「水見」といって、内海の水路や天気癖ぐせなどは掌てをさすようにそらんじている海の古老たちだった。

すでにまったく準備は成ったといっている。

もちろん、このあいだにも、尊氏の急援を、今日か明日か——と待っている播磨はりま、備中方面の味方へは、忍びを放つて、

「早や尊氏はここまで来ているぞ。九州、四国も挙げてわが麾下きかにあれば、不日ふじつ、ごく近々には馳せのぼらん。それまでの咏こほえだ。齒の根を嚙んで、新田勢を食い止めていよ」

と、激励していた。また、あらゆる手段を講じて、この食糧を備中、播磨の味方へ密々輸送もさせていた。

けれど、左右の諸将は、ようやく、尊氏の心裏をうたがい初めていた。——なぜなれば九州ではあれほど迅速な行動をみせていた尊氏が、

「なぜか？」

と、怪しまれるほど、ここではおちついていたらからだ。

ここ長門ながとの府中滞陣も、いつか二十日はつか以上になっている。——するとここに果たして、

尊氏が氣にかけていた一報が九州から聞えた。

それは菊池党がまた、威勢をもりかえしてきたことだった。

——尊氏が九州を離れたと知るや、菊池、阿蘇の両党が、日向の伊東祐広すけひろ、肥後八代ひごやつしろノ庄の内河彦太郎などと呼応こおうして、ふたたび、氣勢を揚げはじめていたのである。わけて八代の内河党は、名和長年の賀むこ、彦太郎義真よしざねのひきいるところで侮りあなどがたい。

「それよ」

尊氏が、人知れずおそれていたのは、前でなく、後ろだった。九州の再燃さいねんにあつたのだ。彼はすぐ、少なからぬ船と兵力を割さいて、仁木義長にさづけ、即日、在九州さいの味方の加勢にあとへ引つ返させた。

もし九州の再燃が悪化して、菊池以下の宮方が、東上の軍を追ッて来たら、これはなかなか一大事である。

おそらくは首尾両端の苦戦を途上で余儀なくされよう。そしてせつかくな壮図そうとも、乱脈な状におちいるしかない。

いや九州ばかりか。

石見地方いわみでも、宮方が起つて、黒木城に兵を集めたとかの風聞が高い。——要するにみ

な、尊氏東上の風ふうを聞き、その背後を突こうとする兆きざしした。

で、尊氏は大事をとり、約一ト月を、長門ながとにすごした。——しかし、恃たのむ播磨の赤松の城も備前、備中の形勢も味方の危急をつげる声ばかりである。そこで尊氏も、

「いまは」

と、腹をきめ、全軍へ向つて東上の令を出した。

四月末であり、舟艇しゅうてい、戦艦、すべて軍船の艤装ぎそうをした大小五百余艘そうの船影は、その

日、府中豊浦とようらの海を出て行つた。

これが着いた先は、周防すおうの釜戸かまどノ関（現・上ノ関）で、尊氏はここから安芸あきの厳島神社へ代参の使い舟を派し、

五月一日

付けの願文がんもんを以て、武運の長久を祈っている。

すすんで、備後の尾ノ道に入港したのが、五月五日のひるだった。

「——男の節句せつく」

と、尊氏は知っていた。

「酒酌くもう。重五の祝いだ、土地とちの美酒うまさけを酌くみながらさいごの軍議をとげようぞ」

おもなる大将をみなつれて、尾ノ道の山ぞい町からすぐ上の浄土寺へ休憩に入った。
 浄土寺の僧、道謙は、

「これはまた……」

と、俄な申し入れにうろたえはしたが、しかし寺中をあげて、尊氏や直義以下のために、客殿を挙げ、この不時の珍客たちの憩いに供えた。

「住持は道謙と申さるるか」

直義が、あいさつを受け、また、こういった。

「——当所は古くから備後酒の名のあるところ、万葉にも吉備酒の歌さえみゆるの」

「は。御意で」

「何やらの書にも——ソノ味ハ醇厚、久シキヲ経テモ損セズ、故ニ古ヨリ大宋、南蛮ニ往来スル倭船モ、必ズココニテ酒壺ニ吉備酒ヲ満タシ、長キ船中ノ用ニ充ツ——とか。……和上、そのような美酒をわれらへひとつ馳走して給わるまいか」

「いとおやすいことにござりますれば、しばしお待ちのほどを」

「おう急がいでもよい」

軍議はそれのしたくが出来るまでのあいだにすすめられていた。すでにあらましは船中

できまっていた事項でもある。

すなわち、ここまでは、水軍編成に集中してきたが、はや備中は目の前に来ている。備中福山ノ城もあぶないといわれ、笠岡、玉島の辺にはすでに敵、新田方の先駆が、見えつつあるとの情報もある。――で、どうしても上洛の東上戦略は――海陸軍が二タ手となつて併せ進んで行くのでなければならなかった。

やがて、酒が出る。――ヒタと、軍議の声はやんで、寺僧の一人へ、尊氏が言っていた。
「……寺僧、硯と料紙すずりりょうしをかしてくれい。一つ二つではこまる。杯の数ほど、硯もたくさんに」

「ほ。お硯を」

「ウむ。なるべく多く」

「かしこまりました」

「いや待て」

と、尊氏はその寺僧へ、

「和上わじょうの道謙にも、これへまいって、共に、連歌れんがをして遊ばぬかと申すがよい」と、言いやつた。

さてはこの座をそのまま連歌の会とするおつもりであつたのかと、直義やほかの諸将もやつとその意が解けたふうだつた。

杯もめぐつて。

「なるほど」

人々はみな、土地の醸造をまず賞めた。

「これが、吉備の酒か」

「どこがちがう」

「いや、ずんと佳い。東国酒とはくらべものにならぬ」

「それに今日は重五の節句だ」

「さよう、男の日」

「いまや曠れの御上洛、その途上にある美味さも心に加味されていよう。……お。おん僧もこれへ加わり給え」

と諸将は、それへ見えた道謙にも、座をわかつて、藹々とみな仲よく頬を染め合つた。

道謙がやがて言った。

「かかるお忙しい御途上ですのに、愚衲ぐのうにはどうも何か意外な感がして相なりませぬ」

「なにが、意外」

と、直義ただよしがたずねると、和上わじょうは齒にきぬを着せぬたちの者とみえて。

「愚衲ぐのうらの心にある常識わきまえでは、およそ関東の武家方は、武弁殺伐ぶべんさつぱつ……ただそれだけの者としかつい心得ておりませなんだが……。容易ならぬ先の軍いくさをまえにして、悠々と、連歌のお催しあるなどは、何やらゆかしい、古の武者を偲しのばせられまする」

「はははは。関東酒なみに、われら東国の人間どもも、味ないものに観られていたか」

「いや、今日からは、人にもさような誤解あやまりは、篤とくとたしなめてやらねばなりません。い

なか者の目の狭さ。愚衲も恥じ入ったことにござりまする。では、おん大将より御題ぎよだいなと賜わつて」

と、道謙の口吻くちゆうは、なお尊氏の文事の素養をいくぶんうたぐつて、それを量はかるような容子えいこでないことでもなかった。

「詠題えいだいか」

尊氏は、ちよつと考えて。

「……普門品ふもんほん念彼偈ねんびげ（観音經）の一句一句を、各が詠題に分け持つて、巻をおさめたな

ら、尊氏が浄書のうえ、当寺の法楽観音の宝前ほうぜんに献けんじたてまつること。いかがであろうな」

「それは」

と、みな尊氏の趣向しゅこうに興きようじて、しばし風流陣の苦吟に遊んだ。

まず、尊氏が、

弘誓深如海くぜいしんによかい

の五字をとって、

わだつみの

深き誓ひのあまねさに

頼みをかくる

法の舟のりかな

と詠じ、つづいて弟直義は、

火坑くわかう変成池へんじやうち

を題に、

さだまれる

姿の物になき故に

たやすく火をも

水と為すらん

そのほか、執事師直しつじもろなおやら、つらなる諸大将もみな、一偈いちげいちえい一詠いちえいずつのかたちで、三十

三首の歌を作り、即座に、尊氏はそれを巻物に清書して、寺へ納めた。

尊氏たちは、まもなく浄土寺を出、その夜のうちに船で頼ノ津ともつへ渡った。

全軍は、そこでただちに陸海軍の二夕手にわかれた。すなわち。

將軍（尊氏）は、執事の高ノ師直や関東いらいの宿老しゆくろうをつれて、水軍のお座船（旗艦）へ。

また。――下御所しもごしよ（弟、直義）は、陸軍をひきいて、高ノ師泰こうもろやすを旗本頭がしらとし、少貳

ノ頼尚よりひさを先陣に、筑紫、長門、周防、安芸、備前、備中の兵をこぞつて陸上に行く。

途中も陸海両軍は、緊密な連絡をたもちながら、東上をすすめて行くときまり、五月十日、頼ノ津ともつを一せいに発たった。

陸上七万騎。

軍船千百余艘そう。

あわせて、八万余騎と公称したが、もとより実数ではなかった。けれど近来、世人の覚えにもない大兵力であることに世間疑った者はない。

これが陸くがを行き、海を掃はいて進んで行くさまは、けだし壯觀をきわめたであろう。「梅松論」の筆者も、

船路、陸地

同日に御進発なり

しばしがほどは

両々、見通みかよはして

船、陸くがを呼び

陸くが、船に応こたふ……

と、いつている。衝しょうてん 天の意気、思うべしで、海上には、尊氏の乗船が、数百そうの

船列の中に、二引両の紋幕もんまくをヒラめかせているのが望まれ、陸路には、先陣をゆく少弐

頼尚の、綾あや蘭い笠がさの旗じるしが、あざらかなほど見えたという。

ところがやがて、海上では一ト騒さわぎが起っていた。

この船列が、水島灘みずしまなだへかかった日のことである。先頭を切きッて哨しょうかい 戒かいして行く串崎

船の檣頭しやうとうに、

敵アリ

御用意

の赤い信号旗しんごうぼたがのぞまれたので、全船隊は「すわ！」とばかり船楯ふなだてにむらがり立つて、海ばらの八方に、眸をこらしあつたものだった。

脚の速いはや串崎船は、ひっきりなしに、前方の状況を、中軍のお座船へ、報告に漕ぎ返してくる。——それによれば、楠木の謀はかりで、正成のひきいる水軍が、ゆくての塩飽島しめくじま、ほか島々の島蔭に、待機している様子だ——というのである。

「なに、楠木勢が」

と、それだけでもう、どの船でも舷々げんげん口々くちぐちな騒ぎだったが、かねて右馬介からつぶさな情報をえていた尊氏は、

「おちつけ」

と、左右を制し、

「正成に、さような船手はないはずだ。よくたしかめてみよ」

と、串崎船のほか、さらにべつな物見舟へ、一将を乗せて、見せにやった。

はたしてそれは見まちがいであつた。

島々の蔭で尊氏を待つていたのは、讃岐さぬきの土岐一族、伊予の河野党、高松の細川じょうぜ定

禅ぜんなど、かねがね今日を待機していた四国の味方だったのである。しかも、その船力は

数百そうの兵で、かくて驚きはよろこびと変つたものの、楠木の名は、その鬼謀神算の聞

えによつて、瀬戸内せとうちの船頭にまで、ふかく恐れられているらしいことを、あらためて、尊

氏はまたこの日にも知つた。

また、いちばい勢威を加えた大船列は、五月十五日、

備前児島こしま

の湾内についた。

ここは備前佐々木党の拠地である。加治、倉田、飽浦あくら、田井などの諸党に迎えられて、

尊氏は加治安綱の邸に入った。

久々にて御風呂おふろなど

おくつろぎあり

折ふしまた

その夜の満月に

黒雲二た筋すぢ

引渡して見えければ

軍勢みな合がつしやう掌てして

しばし拝し奉る……

とは、当夜の記録にあるところで。——まんまるな月に、二タ筋の黒雲がたなびき、その様さながら、足利家の軍旗二引両の旗のようだったので、一同おもわず合掌した——との情景が、いかにも目にみえるようである。

あくる日だった。

加治安綱が、おそろおそろ尊氏の前へ出て。

「昨夜は夜すがらな兵どもの騒音……。さだめし、お眠りづらかったでございましょう」

「いや、よく眠った」と、尊氏は氣にもしていず。「やはり浪枕よりは、陸おかの寝心地の方がずんとよい。物音など、何も知らなかったわえ」

「じつは、ここより遠からぬ所に、宮方の児島三郎高德たかのりなる者がおりまして」

「ム。千種忠顕ちぐさただあきの手について、去年、洛中の合戦でもよう働いたあの高德か」

「以後、国元の熊山に帰ッて鳴なりをひそめておりましたが、下御所しもごしよ（直義ただよし）の大軍が、

はや福山の城（備中・倉敷の西北）にせまツたのを見て、高德らは、しよせん、はば阻め難しがたと見たのでしょう。昨夜、一族三百余人、熊山の自邸を焼きはらい、はりま播磨ざかいの方へ、逃げ落ちて行つたものにござりまする」

こんな対話中の折だつた。直義の陸手くがてから、福山城をたツた今、攻めつぶしたとの捷報を早打ちしてきた。

その勢いを駆ツて、陸上軍は、大安寺（岡山市の西）の松田一族を打ち、すすんで三みつ石城（船坂峠）に突ツかけてゆく予定——と使いは口上を述べ終ると、すぐ馬をとばして歸つた。

尊氏も、また、

「師直。もろなおここも明朝は纔ともづなを解け」

と、命を出した。

海と陸とで、昼は呼びあい、夜は夜で、火光を揚げて、相互、ひよく比翼の軍となつて進むこと。それが作戦第一の約束だつた。

「申し上げます。ちと、ご猶ゆうよ予を」

「安綱か。何だ」

「今朝、はやお船出のさいにはございますなれど」

「汀では、軍勢がみな、纜を解いて、わしを待つておる。はやく申せ」

「疾くより、言上いたしたもののか、または時を待つて、申し上ぐべきか、つい迷うておりましたが」

「ふム……？　では何か、余り吉い事ではないのだな」

「いや、決して凶事ではございませぬ。じつは」

と、源太左衛門安綱は、少々思い余つていたらしいその一通を尊氏の手にささげた。尊氏はわけもなくハツとした。一見まぎれない、それは佐々木道誉の筆蹟であつた。

思いがけない――

しかし、備前佐々木党は、近江佐々木の支族であり、加治安綱にとれば、佐々木道誉は、つまり宗家のお人である。――ここで道誉の消息を見たとしてべつにふしぎはない。

けれど。……？

尊氏はその厚ぼったい書簡の重たさからして、何かふツと、胸が騒いだ。

「師直」

「はっ」

「ちと、乗船が遅れる。浦に待つ軍兵どもに、そのよしを触れしておけ」

尊氏は、いちど起^たつた室内へ、また戻つて、道譽の長い手紙を細^{こま}かな眼で端から解いて行つた。

手紙には、ると、以後の伊吹の城やまた足利家の根拠地——三河^{みかわのくに}国におこつた必然なともいえる——一変事を告げていた。

先月。

四月中のことという。

義貞の一族、新田左馬助義氏の軍が、ふいに三河を襲つて、吉良^{きら}ノ庄から一色郡のあたりを荒しまわつた。

目的は、郷党の手に預けてある尊氏の系類を生け捕ろうとするにあつたが、吉良、一色、仁木などの留守組も、おめおめ自分らの守護するお人を敵方へわたすような者どもではない。もちろん、防戦にこれ努めた。

しかし万一を恐れた道譽は、変を聞くと、ただちに伊吹から援兵を送つて、三河のさる所にひそんでいた尊氏の母上杉清子と、みだい所の登子^{とうこ}、ならびに嫡子の千寿王の三名を——ひそかに自分の伊吹城のほうへひき取つた。

が、その伊吹城も、決して安全な場所ではない。

尊氏の九州活動いらひは、伊吹へも宮方の疑いがきびしい監視をむけている。——いわば敵中の孤城にひとしい。——ただからくも、道誉が道誉一流の偽装と外交とによつて、たくみに、どつちつかずの消極的な小^{しょうこう}康をたもつてはいるものの、それも宮方の動向如何では、いつ「——伊吹をも、ふみつぶせ」と、新田方の兵が、攻めかかつて来ないとはかぎつていない。

かたがた、道誉は、

「ここも安心ならず」

と考え、尊氏の肉親と、系類のすべてを、一夜、湖畔から一船に乗せて、琵琶湖の彼方、まತ್ತたく、人の思いおよばない山間の地へかくしてしまった。

——というのが、道誉の手紙の全文の意味で、

さるが故^{ゆえ}に、

おん母堂さま

みだいどころさま

ご嫡^{ちやくなん}男、千寿王ぎみ

また。

かねて当城におあずかり申していた、不知哉丸いさやの君も、越前まえノ前ふじやしや（藤夜叉）も、いまはご心配にはおよびません。——それらの後顧こうこには、さらさら、ご懸念けねんなく、瀬戸内せとうち、山陽、山陰の軍路に大捷たいしやうをおさめられて、やがて曠はれの都入りの日を、鶴首かくしゆ、お待ち申しあげております……とも、手紙の末尾には、書きそえているのであった。

「……………」

尊氏は、読み終つて、ほつとした。忘れようとし、忘れてはいたものの、やはり彼の心の奥には、大きな弱身として、気づかれていたことの一つではあった。

雨期

古典太平記には、

備中福山合戦ノ事

の一章に、かなり多くの筆をついやしている。

足利直義ただよしの陸上軍が最初にぶつかった敵なので、わざと花々しく書いたものとおもわ

れる。が、城は小城にすぎず、兵数もまた少なかった。

それに新田方の江田貞経も勇将ではあつたろうが、東上軍の大兵のまえには、一トたまりもなく砦とりでをすてて潰走かいそうしたものにちがひなかった。

なぜなら、ここにかぎらず、新田方また宮方とよぶほうの陣営には、どうも一本に統一しているすがたがない。

或る者は、

後醍醐朝廷直々じきじきの綸旨りんじ

によつてと号しており、また或る者は、

金吾どの一昧

と唱え、おなじ陣営にありながらも、新田義貞こそが、盟主であり総帥そうすいであるとまで

の、強力な一致には、どこか欠けていたふうがある。

たとえば。

福山ノ城こうざんじょう（幸山城とも、後に高山城とも呼び、備後福山とは別）から近い熊山にい

た児島高德こじまたかのりにしてもまたそうだ。このさい、その高德についてすこし述べておく要もあろう。

天勾踐テンコウセンヲ空シウスル莫ナカレ

時二范蠡ハンレイナキニシモ非ズ

の詩を、かつて、後醍醐ゴダイゴが隠岐おきへながされる日の途中に、御旅みたびの行宮あんぐうの庭に、目に見て引つ返したあの高德だ。

詩は、彼でなく、大覚だいかくノ宮みやが書いたものである。——やがて天皇が、隠岐から都へ還か幸んこうとなつた曠はれの日に——高德もまた宮と共に、龍駕りゆうがにしたがつて都へ入つた。

大覚ノ宮は、以後、御父子のお名のりあいをとげられたのち、洛外の一寺に入り、高德くぼしよも窪所の一員としてお仕えしていたが、またふたび、あの乱だった。高德は七条口でよく戦い、兵庫にも参戦したが、日ごろ千種ちくさただあき忠顕と折合いがわるかつたので、それを機にまた元の、備中熊山の郷里に帰つていたものだった。

そこへ、こんどの、尊氏と直義らの東上である。

彼は、一議なく、

朝廷のおん大事

として、初志のままな忠節を、あらためて一族たちと誓い合つた。そして熊山の自邸を焼いて、新田義貞のいる方へ奔はしつた。——近くの福山ノ城へは行かず、播磨はりまへさして急い

だのである。これをもても、宮方全般の陣営には、朝廷への忠誠の声やら反尊氏の意気はあつても、司令一本の統御とうぎよに欠けていた点があつたのは否いなみがたい。

すでに、十八日ごろ。

直義の大軍勢は、破竹はちくの勢いで、備前和気郡の三石みつしへかかつていた。——船坂峠へかけて、ここは山陽第一の嶮けんといわれる砦である。

あらかじめ、直義もそこでは一大血戦をかくごしていたが、はや大風を知って散り退いた枯葉こようのごときものだった。敵は、ここばかりでなく、但馬境たじまから赤穂にまでわたる諸所の陣もみな引いて、一せいに、播州加古川へぞくぞく落ちて行くと聞え渡った。要するに、加古川は、総大将義貞のいる宮方勢の総本陣と、自然、大きく分つてきた。

刻一刻、海陸の足利勢は、もうついその、播磨のぼざかいまで上ツて来ている。ここで当然、

義貞は何していたか？

の疑問にぶつかる。

事実、尊氏がついやしてきた二ヶ月と、義貞の二ヶ月とでは、差がありすぎる。といつて、都の京雀が、いちがいに、

「……あたらこの期を、勾当の内侍の色に溺れ給うて」

などとしている蔭口は、決して、その真相を言い当てているものではない。

たしかに、三軍の総帥としては、勅を拝しながら、その都立ちも遅れてはいた。だが、その十日ほどは、多少、兵馬に休養をあたえたり、また下へも恩賞など頒けてやらねば、あとの士気もあがらぬような、期間であつた。

それに、あいにく彼が、瘡病をわずらつたことも事実である。——いや、その病をもおして、馬上都を立ち、播磨への征途へついていたほどだつた。

むしろ、悪いといえば。

この間に朝廷が、北畠顕家の奥州軍を、元の奥州へ返してしまつたなどの安易感にこそ、より大きな落度がある。

朝廷もここはすっかり小康をえた安心感にとらわれていたのである。——尊氏はしよせん再起もおぼつかなかう。かつ義貞が追討に向つたからはと、はや平和の夢を、むさぼりあつていたとしか見られない。

が、征途まず、義貞がぶつかった岩壁は容易でなかつた。

そのはず。——尊氏は九州へ落ちるにもただ逃げたのではない。丹波には久下一族をの

こし、但馬たじまには細川、仁木。播州ばんしゅうには赤松。そのほか、四国、山陽の諸所の要かなめ々々にはキメ石を打って、退ひいていた。——さて義貞が、尊氏を追うには、まずその一石一石せきから抜いてゆかなければ、山陽道は通りえない。

ひとつ、ここで考えられる疑問は。

なぜ義貞も水軍を編成して、一路、筑紫つくしへ向わなかったかという謎である。が、おそらくは兵庫合戦以後、宮方の手に保持されていた船数ふなかずがそれに足りなかったものだろう。——でなければ、もし海上で、尊氏方の伏兵に、背後でも断たれたら、どうしようもないという、戦略上の危惧きぐだったかもわからない。

いずれにしろ、義貞は、三月すえには、播州加古川に本陣をすえ、すすんでは、斑鳩いかるがへ前線司令部をおいた。そしてまず序戦、赤松円心のりむら則村の居城、白旗城を一気に抜くつもりだったのだ。

ここに、一説がある。

この官軍の大兵力をみて驚いた円心は、さつそく義貞の陣へ使いを派して、

「自分は腹からの敵対ではない。やむなく一時、尊氏に従った者。もし播磨の守護職を約束してくれるなら、降こうを誓って城を出す」

と言つて来たので、義貞はその請いを容れ、すぐ都へ急使を出して、赤松の播磨守護職を、朝廷に奏請した。——そのため、使いの往復十数日をついやし、またまた手おくれを重ねたという一話である。——しかしこれは、余りに義貞の武略を無能視したもので、信じられるふしはどこにもない。

とにかく。義貞の三軍はふるわなかつた。

公称六万余騎錦旗の兵をもつて、なおまだ、赤松円心の白旗城一つ抜けずにいたのだから、これでは彼へのいろんな誹りや蔭口がおこなわれたのもむりではない。

が、その原因は、勾当ノ内侍の色香でなく、円心の詭計でもない。一に彼の尊氏観が甘かつたところに起因し、尊氏が打ツて逃げた「退きの布石」を読み違えていたことに重大な錯誤がある。

元来。——播磨には新田義貞の所領地も一部にあつた。

面目上、彼は、

「どんな犠牲を払つても、ここはふみつぶせ」

と、白旗城の粉碎を、序戦第一の目標とした。——が、これもまちがいのもとで、その白旗城は、千種川上流のけわしい溪谷をはさんで、苔縄ノ砦と白旗城のふたつが、い

わゆる牙城がじょうのかたちをしており、攻めるほど、味方は死傷をかさねるばかりだったのだ。それだけでなく。北の但馬や美作みまさか地方から、いくらでも後詰うしろまき（応援）のできる強味もある。

——美作の菩提寺城ぼだいじには、これも尊氏がのこしておいた山間部隊がいたし、また備前には石橋和義かずよし、田井、頓宮とんぐう、内藤の一族もあつて、かたく連鎖防禦れんさを布しき、すべて義貞の前に、

「ここは通さん、通れるものなら通つてみよ」

の陣に陣を、山陽道に沿そつて、幾重いくえにも置いていたのであつた。——いや義貞をして、もつとてこずらせたのは、ややもすれば、後方を突いて来る乱波らんぱ（ゲリラ）であつた。

尊氏は、さきに。

あらかじめ、今日あることを察して、丹波に強力な味方を潜ひそませて行つた。

それは丹波氷上郡ひかみの久下弥三郎時重くげだった。

この時重は、尊氏が篠村しのむら八幡で旗上げをしたさいも一番に馳はせさんじた尊氏股肱ここうの一人である。——これに、仁木左京大夫頼章よりあきの一手も付き、氷上郡の高山寺城こうざんじから、たえず、加古川上流の溪谷くだづたいに下つて来ては、官軍のうしろをおびやかしていたのであ

る。——このため義貞は前面の苦戦のうえ、さらに後門こうもんの狼おおかみにもそなえを外はずせず、ついにさいごまで加古川の陣地を払うことができなかった。自身の床几しょうぎは、はるか斑鳩いかるがあたりまで進めながらなお、むだな兵力を加古川におかないわけにゆかなかったのだ。

「こんなことをしていたら、どうなるでしょう！」

ついに、業ごうを煮にやして言ったのは、弟の脇屋右衛門佐義助わきやうえもんだった。

「ここは、兄上の御指揮にまかせ、それがしは、それがし独自の作戦に出、山陽道を先へ蹴けちらしてまいりましょう」

かくて義助の一軍は、この膠着こうちやくをすてて、船坂、三石みついしの敵をやぶり、備前に入つて、福山ノ城をも抜いた。——けれどたちまち、足利直義ただよしの東上に会して、またひとまりもなく、元の道へ、押し返されて来たのだった。

「すわ」

となつた潰乱かいらんの兵には、見得もなかった。

三石、船坂の要害から敗走しつづけてきた兵は、

「いやもう敵は、とうもない大軍だぞ」

「陸くは六、七万騎」

「海にも千数百艘そくの船」

と、口々に言つた。敵の強大に輪をかけて騒ぐのは潰走兵かいそうへいの常ではあるが、一夜、有年ねの高地から赤穂沖の火光をながめた脇屋義助も、また「あつ」とその不知火しらぬいのごとき兵船の数に驚き——一気に斑鳩いかるがまで駈けとおして来て、兄の義貞へ、

「とてもこの陣容ではどうもなりません。もし尊氏の水軍がさきを越えて、兵庫へでも揚がつてしまつたが最後、お味方は腹背の敵にくるまれましょう」

と、総退却も即刻にとすすめたのだつた。

義貞もいささか慌てた。

「まず、白旗城をかこんでいる遠くの味方呼び返せ！」と。

が。山間深く入っていた味方は、そう急にもまとめられなかつた。——すでに城將の赤松円心は、待ちに待っていた尊氏の東上軍がはや指呼しこのあいだに來つたあることを知つてもいる。——城兵の勇氣は百倍していたのだ。——それと、たちまち城兵は、引きあげと見た新田勢へ追ひ打ちをかけて来る。——ために千種川ちくさがわの溪谷は、死屍に埋まり、血に染まつた。

このさいに、新田勢がうけた損害は、決して少ないものではない。

さきに、宮方へ合流するため、備前熊山を去った児島三郎高德たかのりなども、途中、一族郎党のあらましを打たれ、高德はわずか数騎となって、からくも、新田方の陣へたどり着いていたほどである。

「いまは加古川もよい陣地ではない」

「兵庫ひょうごへ」

「ひとまず兵庫へ」

義貞、義助の令は、全軍の将の合い言葉となって、播磨路は、ひがしへ押し返してゆく軍馬の影ばかりとなっていた。——こうして、ついに義貞の山陽道突破は、むなししい二ヶ月をついやして事成らずにはしまったものの、まだうしろには幾万の予備もあるとしている官軍だった。かつは兵庫の海、兵庫の山。そこは歴戦、官軍が勝利をえてきた吉祥の地だ。また義貞としては、よしや尊氏が幾万の兵を持って来ようとも、本来の勇と智略と、そして、故郷世良田せらたいらいの新田小太郎が面目にかけても、

「なんである、うすあばた面づらに！ 石の地蔵に！ おくれをとってなろうや」

と、いまや三軍の将帥しょうすいとしての決戦を期すと共に、自分一個と宿敵尊氏との、最後の対決も明日に迫ったものと思ひ、退路の馬上、人知れず唇くちをかんだ。

これが、五月二十日から二十二日頃までの状況であり、足利直義の陸の大部隊は、はやぞくぞく、敵の去った加古川へ入っていた。

一面――

海上は、これも五月二十一日の夕ごろ、波間も見せぬほどな大船列が、室ノ津むろつにかかり、やがて夜は、烏賊釣舟いかつりぶねのような無数の灯を近々と見せていた。

室ノ泊むろとまりの群船に一夜が明けた翌日だった。尊氏が坐乗ざじようの大船へ、ひる頃、一団しこうの伺候者しやがあつた。――奥地の白旗城から出てきた赤松円心則村のりむらと、一族の者だった。

「やあ、円心か」

「ごきげんうるわしゅう……」

「片手を頸くびに吊つておるが、怪我でもしたか」

「一昨夜、敵を追撃中、息子どもには負けじと、年がいもなく、ちと深入りいたしましたので」

「よい元氣だな」

「わが君におかせられても、いちばい、おさかな態ていに拝され、円心、こんなうれしいことはございませぬ」

「さぞ、待ちかねたろう。尊氏が東上を」

「いや、ご催促は申しあげましたが、疾風迅雷のお迅さ。……もう逃げ足づいた義貞を都のすみまで、追いつめるまでにござります。その御先手には、ぜび、せがれ範資、貞範、氏範らの若者輩をお使い願わしゅう存じまする」

「よい子持ちだの。——嫡男どもか。みんな前へ出ろ。わしが尊氏だ」

と、手ずから各へ杯をやり、また一族の輩にも、何かと、賞で物を分け与えた。その間に、円心は、

「お。ひとつ、ご酒興にこれをごらんください」

と、たずさえて来た一ト束ねの物を解かせ、おびただしき幟や小旗を展げだした。

「円心。何じやこれは」

「されば、これはみなわが白旗城を包围していた敵が、攻め口を解いて逃げ落ちるさい、道の諸所にあわてて捨て去った差物にござります」

「ほ。百旒を越す数だな」

「それよりは、篤、一つ一つの紋をごらんなされませ。この家々の紋には御記憶があるはずです。かつては、御麾下に従い、將軍の御馬前に働いていた輩の紋ではござりませぬか」

「む。……覚えがある。それもこれも、以前はわしに仕えていた奴よの」

「見さげはてた二夕股者ふまたものです。先に、わが君が九州落ちの御悲運と相成ったさい、たちまち節操をすてて、新田方へ降参した犬武士どもの旗差物にござりまするわ。……いやお目の穢れけがとは存じましたが、陣中の御一興に持参してみたまでの儀にござりまする」

「なにさま……」と、尊氏は雨露うろや泥にまみれた無数の旗を見まわして「——浮きつ沈みつの、流転るてんそのまま、波間の泡ツブでも見るようだわえ」

「つまらぬ物をお目にかけ、さぞ、御不快にございましょう」

「いやいや、いちどはこの尊氏に仕えていた者ども、憐れあわではあるまいか。思えば、これらの者の心中も、なかなか不愍ふびん……」

「え。ご不愍とな？」

「根本こんぽん、敵たる者は、どうしようもない。したが、さまでにはなくて、ただ生きんがための方向に迷い、やむなく旗を敵に託した者などは、また何かの機には前非ぜんびをわびて尊氏の許へ帰つて来ぬかぎりもない。……円心」

「はっ」

「旗は畳たたみ束ねておけ。尊氏が秘封とする。そしてそちの手に預けておくゆえ、持つて戻

れ。一切、人に他言することも見せるなども相ならんぞ」

その場にいた赤松の一族たちは、みな、尊氏の腹のひろさと、情のこまやかさに、ひどく感銘したようだった。わけて円心は、戦場でひろい集めた二タ股者の旗屑などを、わざわざ尊氏の直覧じきらんに入れたなどは、自分のいやしとかえりみて、いささか面目なかったものか、

「……では、兵庫御上陸の日も目前のこと。兵庫の戦場において、またお目にかかりまする」

と、早々にいとまをつけて、陸上へ返っていった。

この日ごろから、すぐそこらの担保いぼや飾磨しかまの山々も、白い雲か霧かの中に、漠々ばくばくと、見えなくなった。

五月。とうに雨期へはいっていたのである。

これまでわりに好天にめぐまれてきたのがむしろ僥倖で、その晩は、風さえ加わり、室むろ泊とまりの内うちでさえ、すべての船が高く低くゆられとおした。舷ふなべりと舷とがぶつかり合わぬために、ともづな番の兵は夜どおし声をからしていた。

「……さて、これは悪い模様になったな」

次の日、尊氏もいくたびとなく、みよしに姿をたたずませていた。もこととして、雨まじりの西風が波間をしづき立てている。――すでに今日とはと解纜かいらんを期していたのである。この日、陸上軍の直義ただよしからは、もう何の連絡も来なかった。おそらくはそのいとまなく、加古川以東へなおも敵を追いつづけているものにちがいない。

「……と、すれば」

尊氏は思案になやむ。

もう明石海峡あかしはすぐ目のさきだ。すみやかに退いた敵の義貞の覚悟のほどわからなくはない。必然、兵庫の要地に拠よつて、さらに予備の大軍を都からよびあつめ、陣をかため直していることだろう。

今は、すこしでも敵に時をかすのは当とうをえたものではない。それに直義ただよしの陸兵が、図にのつて、もし功にはやりでもしたら、明石の磯の隘路あいろあたりで敵のため手いたい目にあわぬかぎりもない。――と彼には案じられて来て。

「やはり出よう！」

と、はらをきめた。急遽、高ノ師直こうもろなおをして、全船列の水軍に、ともづなを解け！ 帆支度にかかれ！ と出港の令を出させようとしたのだった。

ところが、この風浪を案じていたのは、彼ばかりでない。それぞれ、各船の大將たちも、水夫かこんどり楫取をつかまえて、空もようを談だんじ合っていたのである。たちまちいろんな意見が出てきた。そして尊氏のお座船へ来てまず高ノ師直をとりまいていた。

「なに、將軍には御出港のおこころですと？ さアそれはどうかな？」

「海馴れた男どもは、みなこの空もようは測はかり難がたいと申しておる」

「いまは西かぜ、順風ともいえるが、月の出汐でしおの時刻には、風向きが吹きかわろうともいっています」

「もすこし、お見合わせあつてはどうか。とかく空グセの悪い五月の海……」

騒さわめきが内へ聞えたのであろう。船屋形のなかで尊氏の声がしていた。「師直、師直」と、再度、彼をよんでいるふうだった。

——召されて、そしてふたたび、船屋形の内を出てきた師直は、そこらに、濡ぬれ鷺さぎのごとく群れたたずんでいる諸將へ告げた。

「いや各、お案じにはおよばん。御命令は、ひとまずお差しひかえになった」
どの顔も、眉をひらいた。が、それで終っていたのではない。

「——仰せには、先もいそがるるが、船出も慎重を期さねばならん。待つがよいか、すぐ

出港が可か。ひとつ船頭會議をひらいて、彼らの意見にたださんとの御意。各もそれに列座されよ」

師直は言い終ると、ただちに、船屋形の外から胴ノ間いっぱいに、兵の手で蓆を敷かせた。上には、帆柱から支えばしらを渡し、苦や幕で雨除けの屋根を葺いた。

船頭會議とは、めずらしいことである。

このお座船にのりこんでいた串崎船頭の老練なのを初めとして。

千葉大隅守の船の船頭

大友、少弐の船にのつていた筑紫の船頭

厚東の船を操作してきた周防船の船頭

上杉伊豆守の「今度船」と称する舟軍——長門安武郡の椿ヶ浦の老船頭など……

みな、將軍の御前と聞かされ、何事かと畏れながら、船屋形の前にあつまつた。

やがて尊氏から直々に、

「忌憚なく、思うがままを、申しのべよ。戦にかけては、われらが手馴れだが、海ばらで

の「風見」「波見」はそのほうたちのほうが、多年の経験、われらよりは、はるかにすぐれた先達のはずだ。……どう観るな、きょうの風雨を」

と、意見を徴ちようした。

しかし尊氏の前を畏れてか、なかなか率直な声は出ない。呐々とつとつと述べる者もなくはないが、いつこうに明確でなく「――まずはすぐの御船出は、途中御難儀かとぞんじられまする」といったような類たぐいの意見ばかりだった。

が、なかで一人、椿ヶ浦の船頭だけは、

「てまえ一存では、この雨も月の出頃にはやみましよう。風はそのまま、変ることもなく、明朝までも追ッ手に相違さかたございません。お日向きは上々きち吉、御大慶に存じたまつりまする」

と、はつきりいった。

尊氏はこれを聞いているあいだに「ウむ」「むむ」と、二度ほどうなずいていたが、「椿ヶ浦の船頭、よく申した。そちの申すに従つて、やはり今日の戌いぬの刻こく（午後八時）にここを出港とさだめよう。ついては諸人どもも、それときまったからには、一切、天候の異議どうひよう雑評はやめにいたせ。ただ船立ちのしたくを急げよ」

これらのことはすべて「梅松論」にある記述である。大勢の言をいれず、ただ一人の老船頭の申し立てを採り上げられたのは、將軍の御真意、どのへんにあつたものかと、人々

不審にたえなかつたといっている。

風雨の戌いぬ刻こくといえ、海上はさだめし、漆うるしのごとき闇と白浪むろだつたであらう。室むろノ津つを出て、室のひがし杓しゃく子しヶ浦うらでいちど休んだ。大小の五千艘そくの船影が船陣ととのを整えていたのである。そして翌五月二十四日の暮れがたには、明石海峡を通過し、兵庫の沖に、その群影をみせていた。

青空文庫情報

底本：「私本太平記（七）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年4月11日第1刷発行

2009（平成21）年12月1日第25刷発行

※副題は底本では、「筑紫帖《つくしじょう》」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2012年11月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私本太平記

筑紫帖

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>